

# 金の星

Z32-B88



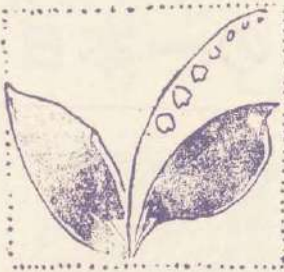
国立国会  
8. 3. 28  
図書館

第十号 第十月 第六卷

大正三十九年十一月一日發行

大正三十九年九月九日創刊





今学期も一番  
評判のよい王  
様製品を使ひ  
ませう

王様水

王様クレイモン

キングクレイモン

紙函入 一七色 一十二色 一十四色

新製品

罐入 一十二色 一十六色

小型 一八色

並型 一六色 一八色 一十二色 一十六色 一十四色

大型 一十六色 一十四色

十色 一十色 一十四色 一十六色

□發賣元

東京工業株式会社

東京市神田區通神保町六

滋強飲料

# カルピス

登山アルプス  
飲めよカルピス

酒類、食料品店、藥店にあり

自宅て  
中 學 校  
商 業 學 校  
卒業の力が  
がつく

中 學 講 義  
商 業 講 義

早稲田大學講義録

小學校を卒業して

以上の學校に行かれないといつて失望することは  
ありません

早稲田大學の中學講義が商業講義

のどちらかて獨學すれば

立派に學校を卒業した力がつきます

早稲田は獨學の少年を歓迎します

見  
送ります  
本  
行發  
早稲田大學出版部  
電話牛込區三ツ目三三三番

日 本 一 畫 嘸

巖 谷 小 波 著

岡野榮・小林繪吉・杉浦非水畫

四冊六冊  
全五冊  
各冊五錢  
各冊四錢

カタカナ文  
牛若丸・曾我兄弟・龍宮メグリ・車ト  
舟・オ馬ノ精古・ホアソビ・驅染・猿  
籠・象ノ遊ビ・鳥メグリ・ゴチノ葛ノ  
タシ・家鴨ト鷄・清正・蟲ノ世界・天  
神様・鼠・動物園・楠公・山メグリ・  
爲朝・兎ノ世界・牛

繪が踊つてゐます。  
字の唄ふにつれて、面白相に可笑相に  
悲し相に、また勇ましく、小波小波さんの  
日本一の畫嘸に童心のよきお友達

ひらちがな

桃太郎一寸法師・  
舌切雀・浦島・  
文調茶釜・猿蟹合戦・

勝山  
海軍  
取

オウギトオ

巖 谷 小 波 著

お月さま  
三十五夜おつきさま  
今にお出ましある時と  
太郎お花に待てゐる  
オトサリのお手にして  
第三巻より

四六各冊三冊  
各冊八錢  
送料各六錢

東京日本橋通

丸善株式會社

東京・神田・三田・丸

# キンイ善丸

用筆年鳥  
キンイナテア



すまりあもに店具房文もに店書のこど

## 世界少年少女名著大系第八編

# ギリシヤ 神話 オデッセ物語

四六判箱入美本  
本文百八十頁  
定価金九十銭  
送料金十五銭

ギリシヤの詩聖ホーマーの作であつて、世界中で一番古い、そして又一番面白い物語りとして「オディッセイア」として有名な物語りです。トロイの戦争に遙々海を越えて出征した勇士オデッセイが神の怒にふれ、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食となつて本國に歸る迄の物語りです。

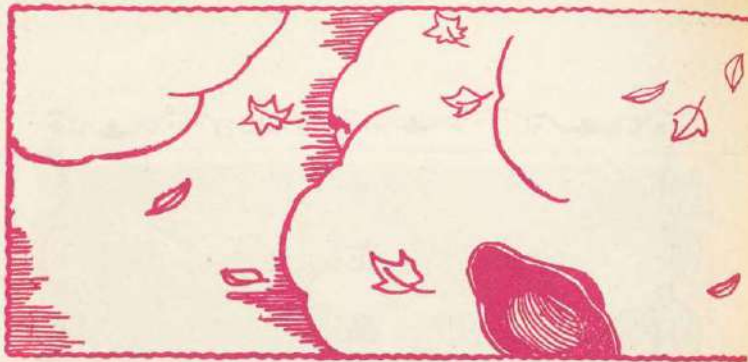
## 世界少年少女名著大系第九編

# シエークスピア物語

四六判箱入美本  
本文百八十頁  
定価金九十銭  
送料金十五銭

世界一の劇作者として有名なシエークスピアの芝居の中で、少年少女の讀物として面白いものばかりを選んで、物語り風に書いたものです。この本の原書はラムの「シエークスピア物語」よりも遙かに優れてゐるといはれてゐます。「あらし物語」「海意のまへ」「ベニスの商人」「がみくし」「真夏の夜の夢」等の夜ばなし等、是非一度は讀んで置かばいけません。

東京市外 田端三五一番 金星社 電話 振替東京五九五六番 小石川三五九六番



目次

第六卷 第十號

オランダの少年 (表紙・原色版)	寺内萬治郎
花島の秋 (口繪・三色版)	岡本 歸一
一刀を獸の面に口繪 (二色版)	寺内萬治郎
石山寺の秋の月 (童話)	(一) 野口 雨情
人間をとく草 (童話)	(二) 本居 長世
夕なき娘 (童話)	(三) 小島政二郎
家な茶目 (童話)	(四) 湊 守一
先生と茶目 (童話)	(五) 三井 信衛
魔術の舟 (童話)	(六) 水島爾保布
十五少年漂流物語 (長篇)	(一) 原田 謙次
安壽姫と對王丸 (歴史童話)	(二) 霜田 史光
四五六爺さんとマロ (童話)	(三) 森川 一朗
虹の歌 (推薦幼年詩)	(四) 久米 絃一
都の歌 (推薦幼年詩)	(五) 海達 公子
眼の歌 (推薦幼年詩)	(六) 竹久 夢二
ホシローヒルム (寫生旅行の巻)	(一) 寺内萬治郎
鳥が來る (京語大人篇)	(二) 野口 雨情
前田第一の國 (童話)	(三) 宵島 俊吉
富士の初雪 (童話)	(四) 三島 霜川
ラム王の一生 (長篇)	(一) 若山 牧水
仙人になつた鳴江 (推薦童話)	(二) 武井 武雄
鳥と獸の戦 (童話)	(三) 早田 敬次郎
こほろぎ遊び (童話)	(四) 中島 孤島
二人の泥棒 (童話)	(一) 野口 雨情
はたる取 (幼年詩)	(二) 林 眞珠
さくち (自由童話)	(三) 若山 牧水
夕方 (童話)	(四) 山本 鼎選
	(五) 齋藤佐次郎選

長篇 挿話  
山の少年

(附 録)

寺内萬治郎 (一) 沖野岩三郎  
岡本 歸一 藤谷 虹兒  
竹久 夢二 武井 武雄  
水島爾保布





花  
畠  
の  
秋  
(金の星書體)  
岡  
本  
歸  
一  
畫

良書一卷 心胸之美鏡たり

▼西條八十氏著

八十版

詩集

砂

金

◎荷も詩及文學を口にする者にして本書 讀まざる者なし  
 ◎四六判箱入總羽二重特七製美本金一圓七十錢送留十五錢

附錄には氏の傑作童謡を収む。著者の第一處女詩集はこれなり

◎吾國詩壇最高の詩集として白熱的好評を博し、沈痛の詩壇をよく今日の盛況たらしめたる空前の名著である。是非一讀を乞ふ。

▼野口雨情氏著

五十版

童謡作方問答

萬人必讀の好著として益々天下の高評を加ふ

◎童謡を作り又は童謡を口にする人は必ず本書を一見せらるべし。本書は童謡及詩歌全般に涉つて知らねばならぬ重要事が説いてある。

交蘭社

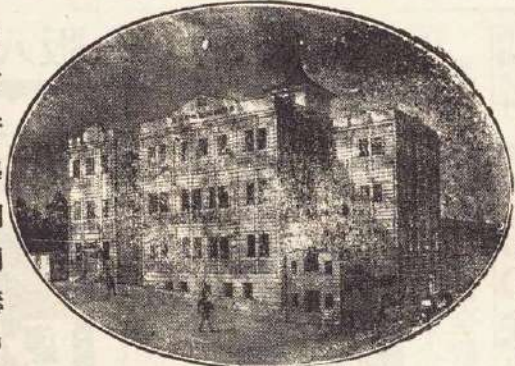
西條八十氏著 新らしい詩の味ひ方  
 水谷まさる氏著 詩集 水色の花  
 間司つね氏著 詩集 夜の薔薇

◎詩を作らむとする人は必ず本書を讀まるべし  
 ◎定價金一圓六十錢 送留十五錢  
 ◎著者最近の傑作詩篇のみを收めて本書をなす  
 ◎定價金一圓五十錢 送留十五錢  
 ◎新進詩人の第一人者として並ぶものなき好詩集  
 ◎定價送料共 金一圓四十五錢

東南振四 京神替〇 市保口二 神町座七 田十東九 區六京番

■ 天下青少年の登龍門 ■

會長 正三位 尾崎行雄  
 監事 理學博士 山内繁雄  
 文學博士 遠藤隆吉



(本會事務所設計圖)

入目下新學期開講  
 會の最好期は今也!!  
 講義録見本つき會則  
 申込次第無料進呈す

大日本國民中學會あり!!  
 天下の青年諸君意を強てし可也

諸君は學業の迷途より醒めなければならぬ、中等教育を受けるには必ずしも中學校に入るを要しない、諸君は肩身にして中學校に學ぶことが出来るのである。大日本國民中學會の組織をつくる團體は學校以上の學校、教師以上の教師として諸君に望むであらう。

本會二十二年の試練と經驗とはこゝに次の如き  
 独自の特色を獲得せり。

- 講義の新しいこと…… 模範的通信教授として推せらる。
- 會費の賤いこと…… 全科の學費一ヶ月分の遊學費にも過ぎず。
- 學制の正しいこと…… 正確に中學校令に從ひ全く中學校と同様也。
- 指導の良いいこと…… 通信教授に未き經驗を有するを以て指導應可を爲む。
- 講師の善いこと…… 中等教育者として令々ある實際家を選ぶ。
- 卒業の早いこと…… 僅か一年半の短日月にて卒業の榮彩を得らる。
- 本會の固いこと…… 創立以來二十二年國家に奉養として一般に認めらる。
- 成功の確いこと…… 本會の門より出でたる成功者の多きこと謂ふを用ひず。

東京神田 大日本國民中學會  
 河原田 振 啓  
 電話 神田三〇〇二番 三〇〇三番  
 口形 東京四三〇〇番 電話 神田三〇〇二番 三〇〇三番  
 口形 名古屋四二八〇番 電話 牛込五〇〇九番

勉強がラク／＼出來て

東京附屬高等師範學校校長 佐々木秀一 指導

小學生自習書

成績がメキ／＼よくなる

後編が出來た

修身・讀方・綴方  
 算術・地理・歴史  
 理科などの豫習や復習には是非なくてはならぬよい本です。  
 教科書にない面白い話や全國から集めた童謡なども澤山載つてゐます。

尋三 冊五錢  
 尋四 冊五錢  
 尋五 冊五錢  
 高一 冊五錢  
 高二 冊五錢

全國國定教科書販賣店にあり

發賣元 東京神田 東京堂書店 振替東京二七〇



に 面<sup>おもて</sup>の 獸<sup>け</sup>を 刀<sup>やいば</sup>一<sup>いっ</sup>



寺内萬次郎 畫

第三十二頁の「十五少年漂流物語」を御覽下さい。

女子學習院教授 射手矢貞三著

# 新刊 少年 太平記

菊 判 三 百 頁  
圖 入 美 本  
各 定 價  
金 十 八 圓 錢  
送 料 十 錢

上 二 卷 下

古來幾多の志士義人を感激奮起せしめたる千古の名著太平記の本筋を、少年少女にも容易く味得せらるゝやう、異常の苦心を以て現代化せられしもの、原の妙所は勿論、全篇の構想脈絡原文以上に整然とし興味津津々々加ふるに故事成語の註解詳密平易、國史國文の參考書として亦絶好の著述なし。

東京高等師範學校 馬淵冷佑、飯田恒作共著

## 最新刊 尋常小學 副國語讀本

本書は兩先生が小學兒童讀本の目的で著されたものです。兩先生は兒童の生活を、内山の深みへ引込んで、茶目式な、威傷的なものを選り、名家の文だからといふ看板をはずして、兩先生の實際經驗から、苦

尋常第二學年 卷上 定價 四圓 拾錢  
尋常第二學年 卷中 定價 四圓 拾錢  
尋常第二學年 卷下 定價 四圓 拾錢  
(錢六料送)

東京銀座一五二 培風館 振替東京一六七一

◇ 書叢館書圖童兒のアデイ ◇

吉田助治編

武井武雄装幀

(新刊六版)

沖野岩二郎著

落谷虹兒装幀

(近刊)

小島政二郎著

武井武雄装幀

(新刊四版)

上里朝秀著

齊田 喬装幀

(新刊六版)

西遊記

黒船物語

コサック騎兵

祖先の生活

四六判 401頁  
 定價 ¥ 2.20  
 送料 ¥ 0.12

四六判 300頁  
 定價 ¥ 1.60  
 送料 ¥ 0.08

四六判 301頁  
 定價 ¥ 1.60  
 送料 ¥ 0.08

四六判 283頁  
 定價 ¥ 2.00  
 送料 ¥ 0.08

文藝的に、西遊記の面白さを、現代の児童に伝えるべく、吉田助治氏が、この本を編纂した。その面白さを、この本で味わってほしい。

一紀州の沖野岩二郎氏が、黒船の来航を、その生きた経験から、この本で語っている。その面白さを、この本で味わってほしい。

子供読物として、小島政二郎氏が、この本で語っている。その面白さを、この本で味わってほしい。

吾々の祖先の生活、その面白さを、この本で味わってほしい。

東京市牛込区 伏見町 四 院書アデイ 電話 三五六一 六五三 三五二 電替 三五二

◇ 書叢館書圖童兒のアデイ ◇

文學士  
相良徳二著  
(新刊)  
**子ども美術史**  
工芸から現代まで

中島孤島著  
(新刊)  
**ギリシヤの神話**

田尾一一譯  
齊田喬装幀  
(新刊)  
**トロイの物語**

岸英雄編  
齊田喬装幀  
(新刊)  
**子どもインフ**

四六判 250頁  
定價 ¥ 1.80  
送料 ¥ 0.08

四六判 40頁  
定價 ¥ 2.20  
送料 ¥ 0.12

四六判 200頁  
定價 ¥ 1.40  
送料 ¥ 0.08

四六判 200頁  
定價 ¥ 1.40  
送料 ¥ 0.08

序 時 代 の 変 遷  
トロイの物語  
ギリシヤの神話  
子ども美術史  
現代の童話

神話の歴史  
月と日の誕生  
星の誕生  
海の王様  
白海の王様

子どもインフ  
童話の歴史  
文豪の童話  
子人の物語  
勇ましく

子どもインフ  
有名な童話  
から特にお話  
をお話

宮原信三 浦俊三 氏作 曲

**新童謡劇**

作者曰く—— 諸と児童劇によつて藝術に目覚めた子供達の純真な自然な発露として熱烈な要求の聲に促されて生れ出たものです終始曲を以て盛つところに一層綜合藝術としての効果を發揮する  
新 第一輯 つんくつばな 定價 四十二錢 郵税 五錢  
新 第二輯 十五夜お月さま 定價 五十錢 郵税 五錢  
新 第三輯 おほ星小星 定價 五十錢 郵税 五錢  
新 第四輯 人形のお國 定價 五十錢 郵税 五錢

住井重雄先生著  
少年少女名詩物語 全五卷  
第一輯 『騎士ものがたり』

世界で有名な玉のやうな美しい詩を皆さんに読ませたいとは先生のかねてからの望みでありました。幸少年少女に願つて大人のみ讀まれてゐた名詩を物語りとしてかいていただくことにしました。詩である少お求めなさい。

發行所 小石川音楽會  
發賣所 東京 小石川 町表 二番 六區  
萬世堂

發兌 東京 市 區 東 區 一 町 四 區 伏 山 院書アデイ 電話 牛 津 達 三 二 五 六 五 一 三

# 白眉音樂書

## 草川信童謠曲集 (第一集)

定價各五十錢  
送料四錢  
野口雨情、西條八十、清水かつら先生方の童謠に作られた美しい可愛いものである。

草川信先生作曲

## 小鳥の歌

一、牧場の歌  
二、春の小鳥  
三、春の宵

定價各三十錢  
送料二錢  
高等女學校程度の抒情曲で西條八十、有本芳水先生の上品な作曲された美しい。

外山國彦先生共  
中山晋平先生  
小田島樹人先生  
海野厚先生編

## 子供達の歌

定價各三十錢  
送料四錢  
外山國彦、中山晋平、小田島樹人、海野厚四先生共編のもので模範的童謠曲集であります。

第一編 赤い橋、第二編 七色鉛筆、第三編 春くらべ、

## 長尾豊先生著 教室劇

定價各四十錢  
送料四錢  
曲譜及演出仕方等附しあれば學藝會の臺本としてスグ役に立ちます。

第一編 小子部、第二編 アルカスと熊、第三編 日うさぎ、

第四編 日と月、第五編 どうてつ、第六編 夏とり、

第七編 大きなまんぢう、(以下続刊)

通巻第五拾九號

## 金の星

拾月號



振替口座東京  
五五八四九番

白眉社

東京市外下  
黒目四六八

石山寺の秋の月

本居長世作曲

Moderato 優美

Musical notation for the first system, including vocal line and piano accompaniment.

Musical notation for the second system, including vocal line and piano accompaniment.

いしやま であらの あきの つき  
 へんの うへカラ シタミレ  
 がへる やばせの ふねで さへ

Musical notation for the third system, including vocal line and piano accompaniment.

Musical notation for the fourth system, including vocal line and piano accompaniment.

たれも わたらぬ わしやわたる  
 ツキハ スガタニ ミトレテ  
 かへらにや わかこにあはれない

Musical notation for the fifth system, including vocal line and piano accompaniment.

最後 *riten-----dando*

つきは かへりをいせいでる

*riten-----dando*

石山寺の秋の月

(名所めぐり子守唄の二)

野口雨情

石山寺の秋の月

瀬田の唐橋誰が渡る

たれも渡らぬわしや渡る

橋の上から下見れば

水にうつるはわが姿

月は姿にみとれてる

歸る矢橋の船でさへ

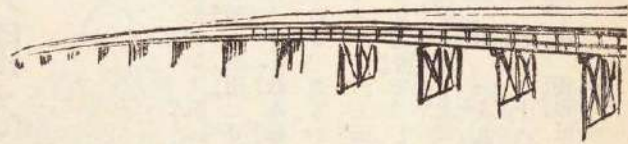
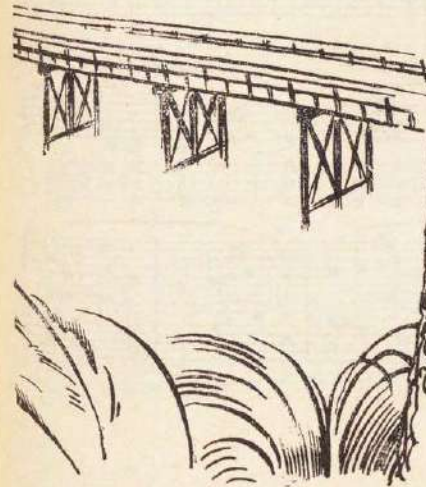
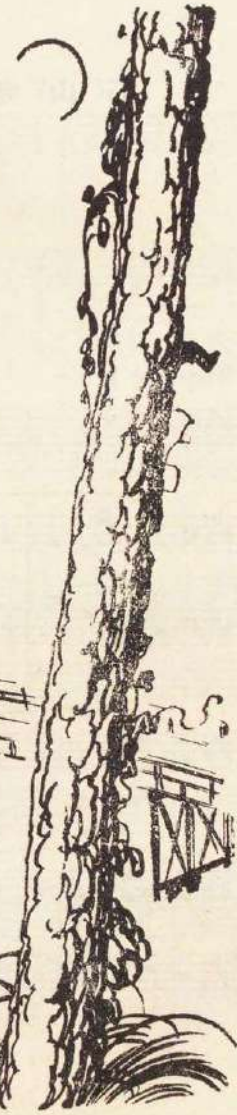
風が吹かなきや

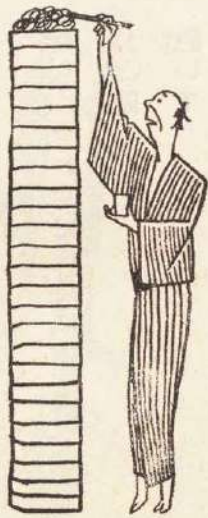
歸られぬ

歸らにやわが兒に逢はれない

月は歸りを

急いでる





一

江戸時代には、随分馬鹿げたことがありました。或本を讀むと、大食會と云ふ會が年に一度づつ催されたと書いてあります。それはどう云ふ會かと云ふと、大食ひを自慢の人が大勢集まつて、食べ比べをするので、食べ方の多かつた人が大關になり、その次の人が關脇になると云つた風に、毎年番附が出来るのでした。今でも、その番附は残つてゐます。いよく食べ比べをしようと思ふことになると、集まつた人々を酒の好きな人は酒組、御飯の食べ比

# 人間をとかす草

小島政二郎

べをしたいと云ふ人は飯組、その外、菓子組、鰻組、蕎麥組と五組に分けて、こつちのお座敷では酒をグビリ〜と飲み始める、隣の座敷では、バク〜食べてゐる、さうかと思ふと、そのまた隣では、スル〜スル〜と云ふ音をさせて蕎麥を食べてゐると云つた工合で、とう〜その結果、次のやうに大關が定まりました。

- 酒組 一斗九升五合 芝 鯉屋利兵衛
- 飯組 六十八杯 日本橋 萬屋伊之助
- 菓子組 饅頭五十、鹿の子餅百、茶五杯 麹町 佐野屋彦左衛門

蕎麥組 六十三杯 下谷 山口屋太兵衛  
なんと驚くではありませんか。中には、勝つて褒美を貰つて家へ歸つたまでにはよござんすが、その夜のうちに病ひを發して死んだ人も少くありませんでした。

二

さう云つた馬鹿げた時代のことでした。江戸に金兵衛さんと云ふ人がありました。大變な蕎麥好きで「蕎麥なら、三十は樂に食べて見せますネ。」と、ふだんから自慢してゐました。ところが、或時、食べ比べをして見ますと、上には上のあるもので、四十食べる人に出逢ひました。金兵衛さんは驚いて、「残念ながら、とてもあなたには叶はない。私程の蕎麥好きはあるまいと思ひましたが、あなたは大變な豪傑だ。あなたは横綱ですよ。」と感心しました。しかし、どう考へても、金兵衛さんは、口惜しく



七



獵人を飲んでしまつたら、その次には自分を飲み  
 に来るのだらうと思ふと、金兵衛さんは生きた心地  
 はありませんでした。逃げようと思つても、腰が抜  
 けてゐる上に、體がブル／＼顫へて身動きも出来ま  
 せんでした。  
 しかし、大蛇は、金兵衛さんに向つて来る様子は  
 ありませんでした。それよりも、人間一人を丸呑み  
 にしたので、お腹が太鼓のやうに膨んで苦しいので  
 せう、木の根に生えてゐる草の葉をペロ／＼細い舌  
 を出して舐めてゐました。  
 すると、不思議なことに、見てゐる間に大蛇のお  
 腹が小さくなつて、當り前の胴廻りになりました。  
 すると、大蛇は再び元氣を取り戻して、スラ／＼と  
 奥の方へ這入つて行きました。  
 金兵衛さんはやつと胸を撫で卸して、  
 「不思議なことがあるものだ。獵人を呑んで太鼓の  
 やうになつたお腹が、あの草をペロ／＼舐めると、

て堪りませんでした。で、いろ／＼蕎麥の食べ方を  
 工夫して、三十一、三十二、三十三、と云ふ風に少  
 しづつ餘計に食べ習つて見ましたが、とても四十  
 は食べられませんでした。  
 「自分は今まで大關にばかりなつて来たが、あの清  
 吉と云ふ男のために、もう一生大關にはなれないの  
 か。残念だ。口惜しい。」と思ひました。  
 すると、その翌年の夏の初めに金兵衛さんは商賣  
 上の用で近江の國まで出向かなければならないこと  
 が起りました。  
 今と違つて、汽車のない時代ですから、草鞋を穿  
 いてテク／＼歩いて行くのでした。一月近くもかゝ  
 つて、やつと、それでも無事に近江の國へ着きま  
 したが、途中で山を一つ越してゐる間に路を踏み迷  
 つて、幾ら行つても街道へ出られなくなつてしまひ  
 ました。  
 「困つたな。誰か通りかゝらないかしら、——宿で

もどこかにないかしら。」と思つて、あたりを見廻  
 しても、目に這入るものは、すく／＼と生ひ茂つた  
 大木の幹ばかりでした。  
 するうちに、そろ／＼日暮れが近くなつたと見え  
 て、あたりが薄暗くなつて來ました。金兵衛さんは  
 「桑原、桑原。こんな所で日が暮れたら、それこそ  
 熊の餌食になるか、狼に食はれてしまふか分つたも  
 のではない。南無、ふだんから信心してをります  
 不動明王、どうかお助け下さい。」と目をつぶつて祈  
 つてゐると、近くで、  
 「キヤツ」と云ふ叫び聲が聞えました。  
 ボクツ、ドキツ、ハツとして目を開くと、二丈も  
 あらうと思はれる大蛇が、どこから現れたのか、そ  
 こらをのた打ち廻つてゐました。見ると、口には獵  
 人を銜へて、ペロツと一飲みにしてしまひました。  
 「あッ」と云つたまゝ、金兵衛さんはその場へ腰を  
 抜かしてしまひました。



素通りになつたが、待てよあの草を取つて歸つて、蕎麥の賭けをした時に舐めれば、きつと勝利を得られるに極まつてゐる。恐い目に逢つたが、有り難いものを授かつた。かうなると、路に踏み迷つたのも、日頃信心する不動様のお手引きかも知れない。あゝ、有り難い、有り難い。」と、その草を摘んでゐるところへ、別の獵人が松明をかざしながら通りかかつたのを幸ひ、藁まで連れ歸つて貰ひました。

金兵衛さんはやがて用を果して、江戸へ歸る時、例の草も一緒に大事に持ち歸りました。

三

秋になると、例の大食會が開かれました。金兵衛さんは、去年の恥をそぐつもりで、例の草を懐に、會場へ出かけて行きました。蕎麥組の座敷へ這入ると、去年金兵衛さんを負かして大關になつた清吉を正面に、大勢控へてゐまし

金兵衛さんは、「清吉さん。今年は幾つ食べなさる。」と聞きました。すると、清吉は、「左様さ。今年は去年より五つ餘計に食べて見ようと思ひますよ。」と云ふ返事でした。

「四十五食べるよ仰しやるんですネ。ちやア私も今年は一ツ奮發して五十食べて見ませう。」

そこで、競争が始まりました。兩方とも食べることの早いことと云つたら、スル／＼と三口位で第一つを食べてしまふのでした。

見てゐる間に、空の入れ物が二人の傍に山のやうに積み重ねられて行きました。

そのうちに、二人とも三十まで食べ進みました。すると、金兵衛さんの方の箸の動きが遅くなりました。見ると、金兵衛さんは仰向つて、目を白黒させてゐました。

「どうした、金兵衛さん。苦しいのか。もう食べら



れないのか。」と傍の人が聞くと、「ウウン。」とカブリを振つて、「ななに、今後の十五を食べて見せるよ。だが、ちよつと障子の外まで出しておくれ。」

「餘程苦しうだね。しかし、障子の外へ出てくれと云ふのは卑怯ぢやないか。出てどうするんだ。」

「なに、少し禁厭があるんだ。禁厭をすれば、すぐ後を食べて見せる。」

そこで、相手の清吉に相談をすると、「禁厭なら仕方がない。出してお上げなさい。」との返事だったので、

「ちやア金兵衛さん、お出なさい。」

「出ようと思つても體が利かないから、ちよいと出しておくんない。」

「厄介だなあ。さあ、障子を明けたよ。」

「立てないから、立たしておくんない。」

「ソラ、オット。静かに立つて。危いよ。ソロ／＼

いゝかい。さあ、障子の外へ出たよ。」

「有り難う。——確に障子の外だね。」

「金兵衛さん、見えなのかい。」

「上向き過ぎてゐるので、見えない。障子の外に出たのなら、障子を締めて下さい。」

「手数のかゝる禁厭だなア。——いゝかい、ソラ、締めたよ。」

「有り難う、有り難う。私がいゝと云ふまで、障子を明けちやアイケないよ。」

かう云つて念を押しながら、金兵衛は、そつと例の草を懐から取り出して、ペロ／＼ペロ／＼舐めました。

すると、だん／＼お腹が空いて来たやうな氣持がしました。

「締めた。」

と思つて、障子の内へ、

「今すぐですよ。」

と云つた聲が、聞いてゐる方の耳には、細く、蚊の鳴くやうに聞えて、そのまゝバツタリ聞えなくなつてしまひました。

「金兵衛さん、金兵衛さん。」

と内から呼んで見ましたが、返事がありませんでした。

「金兵衛さん、何をぐ／＼してゐるんだネ。」ともう一度云つても、同じやうに返事がありませんでした。

「變だなあ。どうしたんだらう。」

「明けて御覽。」

みんなが不思議に思つて、ガラツと障子を明けると、驚いたことに、金兵衛さんの姿はなくて、人間の形をしたお蕎麥が羽織を着て、ちやんと坐つてゐました。

ホイ 締まつた。あの草は、人間の溶ける草だつたのでした。(をほり)

# 夕暮 (推薦)

湊 守 一

蛙がかへると

鳴く頃は

とんぼも稻穂に

とまります

螢の光が

見える頃

一軒家は灯が

つきました





## 娘きな家

(篇妹姉の子きな家)

衛 信 井 三

はしがき

これは皆さんも御承知の、あの『家なき子』を作ったアグートル・マロオの原作で、獨りぼつちの哀れな少女の身の上を描いた悲しい物語であります。『家なき子』が多くの少年少女たちの間に讀まれてゐるやうに、この『家なき娘』も多くの人々に愛読されることと思ひます。外國では『家なき子』とこの『家なき娘』とは、二大傑作物語として誰知らぬものもない程であります。紙面の都合によつて、極く簡単にその筋道だけを書いておきますが、近く詳しい一冊の本として、皆さんのお目にかけるつもりであります。

### 一、悲しい旅路

遠い印度の國から、哀しい旅を續けた母と娘は、今やつとこのフランスに着きました。

『パリンヌや、パリンヌや。』

汚い貨車の中から、何とも言へない弱々しい聲が

聞えました。身すばらしい着物を身にまとつたパリンヌは、つとその貨車 下に走り寄つたのでした。

『お母様、何か御用？』

『あゝ』と又もやその貨車の中からは、苦しさうな聲が聞えました。私たちはもう直ぐ、巴里の都に着くのだらうか？』

『えゝ、もう直ぐ。今、税關のお役人様のお調べを待つてゐるんですから。』

『随分長いことかゝるのね。』

『いゝえ、本當にもう直ぐよ。でもお母様、大層お苦しうね。』

『心配おしでない。私はかうしてテントの中に居るんだから。』

とは云ひながらも苦しうに、コン／＼と咳き入りました。見たところ、未だ二十八九ではありながら、もうその命はすつとの昔に、絶え果てしまつたかのやうでした。けれどもその顔にはまだかつて

の美しさが、ほんの少しばかり残つてゐました。黒味がちな目と黄金色の髪——丁度その少女のやうな。

それ、土曜日の三時ごろのこと、こゝは丁度、花の都と呼ばれる巴里の入口で、いつもながらにたくさん荷馬車が、ぎつしりと群り集つてをりました。さうして少女パリンヌの貨車は、それは又一段と汚くて、しかも黒ずんだそのテントの周りには、四つの國々の文字が書いてありました。この貨車が巴里の入口に入るまでには、まあそれほどたくさん國國を廻り廻つて來たのです。

その貨車には一匹の驢馬がつながれてありました。その名をパリカアルと言ひましたが、長い／＼旅の空に、今はもう見る影もなく疲れ果てゐるのでした。

『お母さま』と少女のパリンヌは、再び貨車 側に近よりながら『何か召し食ふ？ レモンの實でも買つて來てあげませうか？』

「いえ、お錢を大切にしなければなりません。私たちはもう、ほんのちよつびりしか持つてはゐないんですものね。」

バリンヌは再び貨車を離れて、力なくその邊りを歩いてゐると、丁度そこには一人の少年が佇んでをりました。目のさめるやうな曲馬服を着てゐるところを見ると、きつとその後の方に陣取つてゐるサアカス團の一人なのでせう。

「やア、こいつはいゝ驢馬だなア！ フランス生れぢやないだらう。」少年は言ひました。

「えゝ、ギリシヤから來たのよ。」と思はずバリンヌは答へました。

「ふうん、ギリシヤ！ それぢや君は、そこから來たのいか？」

「いえ、もつとく遠くからよ。」

「さう、そしてこれから馬市場へ行くの？」

「いえ、え、え、え……」

税關のお役人のお雀べが終ると、俄かに馬のいななく聲や轍の響が騒々しく聞えて來ました。さうしてバリンヌは驢馬の手綱を手に取つて、再び貨車を進めたのでした。

がたり、ごとり——長い——堤防の上を、病氣の



「巴里へ……でも、何處か泊るところがあるのかい？」

「えゝ、お城の周りにいゝところがあるつて話を聞いたわ。」

「お城だつて？ そんな無用心な處で泊るの？」少年は急に大きく目を睜りながら言ふのでした。「馬鹿な奴共は色んなことを言つて勸めるだらうが、皆泊るところぢやないよ。君はどうして「控へ目のをちさん」ところへ行かないの？」

「そんな人知らないわ。」

すると少年は、直ぐにそこへ行く道を手に取るやうに教へてくれました。それはシャロンヌの近くのギロオの廣場といふところで、そのをちさんは、お酒飲みだが至つて正直者だといふことでした。貨車は再びシャロンヌへ！

## 二、巴里の貧民窟

母を乗せたバリンヌの貨車は、揺れ〜ながら進んで行きました。遙か彼方を眺めると、そこには何も言へない汚い家々が、ぎつしりと建てつまつてをりました。あゝ、これが常々お父さんの言つてらした、美しい花の都の姿なのでせうか。

でも、やつと貨車はシャロンヌに着きました。驢馬のバリカアルをそこに停めて、バリンヌは只一人、原つ場の中へ入つて行きました。そこはこの巴里でも名の高い貧民窟のことゝて、邊りには二目とは見られない程汚い長屋が、すらりと並んでゐるのでした。

「誰だい？」

かう言つて出て來たのは、ロビンソン・クルソウのやうに、もしやくと髪を生えた、しかも腕の一本しかない人でした。

「あなたがギロオの廣場の御主人でせうか？」  
「さうだよ。わしが「控へ目のをちさん」だよ。」

「泊めて頂きたいのですけど……」

「金を出せ、金を！」

言ひながら小父さんは、片方の手でグビリくとお酒を飲み乾してをります。やがてバリンスに小父さんの言ふままに、スカートのポケットから一錢々々と銅貨を数へて、今夜の泊り賃を渡しました。さうして貨車は、廣つ場の中に曳き入れたのでした。

「お母さま、やつと着きましたのよ。」

「さう、もうガタ／＼と揺られる心配はないのね。」

「えい／＼、さア御飯を拵へませう。」

貨車 中から七輪を取り出して、心ばかりの御馳走を作つたけれど、もうお母さんはほんの一寸しかお飯りにはならないのでした。さうしてその顔は、すつかり土色でした。

哀しい野宿の夜がやがてはのぼのと明け初めると、直ぐさまバリンスはお醫者を呼びに行きました。お醫者は間もなくやつて来て、お母さんの身體を見

ましたが、急に顔をしかめて言ふのでした。

「これはいかん、直ぐ病院に入らなくてはならぬ！」

「あゝ……」と哀れな母と娘は、思はず力なく叫びたのでした。貧しいバリンスたちが、まあどうして病院へなど入るといふのでせうか。

「病院へ入ることが出来ないなら。」とお醫者は言ひました。「どこか一つ部屋を借りて、十分養生をしなければならぬ。」

言ひ残してお醫者の馬車が、ギロオの廣つ場を出て行くと、直ぐにバリンスは「控へ目のをちさん」に向つて、貨車を賣る約束をしました。さうして汚い部屋を一つ借りたのでした。あゝ、遠い印度の國からこゝに来る間、萍草のやうな二人の身にも、長いこと夜露や雨風を凌がしてくれた思ひ出の多いこの貨車——お父さんのお亡くなりになつたのもその貨車の中でした。

だが「控へ目のをちさん」が、それを買ひ取つて



はくれたものゝ、ほんの少しのお金しか出してはくれませんでした。しかもバリンスの身には、もう數へる許りのお金しなくなりました。まあどうすればいいのでせう？ 思はずその目に熱い涙を浮べながら、バリンスはそつと驢馬の手綱を曳きました。丁度その日は巴里の都に、馬市場の開かれるといふ水曜日の午後、彼女は「控へ目のをちさん」に伴れられて、ギロオの廣つ場を後にしたのでした。

たくさん馬の群、その間を行き交ふ人たちの列、市場の門口に近づいた時、驢馬は哀しい聲で啼きながら、二足三足後ずさりしました。

### 三、さらば巴里

「あゝバリカアル！ どうか許しておくれ。私は決してお前を見捨てたのではないのよ。」

驢馬に向つてしみじみとさう言つたバリンスは、小父さんと一緒に市場の門を入りました。するとそ

の人込みの中から、一人のおばあさんが聲をかけた。  
した。

「おや、これはお珍しい。控へ目の旦那でしたかい。」

「やあ、ルウケリイのおばあさんかい。…何か馬でも手に入れるつもりかね？」

「えい、いゝ奴を一匹買ひたいと思ひましてな。」

「さうか、そんなら丁度幸だ、どうだね、この驢馬は？」

控へ目のをぢさんはルウケリイと呼ばれたおばあさんに、バリカアルを見せました。さうしておばあさんはバリヌヌに向つて、幾らかのお金を渡したのでした。あゝ、懐しい驢馬のバリカアル！ 今また彼女はそのバリカアルとも、哀しいお別れをしてみました。

再びギロオの廣つ場へ戻つたバリヌヌは、直ぐにそのお金を手に持つて、お母さんの枕邊に近よりました。

「バリヌヌや。お母さんは力ない聲で言ふのでした。『私たちは直ぐに、マロオクウルへ行くことにしませう。このお金のなくならない間に、一刻も早く…。』」

「まあ、マロオクウルへ…でも、お母さんは、御病氣なんですから…。」

「いゝえ、こんなことをしてゐたなら、いつになつて其處へ行けるやら。さア一刻も早く旅をしませう。」

幾度か氣づかひながらも、元氣さうな母の言葉にやうやくバリヌヌは背きました。

「それではお母さま、ゆつくり〜と氣をつけてまゐりませう…。」

今は母を乗せて行く貨車もなく、ましてそれを曳くバリカアルもありません。せめて辻馬車でも呼ばうと母の手を引き〜、バリヌヌはギロオの廣つ場を出ました。丁度その時、向方からは一臺の轎馬車が、砂埃をあげて走つて來ました。

「アお母さま。」とバリヌヌが、母を助けてそれに乗せようとした刹那、お母さんは急にバツタリとその場に倒れてしまつたのでした。

思はず叫んだバリヌヌの聲で、ギロオの人たちの誰も彼もが、急いでそこに集つて來ました。さうしてぐつたりとなつてゐるお母さんを抱いて、と或る一部屋に移しました。けれどもお母さんの唇は、もうすつかりと灰色で、語る言葉もこの世の人とは思はれませんでした。

「バリヌヌや…。」

「はい…。」と涙ながらに彼女は答へました。

「ねえ、バリヌヌ。只つた一言、お前に言ひ遺しておきませう。…お母さんの別れの言葉ですよ…。」

「おゝ、お母さま！ お母さま！ …お母さま、よう！」

「騒ぐのではありません。これも皆運命なのだから…それよりもバリヌヌ、お前はどうかして、マ



ロオクウルのおちいさんの處まで行くのですよ。おちいさんの處へ行つたなら、屹度お前は幸福になることが出来ます。……わかつて？」

「……はい」  
「一時も早く巴里を立つて……それを約束しておくね。」

「えい、えい、屹度……」

「あ、でもお前は一人で、マロオクウルま 行けるかしら……可哀想に……あ、可哀想なく、バリヌ……」

「お母さま、お母さま……」バリヌは絶りついて泣きましたが、その時母の身置は、石のうに冷たくなつてゐました。

「まア何といふ哀しいお別れ！ やがて牧師さんが来て、お母さんの死屍に最後のお祈りをしました。さうして心ばかりの花々に包まれて、その廣つ場の一期に埋められました。」

「若しも急がないなら、いつまでも此處におゐて。わしは無代で置いてやるからな。」と控へ目のをちらんは言ふのでした。

「本當に有難うございます。……でも私、巴里には居れません。直ぐにこれからおちいさんの處まで行かなければなりません。」

「お前さんにおちいさんがあるのかい。」

「えい、アミアンの近くの、マロオクウルに……」それを聞いた小父さんは、もう古びて色も褪せたフランスの地圖を、バリヌに與へました。

「お母さんの遺言だ。ちやア氣をつけて行くがよい」  
「では、永々と有難うございました。……さやうならー」

「お、さやうなら、氣をつけてな」  
さうしてバリヌは只つた一人、涙ながらにギロオの廣つ場を後にしたのでした。彼女の前には、如何なる運命が展げて行くのでせうか？（つづく）

先生「だれだね、こんないたづら書きをしたのは？」

榮目「ぼくちやアありません。」

先生「しかし、このチャップ」

リンは中々よく出来てゐる。

榮目「先生！、ぼくです。」



水島爾保布



# 魔術の舟

原田謙次

昔、天正年間に、果心居士といふ老人が京都の北に住んでゐました。老人は長い白髯を垂れて、いつでも神主のやうな服装をしてゐました。けれども老人は、人々に佛畫を見せ、佛道を説いた。

て、生活してゐました。老人は祇園の境内に行つて其處で、地獄のいろいろな刑罰を描いてある大きな掛物を樹に吊るすのです。この掛物は實に不思議に描かれてあつて、それに描いてあるものは、悉く眞に迫つてゐました。老人は、その繪を見に集つて來る人達に説教をして、因果應報の理を説明しました——始終手に持つてゐる如意で、さまざまな地獄の刑罰を描し示して

佛の教に従ふやうに勸めるのでした。群集は、その繪を見に、またその説教を聴きに、集つて來ました。人々の寄附を受けるために展げてある筈には、投げ出される錢で山を築きました。

その頃は織田信長の時代でありました。その家臣の荒川といふ男は、祇園へ參詣しました時に、ふとこの繪の展げてあるのを見ました。そしてそのことを、後になつて殿中で話しました。信長は荒川の話を聞いて大へん面白と思つて、果心居士に、繪を直ぐに持參するやうにと命じました。

信長はその掛物を見て、大層驚きました。さまざまの惡靈や、ひどい刑罰に惱む人々が、眼の前ほんだうに動くやうに見えますし、繪からは叫び聲の起つて來るのが聞える位です。そして、その繪に描いてある血は、ほんたうに流れ出てゐるやうに見え

ました。信長はいま／＼驚いて、一體誰がこんな不思議な繪を描いたのかとたづねました。すると老人が、

「これは有名な小栗宗丹の作でございます。百日の間、毎日齋戒の式をし、大苦行をし、清水の觀音さまに熱心にお祈りをしまして、靈感を受けて描いたものでございます。」と、答へました。

信長が、この掛物を手に入れたいと熱心に望んでゐるのを見て取つた家臣の荒川は、老人に向つて、それを献上してはどうかと言ひました。しかし老人は大膽にも、

「この繪は、私の持つてゐますたつた一つの値打のある品物でございます。そして、私はこれを人々に



見せまして、少しづつの金にありつくことが出来るのでございます。只今これを献上いたしましたら、私は生活が出来なくなりませう。けれども、もしこれを非常に御所望でございましたら、百兩でお買取りを願ひたいと存じます。その金で私は、何かほかの仕事を始めますから。」と、答へました。

信長はこの返答を聞いて、あまり喜びませんでした。で、黙つておりました。

荒川はすぐに何事か信長の耳に囁きました。信長はうなづきました。そこで、老人は少しばかりのお金を貰つて――掛物を持つて歸りました。

老人のあとから、荒川はこつそりこつそりついて行きました。不正な手段で、繪を奪ひ取らうとしたのです。老人がある山の麓の寂しい處に來かかつ、時、荒川に捉まりました。

「其方はこの繪を百兩で賣らうなどは、實に貪慾な奴ぢや。金百兩の代りに今三尺の織をやらう。」



し、どうかして掛物を手に入れさへすれば、先の罪のつぐなひがつくと思つたので、すぐと數人の家來をつれて、北野神社へ行きました。ところが、そこへ着いた時には、老人はもうどこかへ行つてしまつ

二六

荒川はさう怒鳴りつけて刀を抜き、老人を殺してその繪を奪ひ取りました。

翌日、荒川はその掛物を信長に献上しました。信長はすぐにそれを掛けるやうに命じました。

ところが、展げて見ますと、繪がなんにもないので、信長も荒川もびつくりしてしまひました。

それ、老人が御殿から歸る時に包んだままの物でありましたのに、白紙になつてしまつてゐたのです。どうしてもとの繪が消えてしまつたかといふことを、荒川は説明することが出来ませんでした。で、荒川はなう、う罰を受ける事になつて、長い間蝨居するやうに申し渡されました。

### 三

荒川が蝨居の期日をやつと果した時、老人が北野神社の境内で例の繪を見せてゐるといふことを聞きしました。荒川はそれを信じませんでした。が、しか

たあとでした。

五六日経ちました。するとまた、老人が清水で繪を見せて、群集に説教してゐるといふ知らせが荒川のところへ來ました。

荒川は大急ぎで清水へ行つて見ましたが、群集の散つて行くのを見ただけで、老人は見えませんでした。

しかし、ある日のこと、荒川は、思ひがけなくも或る酒屋で、老人の姿を見つけたのです。

老人は荒川に捉つても、上機嫌で笑つてゐました。「一緒に行くよ。だが少々酒を飲むから、待つてゐてもらひたいものぢや。」

さういつて、老人は大きな茶碗で十二杯もお酒を飲みました。荒川は老人に繩をかけて、信長の邸へ連れて行きました。

白洲で、老人は役人のしらべを受けました。「其方が魔術を以つて、人々を惑はしたことは明白

である。ただそれだけでも重く罰せらるべきである。しかし、あの繪を我君に献上するならば、今度は見逃してやるであらう。さもなくば嚴罰に處するであらう。」

この威嚇を受けて、老人は迷惑さうに笑ひました。そして、

「人々を惑はした罪はこの私ではござりませぬ。」とさつぱりいひました。それが、荒川の方を向いて、呶鳴るやうにいひました。

「お前さんはかたり者だ。あの繪を献じて君に媚びようとしたのだ。それで、繪を盗むために、私を殺さうとしたのだ。兎に角、お前さんは私の繪を盗み取つたのだ。私が今持つてゐる繪は本物の寫しである。繪を盗み取つてから、信長公へ献じようといふお前さんの心が變つて、自分のものにしようとたくらんだのだ。そこで白紙とすり換へたのだ。今どこにはんものの繪があるか私は知らない。多分お前さん

そこで老人は、役人の前に出て、繪について話しました。

「ほんたうにすぐれた繪と、ふものには魂があります。さういふ繪になると、自分に生命を與へた人や又は正しい持主からは、離れたがらないものです。立派な繪に魂のある證據はいくらもあります。狩野元信が襖に描いた雀が、飛び去つたといふこともあるし、また繪の中の馬が、毎晩草を食べに出かけたといふ話もあります。信長公は正しい持主でなかつたから、繪が消えてしまつたのでせう。しかし、私が最初買った時の値段の百兩、拂ふならば、繪はきつと又、現はれて来るでせう。」と、話しました。

老人はそれから又いひました。

「兎も角、やつて見ようではござりませぬか。御心配には及びません。繪が現はれなかつたら、すぐにお金をお返し致します。」

この不思議な話を聞いた信長は、すぐさま百兩を

んは御存知だらう。」

老人の言葉聞いて、荒川は非常に怒りました。しかし、役人は、荒川が潔白でないといふ疑を抱きました。其處で役人は、老人を暫く牢に入れて置いて、今度は荒川を嚴重に調べました。

ところが荒川と云ふ男は生れつき訥辯で、しかもその時非常に興奮してゐたので、殆んど口がきけませんでした。どもつたり、滅茶苦茶のことを言つたりしましたので、役人は、荒川の自白するまで棒で叩かせた。

老人はそのことを聞いて笑ひました。

「まあ可哀さうに。あの荒川の奴は、悪いことをしたから、その悪い根性を直してやらうと思つて、罰を與へてやつたのです。しかし、信長は、荒川は事實を知つてはゐないので。私がよく説明しますから、その事をお役人に言つて下さい。」と老人は牢番に言ひました。

仕拂ふやうにと命じました。そして自分もその成り行きを見とどけようとして出て來ました。

掛物は展げられました。合はきた人々の驚いたことには、繪は細々とした處まですつかりらとのまに現はれたのです。しかし色がいくらか褪めたやうで、以前のやうに生々としてゐませんでした。

それを感づいた信長が、老人にたづねますと、  
「最初御覧になりました時には、この繪の價值は限りのないものだつたのです。しかし今は、お拂ひになつた百兩だけの價值しか現れてゐません。」と、老人が答へました。

#### 四

それからまもなく、信長は明智光秀の謀反にあつて死にました。光秀が京都の君主になると、老人の話を聞いて、老人を呼びました。

光秀は親切に老人に話しかけて、客人として扱ひ

ました。そして、御馳走をして、老人の好きなお酒を飲ませました。

光秀は老人の前に大きな盃を置いて、望み通り何杯でも注ぐやうにと侍臣に命じました。老人は續けて大盃で十二杯も飲んで、もつとくれといひ、したが、もう酒樽が空になつてゐましたので、みんなは驚きました。

光秀が老人に、また飲み度りないかと尋ねますと、「やゝ満足しました」と答へました。



見てゐる者は、水が膝まで高まつて來たので、急いで着物をかけ出しました。

同時に、舟は屏風から這り出るやうに見えました。それはほんたうの漁夫舟で、繪のきしる音まで聞えました。

ますます水は高まつて、たうとう、みんなの帯の

それから老人は、『御親切のお禮に、私の術を少しばかりお目にかけてませう。ではどうぞ、あの屏風を御覽下さい。』と言つて、近江八景の描いてある八枚折の屏風を指しましたので、皆その方を見ました。

それには、湖上はるか彼方に、舟を漕ぐ一人の漁夫を描いてありました。その舟は屏風の面に、わずか一尺足らずの長さに描いてあるのでした。

老人はその舟に向つて差しまねきました。するといきなり、舟は向を變へて繪の前景の方へ動きはじめました。舟は近づくにつれだんだん大きくなつて、漁夫の姿もはつきり見えて來ました。

舟はなほ、次第に大きくなりながら近づいて來ました。

すると、ふいに、湖の水が溢れるやうに見えました。——繪から部屋の中へ水がどう〜とあふれて來たのです。

上までも水に覆りました。

舟は老人の前まで來て、びつたりと止りました。老人は舟に飛び乗りました。

すると漁夫は、方向を變へて、非常な速さで、漕ぎ始めました。

舟がむかふに行くにつれて、室内の水も減じ出しました。水は屏風の中に吸ひこまれて行くやうでした。

舟が繪の中に歸りますと、室内はすつかり乾いてしまひました。

なほも、繪の舟は、水面を這つて行つて、だんだん遠くになり、だんだん小さくなりました。そしてたうたう小さな點位になりました。やがてそれも見えなくなつてしまひました。

老人も舟と一しよに姿を消しました。

老人はそれつ切りゐなくなつてしまひました。

——Harn より——(をばり)



# 十五少年漂流物語

(前巻までの梗概は一八九頁にあります)

## 霜田史光

### 一、大風を作る

さて、佛人洞に残った少年達は、四人に  
 かれてしまつたので皆暗い顔をしてゐました  
 跡にアリアンは一番暗い顔をしてゐて、元氣  
 がありません。ゴルドンはそれを頻りに慰め  
 て、

「アリアン君、心配することはないよ。ド  
 ン君がいくら強情張りでも、今度の冬が来  
 るまでには寒さに耐へ切れないで、乾皮歸つ  
 て来るだらうよ」と云つてゐました。  
 あゝ、來年もまたこの離れ小島で冬を送ら  
 なければならぬのでせうか。この島へは助

け船も来ないのでせうか。オーランド岡の  
 土高く立くもある目じるしも、役に立つやう  
 なことにはならないのでせうか。思へば哀れ  
 な十五人の少年達です。  
 或日、アリアンは少年達を集めて云ひまし  
 た。

「どうもオーランド岡に立てた目じるしは  
 海の上から二百尺ばかりしかないで、遠く  
 から見えないやうに思ふね。それで僕らうま  
 いことを思ひついたんだ。と云ふのは大きな  
 風を作つて、それを空中高く揚げるんだ。ま  
 うすれ、遠くから見ると思ふがね。」

と一つの相談を持ち出しました。勿論風は  
 風のない日には上げられせんけれども、そ  
 れでもあげないよりはましだと云ふので、皆  
 は賛成しました。  
 そこで、バクスターが頭になつて、大風を  
 作り始めました。それはドンバン達の佛人洞  
 を出発した翌の日のことでした。  
 さうして、十五日の午後には八角形の大風  
 が出来上りました。風は少年達の一人をその  
 背に映せてもあがる位の大ききでした。こ  
 れを千尺も高くあげると、五六十マイルの遠  
 くからでも見ることが出来るでせう。それ

おける者は、とても少年達には引き切れない  
 ので、乾皮盤を用ゐようと云ふことになつて  
 した。

十六日には、この大風を揚げようと、少年  
 達は喜んでゐましたが、その日は朝から天氣  
 が悪くて駄目でしたから、少年達は洞の中に  
 縮こまつてゐました。  
 十六日の夜は大荒れに荒れて十七日には風  
 もどん／＼と静まつて、午後には平常と變つ  
 た位になりましたので、少年達は風を揚げて  
 見ようと、喜び勇んでその用意をしてゐまし  
 たら、

### 二、森の中に倒れてゐた女

その時、犬のフハンが二聲三聲吠え立てた  
 と思ふと、急に身を躍らして森の中へ飛び込  
 んでゆきました。これは訝しいと思つたので  
 アリアンはサーピスとシャツクを連れて鐵砲  
 を持つて、その後から犬の走つた森の中へ追  
 け込みました。  
 フハンは向ふの樹の下から、まるで呼ぶや  
 うに吠え立てますので、五人が急いで近づい  
 て見ますと、其樹の下には一人の人間が倒れ



てゐます。しかもそれは女でした。粗布の服  
 を纏つて、茶褐色の肩掛をしてゐました。  
 年の頃は四十か四十五位に見えました。顔色

は悪くやつて如何にも苦しまつてゐます。生きて  
 ゐると云ふのは、名ばかりのやうになつて、  
 倒れてゐるのでした。  
 何しろ少年達はこの島に流れ着いてから人  
 と云ふものを見たのはこれが始めてです。す  
 ばらしいやら恐ろしいやら、わけの解らぬ心持  
 で胸は一ぱでした。  
 「まだ呼吸をしてゐるね。これは乾皮お腹が  
 穿いて倒れたんだらう」とゴルドンは云ひま  
 した。  
 シャツクは急いで洞に歸つて、乾パンを少  
 しばかりと、アランデーと持つて來ました  
 アリアンが女の口を開いて、幾滴しかのアラ  
 ンデーを注ぎ入ると、女は少しく身を動か  
 しました。そして眼を開いてぼんやりと少年  
 達の顔を見つてゐます。やがてシャツクの差し  
 出す乾パンを手にとると、忙がしく口に入れ  
 てむしやくと食べました。  
 「食へ終ると、はつきりした英語で、  
 『有り難うよ。皆さん、有り難うよ。』と云ひ  
 ました。  
 それから女は少年達に連れられて佛人洞の  
 中に入り、藁床の上に寝させられました。そし

く、だん／＼と氣力が元通になつて來ますと、途切れ／＼に次のやうなことを話しました。

### 三、水夫の悪企み

この女はアメリカ人で、名はガザリイン、姓はレーデーと云ひましたが、昔ながらはケイトと呼ばれてゐました。ケイトは二十幾年もニューヨーク州の都アルバニーの金持ちで、サンフランシスコと云ふ人の家に奉公して、女執事をつとめてゐましたが今から一ヶ月ばかり前、主人夫妻がチリーの親戚にゆくと云ふので、ケイトも一緒にゆくことになりました。そして船を待つてゐる間に、セベルン號と云ふ商船がチリーのバルパライソにゆくと云ふことを聞きまして、これに頼んで乗せて貰ひました。

セベルン號はサンフランシスコを出帆してから十日ばかりたつてから、水夫のワルストンと云ふのが悪企をして、外の水夫八人を誘つて、たうとう、船長と一等運轉手と、それからケイトの主人のサンフランシスコ夫妻の四人を殺して、たうとう船を擄取りしてしまひ

ました。ケイトも危く殺される所でしたが、フオーベスと云ふ一人の水夫が仲に入つて口を利いてくれましたので、やつとの事命だけは助かりました。所が二等運轉手のイバンスと云ふ人は三十位のおとなしい人なので、悪者達はこの人まで殺してしまふと、船を操ることが出来なくなつてしまひますので、イバンスに刀をつきつけて脅かしては、船の運轉をさせてゐたのでした。

このことであつたのは十月八日の夜で、セベルン號はこの時チリーの海岸から二百マイルばかり沖にありました。悪者達はこの船を奪ひとつて、アメリカとアフリカの間を行き來して、この時分まだそつと行はれてゐた。奴隷の賣り買ひをやつて、うんとこゝと金儲けをしようと思つたのでした。それで彼等はこれからホルン岬を廻つて、アフリカの西の海岸に着かうと思つたのでした。

は船の底に横になりながら、起き上る元氣もなく、これまでの事やこれからの事などを考へて恐ろしい思ひをしながら、夜の明けのを待つてゐますと、夜明前の三時頃になる



と、自分に近づいて來る足音がします。耳を澄まして聞いてゐますと、それは波に浸はれたと思つてゐたワルストン等の六人が背無事で濱邊に泳ぎついてゐたのでした。そし

て船のそばにやつて來たのでした。そして暗闇の中を探り當て、フオーベスとパイロットと云ふ二人の水夫を介抱して息を吹返へさせ、次のやうな話をしました。

「此處は何處だらう」とフオーベスの聲。「何處だか分らないよ、現に角これから東の方へ行つて、人のある所を探さなければならぬ」とワルストン。「所で己れ達の武器はあるかい」とパイロットとワルストンは船の中のかくし抽斗を開けて、そこから五挺の鐵砲と彈とを出し、「ほら、此處にあるよ。うまい工合に水にも濡れてゐないや。」イバンスはどうしたらう。「後の方でロックとコープの二人で捕まへてゐるよ。彼奴は何處までも連れて行かへないぞ。」ケイトはどうしたか。無事で上陸したか知ら」とフオーベス。「ケイトかい、うむ、己れ達はあんな女を擄れることはないよ。己れ達が此處に打ち上げられた時、あの女は浪に渡されて行つたのを見くから見てゐたからな。今頃にもう深い

横取りしたセベルン號を、焼いてしまふのは残念でしたが、どうにもなりませんので、少しばかりの食べ物と武器とを取り出して、それを傳馬船に積み、ケイトとイバンスもそれ乗つて漕ぎ出しました。

さうして三日三晩の間、漕いでゆきましたが、その上大嵐に合つてその棧、折られ、走ることが出来なくなり、それから幾日かの間、風の潮の爲めに吹き流されながら、たうとう一昨日の十五日の夕方、このチエイアマン島の濱に流れつたのであります。この時乗組んでゐた人達は、毎日の疲れとお腹がひどく空いてゐた事から、まるで死人のやうに元氣がなくなつてゐましたが、船が濱邊に打ち上げられた時には後から小山のやうな大浪ががぶさつて來て、忽ち六人の水夫は浪に渡はれたと見え、ゐなくなつてしまひました。

ケイトは二人の者と共に船と一緒に濱邊に打ち上げられましたが、それから氣が通くなつて何と知りませんでした。ふと気が付いたので見ると、他の二人は自分とは反對の方向に倒れてゐました。ケイト

海を渡つてゐるだらうよ」とワルストンの聲。「それならいな、あの女は己れ達の秘密を大方知つてゐるんだから、若し助かつてゐた所で、長くは生かして置けないんだからな」とパイロットの聲。

そして悪者共はケイト、が船の底に横になつてゐることは氣が付かずに、嵐の中を東の方へ行つて了りました。ケイトはその足音が聞えなくなると、やつと、身を起して、さぐり／＼悪者達の行つた方向とは違つた、陥穿の森に走り込んだのでした。それは昨日のことでした。然し、途中で果物の實を一つ食べたわけですから、お腹が空いて倒れてしまつたのでした。

### 四、ドノバン達が危い

ケイトのこの物語を聞いた少年達は大層驚きました。今度ドノバン達を心配し出した。悪者等は東の方へ行つたと云ふし、若しドノバン達が見つかれば殺されるか奴隷にされるかして、食べ物や武器等を奪はれてしまふに違ひないと思ひました。そしてま

た、この佛人洞にもいまに押し寄せて来さうな気がして、恐ろさに身ぶるひした位でした。

其處でアリアンは勇氣を起して、モコーを連れてドノバン達を見に行くことになりました。何しろ、そんな悪者がこの島に来たと聞いては、自分達が別れて住んでゐるのほ危いから、皆一緒に防がなければならぬと思つたからです。

晝間は見つかるといけないので、その夜の中にもアリアンは、モコーを連れてボートで湖を漕ぎ出しました。そして東方川を下つてドノバン達のある筈の處へ行かうと云ふのです。

月が出てゐましたから、湖も風任せでどん／＼進み、東方川になつてからは、オールで漕いだりして進んでゆきました。兩岸はひっそりとして、何の物音もしなければ、一筋の火の光りも見えせん。實に淋しさ身に沁みわたるや、やす。

暫らく進んでゆくと、モコーは急にアリアンの腕をつかまへて胸を指さしました。見

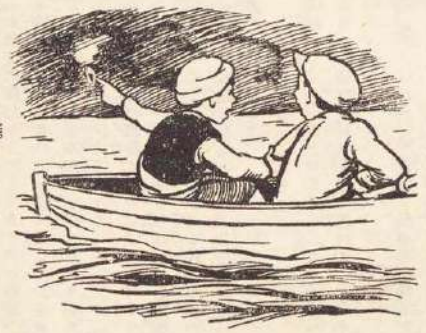
大層で、

「發つちやいけない。發つちやいけない」と叫びました。キルコガスはまた驚いて誰



だらうと見透す眼に、アリアンは駆け寄つて歌の後から飛びかゝりました。

ると、右岸の川から四十間ばかり離れた所に、樹の間から消えかゝつた火の光りがぼんやり見えてゐます。一體、これは誰が露營してゐるのでせう。ワルストン等でせうか、それ



れともドノバン達でせうか。「モコー、見ろ角、ボートを岸へつけて呉れ、僕が行つて来る。」

シヤケグワは、思ひの外に驚いて、ふり向きざま半腰はアリアン、目がけて一口にと飛びかゝりました。アリアンは危い所でひらりと身をかばして、一刀を獣の面にさつと斬りつけました。美事な腕前に、獣は一聲叫んでぶつ倒れました。

ドノバン、キルコガス、ウエツプ、クロースの四人がアリアンの所へ走り寄つて見ると、アリアンは獣の爲めにヒツ濡れたと見えて、左の肩頭から血が流れ出してゐます。「一體君はどうして今こんな所に來、あんなだれ」とキルコガスは驚いて訊ねました。「その事は後で話すから、君達は急ぎで僕と一緒に來てくれ給へ」と、アリアンは自分の傷のことも忘れて云ひました。

ドノバンはちつとアリアンの肩先から流れる血を見て、急に言葉をふるはせて、「有難う、アリアン君、僕は何と云つて君のこの思にお禮を云つたらいいのだから、君と一緒にには行くけれど、その前にお禮を云はせて呉れ給へ。君は僕の命の恩人だ」と心

「いや、お前は此處に待つてゐて呉れ」と云つてアリアンは舟からあがつて、腰刀を抜き、忍び足でその光りの方に近づいて行きました。

すると、前の森の中に、何か黒いものが動いてゐたと見る間に、それは一聲叫ぶと身を躍らして前の方に飛びつきました。それは一頭のシヤケグワ(アメリカカ虎)でした。それと同時に

「助けて：助けて：」と云ふ聲が網を裂くやうに聞えました。この聲こそ、ドノバンの聲でした。ドノバンは三人が露營の中で眠つてゐた時、自分は火の傍で寝り番をしてゐたのですが、つひうと／＼と居眠りをしてゐたのです。餘りに急でしから、ドノバンは武器を手にとる暇もなく獸に押し倒されてしまつたのでした。それで、一生懸命になつて、素手で獸と戦つてゐました。

キルコガスは第一にドノバンの聲に眼が覺めて、腰刀を取り上げ、獸を斬つたつとしました。その時、早くも駆け寄つて來たアリアンは、

の底から銃を出すやうな顔でびびりました。「一體なんが云はなくともいいよ、君だつて僕のやうな場合にゐたら、蛇腹銃を助けて呉れるに決つてゐる。もうそのことはいくら早く僕と一緒に來て呉れ給へ」と云ひました。

キルコガスはハンカチを出してアリアンの肩の傷を包んでゐる眼に、アリアンはケイトから聞いた悪者達のことを手短かに話しました。そして、かゝつたつて皆んなが佛人洞へ集つて、悪者共の來るのを防がなければならぬと云ひました。先刻アリアンがキルコガスに鐵砲を發つてはいけないと云つたのは、ワルストン等がその音を聞いて居所を知られるといけないと思つたからです。

ドノバンはこれを聞いて、日頃の強情も燃ゆるやうに消えて、「ああアリアン君、君は僕より百段の高い人格の人だ。僕は今迄の自分が取かしくなつて來た」としみじみと云ひました。

アリアンもドノバンの心が打ち解けたのを喜んで、しつかりドノバンの手を握つて「いや、ドノバン君、そんなに云つて貰つて

「僕こそ恥かしくなるよ。君とかうして今日手を振ることの出来たのを、僕はどんなに嬉しいか分りアしない、れえドノバン君は親友なんだ。僕は君と一緒に佛人洞へ歸つて呉れるまでは、どうしたつてこの手を離しはしないよ」と云ひました。

「歸ることも、僕は君の心を有難く思ふばかりだよ。今日から僕は喜んで君の云ふことに従ふよ。ちや、明日早速行かう」

「承知して呉れたか、あゝ有難い。僕の長い間のたゞ一つの望みがやつと今夜叶つたんだ。」

と云つて嬉しさの餘り、アリアンはドノバンの手を固く握つて振つて、

「だけど明朝ちやいけない、今夜直ぐ行かう。明日になつて悪者達に見付かつたら大變だから。」

「今夜直ぐ行つて、どうして歸るね。」

「ボートで行くんだ。僕はモヨーと一緒に君達が惑はし海にあると思つ、行かうとした途

中だつたんだよ。」

「さうだつたか。僕達はほんとに危い所だつた。君のお蔭で命拾ひをしたんだ」とドノバンはまたしみじみと云ひました。

五、悪者防ぎの用意

十五少年はまた揃つて佛人洞で楽しく暮すやうになりました。けれども、心配なのはブルストン等の悪者共です。彼等は食べ物や武器や道具などにも困るでせうから、少年達がそを澤山持つてゐると知つたら、きつと佛人洞に攻め来て奪つてしまふに違ひありません。ですから悪者達に居所を知られない方がいゝと思つて、それから少年達は餘り外へも出ないし、鐵砲も發たないやうにしてゐました。

「さうだつたか。僕達はほんとに危い所だつた。君のお蔭で命拾ひをしたんだ」とドノバンはまたしみじみと云ひました。

「歸ることも、僕は君の心を有難く思ふばかりだよ。今日から僕は喜んで君の云ふことに従ふよ。ちや、明日早速行かう」

「承知して呉れたか、あゝ有難い。僕の長い間のたゞ一つの望みがやつと今夜叶つたんだ。」

と云つて嬉しさの餘り、アリアンはドノバンの手を固く握つて振つて、

「だけど明朝ちやいけない、今夜直ぐ行かう。明日になつて悪者達に見付かつたら大變だから。」

「今夜直ぐ行つて、どうして歸るね。」

「ボートで行くんだ。僕はモヨーと一緒に君達が惑はし海にあると思つ、行かうとした途

中だつたんだよ。」



「さうだつたか。僕達はほんとに危い所だつた。君のお蔭で命拾ひをしたんだ」とドノバンはまたしみじみと云ひました。

「歸ることも、僕は君の心を有難く思ふばかりだよ。今日から僕は喜んで君の云ふことに従ふよ。ちや、明日早速行かう」

「承知して呉れたか、あゝ有難い。僕の長い間のたゞ一つの望みがやつと今夜叶つたんだ。」

と云つて嬉しさの餘り、アリアンはドノバンの手を固く握つて振つて、

「だけど明朝ちやいけない、今夜直ぐ行かう。明日になつて悪者達に見付かつたら大變だから。」

「今夜直ぐ行つて、どうして歸るね。」

「ボートで行くんだ。僕はモヨーと一緒に君達が惑はし海にあると思つ、行かうとした途

中だつたんだよ。」

「さうだつたか。僕達はほんとに危い所だつた。君のお蔭で命拾ひをしたんだ」とドノバンはまたしみじみと云ひました。

「歸ることも、僕は君の心を有難く思ふばかりだよ。今日から僕は喜んで君の云ふことに従ふよ。ちや、明日早速行かう」

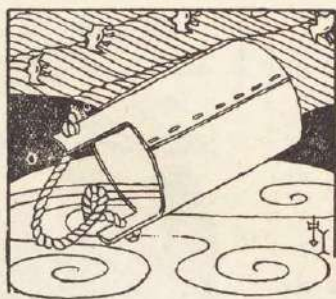
「承知して呉れたか、あゝ有難い。僕の長い間のたゞ一つの望みがやつと今夜叶つたんだ。」

と云つて嬉しさの餘り、アリアンはドノバンの手を固く握つて振つて、

「だけど明朝ちやいけない、今夜直ぐ行かう。明日になつて悪者達に見付かつたら大變だから。」

「今夜直ぐ行つて、どうして歸るね。」

「ボートで行くんだ。僕はモヨーと一緒に君達が惑はし海にあると思つ、行かうとした途



## 安壽姫と對王丸

森川 一朗

人買ひが来る、人攫ひが来ると云ふ恐怖は、街から村に擴がつて、越後の國直江津の近所の人々は慄へあがつてゐました。ですから一寸でも子供を一人で外へ出すやうな時には、その親達の心配は一通りではありませんでした。

昨日油屋の十になる男の子が攫はれた。今日は名主さんの十二になる女の子が行方知れずになつた。

れば旅商人なぞにも姿を變へて來ますので、却々捕へることが出来ませんでした。

殊に子供を連れた旅人などが宿屋へ泊らうものなら、大抵はこの悪者達が同じ宿屋に泊つてゐて何んとかうまく購しては、人買ひの手に賣つて逃げてしまふのです。ですからお上でも仕方なく街の入口に立札をして、少年や少女を連れた旅人はこの街の宿屋には泊らぬやうにと警しめました。そして宿屋にもさう云ふ者は泊めてはならぬとかたく申し渡しました。

或日の夕方、この恐ろしい直江津の街へ三人の旅の母子が着きました。その服装の卑しくないのや、何んとなく上品な顔かたちを見ても、身分のある人達だとは誰しも氣が付くことです。これこそ、この哀れなお話しの主人公となる安壽姫と對王丸、それから二人の母上とでありました。

とある橋の袂には、前のやうな立札がしてありま

—こんな噂は毎日のやうに立ちました。それにこの人買ひや人攫ひの悪者共は、子供ばかりでなく、大人の女や、時には若者までも連れて行つてしまひます。ですから夕方になると、皆恐れて外へ出る者もろく／＼ない位でした。

お上の役人も、どうかしてこの悪者達を捕へたいと骨折りましたが、彼等は尺八を吹き流しながら無僧になつて來たり、鈴を鳴らしながら御詠歌を歌ふ悪徳の姿に化けて來たり、又、時には武士にもな

したので、三人の母子は大層困つてしまひました。

「母さま、宿屋では私達を泊めて呉れないの。」と對王丸は心細さうに云ひました。

「仕方ありません。この國のお掟だと云ふから。」と母も落膽して答へました。

「では今夜は野宿するのですね、母さま。」と今度は安壽姫が云ひました。

「長い旅のことです。お父さまのみらつしやる筑紫までゆく間には、もつと／＼つらいこともありません。う。これ位のことでは我慢しなければなりません。」

母が慰め顔にさう云ひますと、姉弟はおとなしくこつくりをして見せました。

三人は河原の方へ下りてゆきました。そして今夜一晚を過ごすのに何處かい場所がないかと探しました。けれども何處も行つていゝ場所もありませんでしたから、材木の積んである所に腰を下して、疲れ切つた足を投げ出しました。



空には澤山の星がギラ／＼と光つてゐました。浪の音がどいッ、どいッ、と聞えます。

「母さま、父さまのゐらつしやる筑紫はどの邊でせう。」

對王丸は空の星を見上げながら云ひました。母は南の方の星を指さして、

「ほら、あそこに赤くギラ／＼と光つてゐる星が見えるでせう。あの方向ですよ。」

「まだ随分遠いの。」と安壽姫が呟ねました。

「遠いとも、遠いとも、これから幾日、幾月かゝることやら。」

「どうして父さまはそんなに遠くへやられてしまつたのでせうねえ。」

安壽姫の言葉に母は思ひ出したやうにそつと涙を拭ひました。

「悪い人の爲めにね。」と云つて後が云へない様子で、聲を呑みました。

と母は答へました。

「それは／＼さぞお困りでございませう。あの立札は旅人泣かせでございます。然し、宿屋にお泊りになつて悪者にお子さんを攫はれるよりはましです。」



と云つてその男は、つく／＼と三人を見てゐましたが、

「お見かけ申す所、あなた方はお身分のある方と思はれますが、一體どちらへ旅をなされるのですか。」  
「私達は筑紫まで参らうと思ひます。」

「早く父さまに逢ひたいな。」  
と對王丸が云ふと、母も安壽姫も同じやうな心で、黙つて南の空に光つてゐる星を見上げました。キラキラと閃えたその星は、なんとなく人の靈のやうでした。

二

その時、河原の小石を踏む人の足音がしました。

どのやうな人が来るのか、若しや悪い人攫ひではあるまいかと、三人は申し合せたやうに黙つて一つ所により集まりました。

「お前さん方はそこで何をしてゐるのですか。」と云ふ聲がしたかと思ふと、もう眼の前に一人のがつしりした男が立つてゐました。

「はい、私達は旅の者ですが、子供をつれては宿屋に泊ることも出来ぬと立札に書いてありましたから、此處で夜を明さうとしてゐるのでございます。」

「えッ、筑紫……筑紫と云へば日本の涯ではございませんか。女や、子供の足で、どうして行かれますかね。」とその男は驚いて申しました。

「筑紫にはこの子供達の父がゐるのでございます。」

一念こめて旅したら、行かれぬこともありませない。」  
「成程ね、大方私にもお察しすることが出来ます。それにしても今夜こんな所で夜を明かしてお體に障るといけません。遠慮はいりませんから私の家へ來

てお泊り下さい。」

この男の親切らしい言葉はどんなに母子の者を喜ばしたことでせう。でもこゝへ来る道々、種々な恐ろしい話を耳にしてゐましたから、若しやこの人が悪者ではないか知ら、と云ふ考へも起らないではありませんでした。それで、母も返事をしかねてゐますと、

「決して御心配は御無用です。私は山岡太夫、云ふ船米の元締です。怪しいものではありません。幸ひ私の家はこの街道から離れてゐますから、こつそり人を泊めても、誰にも知れる氣づかひはありません。さア、遠慮なくお出下さい。そのかはり何もお慰待は出来ませんけれど。」

「有難うございます。それではお言葉に甘えまして、一晚御厄介になりませう。」

三人はこれでやつと安心したと云ふ風に喜んで立ち上りました。そしてほど遠からぬ山岡太夫の家へが、母と二人の姉弟とを別々な船に乗せてしまひました。

この時になつて悪者だつたと氣が付きましたけれど、もう遅かつたのです。山岡太夫は安壽、對王の二人を、宮崎の三郎と云ふ人買ひに賣り渡し、その母を佐渡の二郎と云ふ矢張り人買ひの手に賣り渡してしまひました。

やがて二つの船は同じ港を出帆して、北と南に別れて行きました。安壽姫と對王丸とは船縁の所へ立つて、

「母さま、母さま。」と聲のかれるほど呼び続け、泣き續けました。

「何をぐづぐづ吠えるのだ。もう泣いても笑つても駄目だ。早く諦めてしまへッ。」と荒くれた悪者の船頭は二人を小突きました。

いくら打たれても、突かれても、二人は船縁に取りついた手を離しませんでした。そして母の乗つた

連れられて行きました。

世の中にもこんな親切な人がゐるものか、と三人が喜んだのは、實は大きな間違ひでした。この山岡太夫こそ人買ひ、人攫ひの一人だつたのです。

悪者の山岡太夫は、安壽姫と對王丸とその母とをまんまと瞞して家に泊めましたが、その晩はさも親切らしく、種々と御馳走なぞをして三人を慰めました。そして、

「幸ひあちらへ行く船がありませんから、私が船頭によく頼んで上げませう。船に乗つてお出になれば途中で悪者に出合ふこともありませんし、天氣さへよければちぎに九州に行くことが出来ます」と云ひました。

これが悪者とは少しも知りませんから、その親切にたゞ／＼有難くなつて、三人はどんなに喜んだこととせう。山岡太夫は三人を港へ連れて行きました

船が、遠く曲かに波間にかくれるまで呼び続け、泣き續けてゐました。

### 三

丹後の國由良の港の三莊太夫の家の背戸口で、安壽姫と對王丸はこつそり顔を合せました。まだ東の空がほの／＼と白んだばかりで、すつかり夜も明け切らない時分です。

「對王や、お前はつらからうねえ。」と安壽姫はもう眼に涙を泛べてゐました。

「それよりも姉さまこそ。」

對王丸は自分の身よりも姉の身を案じて、手足もあれ、顔までげつそり瘦せた哀れな姉の姿を見るに忍びぬ。云ふ風でした。

さう云ふ對王丸だつて、澤山の人に尊ばれて何不自由のない若様の身分でありながら、牛や馬よりもつとひどい仕事をさせられるので、今では見違へ

るほど瘦せこけてしまひました。

「ね、對王や、私昨夜妙な夢を見たの。」

「どんな夢？」

「私達はね、この家逃げだしたの、そして一生懸命に山の方へ駆けてゆくと、お前は石につまづいて足を痛くして立てなくなつてしまつたの。私は困つてしまつてね、向ふを見ると一人の見すばらしい女の子の人が後向きに立つてゐるから、お助けして貰はうと思つて、「もし、小母さん、小母さん」と聲をかけたの。けどその小母さんには聞えないと見えて、いくら大きな聲で呼んでも振り向いては呉れないの。その小母さんは口の中で何かもぐ／＼云つては「ほうらほい、ほうらほい」って馬でも追つてゐるやうなの。私は怪我をしたお前を置いてゆくことも出来ないし、ほんとに困つてしまつて泣き出してしまつたの。」

「そこで眼が覺めたの。變な夢だね。」

「私ね、眼が覺めてから考へて見ると、その見すばらしい小母さんが、どうも母さまに似てゐるやうに思はれてならないのよ。」

母さま、と聞いて對王丸もはつとしたやうに首を垂れました。直江津の港で悲しいお別れをした切りで、母さまは今何處にどうしてゐることやら、安齋姫も對王丸も、一日とてそのことを思はないではおられませんでした。

二人が母のことを考へて涙ぐんでゐると、この時後の方で、

「こらッ。」と云ふ大きな聲がしました。

「何をそんな所でぐ／＼してゐるんだ。早く仕事に行かぬか。」

それは恐い、恐い三莊太夫の聲でした。安齋姫は突き飛ばされてよろ／＼とよろけました。それと一緒に對王丸は、耳がガンと鳴るほど横面を襍りつけられました。



そこで、安壽姫は潮汲みに、對王丸は柴刈にと出て行きました。日に三荷の潮を汲まなければならぬ姉も、日に三荷の柴を刈らねばならぬ弟も、どちらも身に餘るほどのつらい仕事でした。その上強慾の情を知らぬ三莊太夫は、暇さへあれば、姉には糸を紡げと云ひつけるし、弟には藁鹽焼く手傳ひをさせました。

二人共生れて始めての仕事で、慣れない上に大人でも苦しいほどの仕事でした。それに金持でありながら、げちんぼうの三莊太夫は、姉弟にろくく食べ物らしい食べ物もくれませんでした。これでは二人の體が弱つてしまふのも無理はありません。

今日も安壽姫は、濱へ行つて汐を汲みました。桶一杯入れた汐を天秤で擔いで、濱の小石の上を思をせき／＼歩いて來ますと、ふと大きな石につまづいて、がつくりと膝をついてしまひました。はつと思ふ間に、浪花は桶からこぼれ出てしまひました。

弟もこんな苦しみを一日でも餘計にしずには濟んだのに、と思ふのでした。

固く、固く、決心した安壽姫は、もう涙も流しませんでした。そして汐汲むこともいつもよりはつらいと思ひませんでした。人間は誰でも、命をかけて決心した時は本當に強くなるものです。

四

「それでは姉さま、お言葉に従つて對王丸は一人で逃げます。待つて下さい。屹度姉さんを助けに來ますから。」

「うまく逃げお呉れよ、姉さまのことなどは氣にかけないでね。そして偉い人になつてお父さまのお國を取り返すのですよ。」

「さやうなら、姉さま！」

「さやうなら、對王丸！」

「さやうなら。」の聲も人に聞えぬやうに幽かではあ

「あゝ。と安壽姫は嘆息をしました。そして、「汐も憎いが、この世も憎い。桶や、小石はまだ憎い。」と歌ともつかず呟きました。こんなつらい思ひをする位なら、いつそ死んでしまつた方がまだとは、幾度考へたことぞせう。

安壽姫は小石の上へつたりと坐つたまゝ、ちつと考へ込みました。

「弟と一緒に逃げようと思つて今日までその折を狙ひながら辛棒して來たけれど、もうとても逃げ出すことは出來ない。私は女だから諦めよう。このまま死んでもかまはない。けれども弟は出世をして父さまが悪者に取られた國を取り返さなければならぬ。さう／＼、弟一人を逃がしてやらう。私のやうな女が隨いてゐなければ、弟は屹度うまく逃げて呉れるだらう。」

さう思ふと、安壽姫はなせもつと早くこの事に氣が付かなかつたかと今更後悔しました。さうすればお別れでした。

對王丸はいつものやうに朝早く柴刈りにゆくやうな風をして、この家をつと逃げ出しました。でも、對王丸の逃げたことはむきに三莊太夫に知れましたから、追手の人は澤山後を追ひかけました。

對王丸は野も森も、小川も丘も、命かぎり根かぎり駆けぬけました。幾度となく轉んでは起きて逃げましたから、足と云はず手と云はず幾ところも傷つてしまひました。追手の人々がだん／＼自分に近いづいて來るのを知ると、どうかして遠く離れてしまひたいとおせりましたけれども、子供の足では却々思ふやうになりませんでした。

江和村と云ふ所まで來た時、ふと大きなお寺が眼につきました。あのお寺の和尚さんに頼んだら、和尚さんは屹度助けて下さるだらう。と思ひ付きましたので、對王丸は矢庭に國分寺と云ふそのお寺に飛

び込んで、泣いて和尚さんに頼みました。

和尚さんは息も急しく話す對王丸の話を書いて「それは可哀さうな、よし／＼私が助けて進せよう。」と云つて對王丸を大きな籠の中に入れてました。

そこへ、どや／＼と追手の人達が駆け込んで来ました。それは三莊太夫の息子の三郎と五郎、それから四五人の召使達でした。この三郎と五郎も父親にまけぬほどの無慈悲な息子でした。

「和尚さん、この寺へ儲かに十二三になる男の子が逃げ込んだのですが、どうか渡して下さい。」と三郎はえらい權幕で云ひました。

「いや、そんなものは知らぬ。」と和尚さんは首を振りました。

「知らんと云つたつて、儲かにこの寺へ逃げ込んだのをちらと見かけたのです。あの子は澤山のお金を出して買った子ですから逃げられては大變です。」  
「くだいな、知らぬと云つたら知らぬ。」

「それでは家探ししてもよいか。」

「どうでも御勝手になされ。」

追手の人達は座敷へ上つて本堂から庫裡の方まで残らずの部屋を探しました。けれども籠には氣がつかずにしまひましたから、和尚さんも、中にゐた對王丸も、ほつと一安心しました。

追手の人達がす／＼と歸つてしまつてから、和尚さんは籠の中から對王丸を出して、傷ついた手や足に膏藥を張つてくれました。そして靜かにその身の上を訊ねました。

對王丸は父母のことや、自分達姉弟が人買の手から三莊太夫に渡されたことまで、残らず話しますと、和尚さんはその餘りに哀れな物語りに、流石に老いの眼から涙を流しながらそれを聞いてゐました。

かうして對王丸は、國分寺の和尚さんの情けで、無事に助かることが出来ました。和尚さんは間もなく、そつと對王丸を京都へ連れてゆきました。そこ

で對王丸は出世の糸口を握ることが出来たのです。

對王丸を逃がした後の安壽姫はどうでしたか。もちろん、情けを知らぬ三莊太夫にギリ／＼に縛られて、打たれる、蹴られる、火責め、水責め、筆で書



「知りませぬ。」

かうして三莊太夫は安壽姫を責めて、責めて責め抜きましたが、安壽姫として、元より弟が何處へ逃げたかは知らう筈がありません。可哀さうに、安壽

くことも出来なほどのひどい目に遭はされました  
「これ、女、お前が逃がしたのだらう。」

「はい。」  
「何、逃がしたのだと。さア、何處へ弟を逃がした、白状しろ。」

姫は餘りにひどく打ち蹴りされましたので、たうとう死んでしまひました。

五

對王丸は京都へ出てから、尊い身分の人に救はれ、

出世をして昔の父の國を取り返すことが出来ました。けれども、姉の安壽姫のことが氣になつてなりませぬので、お上にお願ひして丹後の守となりました。そこで早速三莊太夫を捕まへて重い刑をしましたが、その時はもう安壽姫は亡くなつてゐましたので、對王丸は大層嘆きました。

また母の行方は家來を方々の國にやつて探させましたが、とんと分りませんでした。そこで對王丸は、自分で目星をつけた佐渡へはる／＼渡つて、その役人にも手傳つて貰つて、いろいろと調べましたが、矢ッ張り分りませんでした。

ふと、鹿野浦あたりに人買船が時々立寄ると云ふ話しを聞き込みましたから、家來を連れて、その濱の方へ行つて見ました。其處は四十二曲りと云ふほどの、佐渡で一番の難所でした。やつとのことその難所を越えて、七曲り坂の下まで來ますと、其處に一軒の家がありました。



ひかし、越前の國の大士呂といふ所に、四五六と云ふ、それは、獵の上手な爺さんが住んで居りました。一度弓を肩にして家を出たら、必ず二三の獲物を獲つて來ない事はないと云ふ程なのです。

四五六爺さんは又、マロと云ふこれも評判の利口な犬を持つて居りました。四五六爺さんは弓の名人でした。併し、このマロが居なかつたら、お爺さんはその半分程の働きも出來なかつたに違ひありません。

すぐ様家來が中へ入つて聲をかけて見ましたけれども、家の中には誰もゐないやうでした。裏へ廻つて見ますと、其處に見すばらしい盲目のお婆さんが、鳥を追つてゐました。

對王丸は家來の後から行つて見ますと、そのお婆さんは後向きになつて、何かもぐ／＼云ひながら鳥を追つてゐるのです。よく聞くとそれは、

安壽戀しやほうらほい

對王戀しやほうらほい

と囁れた哀れつばい聲で歌つてゐるのです。

對王丸ははつとしました。姉の安壽姫が夢に見たと云ふ話しとそつくりだつたからです。

對王丸がこの變り果てた母の體にすがりついて、

「母上様」と云ひ、

「お、お前は對王であつたか。」

と云はれて、母子が相抱いて泣いた時の喜びは、どんなだつたでせうか。(をばり)

## 四五六爺さん

とマロ

久米 舷一

ん。マロは身體の小さい狐犬で、クルツと巻いた尻ツぽを持つて居ました。一寸見た所、なんだこんな犬がと思ふのですが、獸を獵り出すには誠に妙を得てゐました。

ところが近頃はどうしたものか、多分歳とつたのでせう。マロは以前の様な働きが出來なくなりました。以前は先に立つて行つたものが、此頃はハアハアと舌を出して、お爺さんの後について、やつと山を上つたり、兎などを追ひかけても、充分捉へら

れるのに、齒の力が足りない爲、逃がしたりしてしまつたりしました。併し追出すのも可哀さうなので代りの犬が見つかる迄はと思つて飼つて居ました。さて、秋も終り近くなつた或日の事でありませう。何時もの通りお爺さんは、マロを連れて獵に出てゆきました。所が今日は又どうしたものか、一寸も獲物がありません。夕方頃になつてお爺さんの腰にぶら下がつた物は、アコウと云ふ肉の臭い、美味しくない鳥一羽でした。お爺さんはガツカリして、家路につきましましたが、餘り深入りをしたため、擇平と云ふ所まで来た時には、もうスツカリ日が暮れて了ひました。家へ行く迄には、あと一つ山を越さねばなりません。そこで仕様ことなしに、野宿をする事に決めました。

マロもその骨を頂戴しました。お爺さんは枯枝を澤山集めて来て、どん／＼焚火を大きくしました。それは狼が襲つて來るといけなと思つたからです。併し、狼よりもつと／＼怖しいものが、つひ近くに居る事を、一寸も知りませんでした。

二

ヒツソリとした静かな晩でした。樺にもたれて、バチ／＼と音を立て、燃え上る焔を見てもすと、お爺さんは段々いゝ氣持になつて、眠くなつて來ました。

「こいつはたまらなく眠いな。何とかして寝る工夫はないかしら」お爺さんはかう思つて見廻しますと丁度今迄よりかゝつて居た樺の下から、一丈ばかりの所が三又になつて居るのを見つけ出ししました。木の上なら狼の來る事もあるまいと思つて、弓矢を持つて上つて行きました。

所が今迄何か上の方を見上げては、ウー。ウー。と低く唸り續けて居たマロが、お爺さんが三又の所で寝ようとするとうえ出しました。お爺さんは、ハテナ何か來たのかと思つてあたりの様子を伺ひましたが、別段何の變つた所もありません。

「マロ、何だ。静かにしないか」大聲で呶鳴つて見ましたが、やめずに盛んに吠えたてるのです。お爺さんは「チエツ」と舌折をして又下へ降りて行きました。そして焚火の傍へ行くと、マロは如何にも嬉しさう



にして、泣き止むのです。しかし、又、元の木の處へ歸つて行くと、直ぐ氣狂のやうになつて、木の廻りを駆け廻りながら吠えたてます。

「ハ、ア、マロの奴め、自分だけ下に残して置かれるものだから、それで不平なんだな」お爺さんはかう思ひましたので、又下へ降りてマロの首すちを叩きながら、

「マロ。俺は寝るんだから静かにしてゐてくれ。いか。今度吠えたら承知しないよ」とよく云ひ聞かせて木へ上りました。そしていざ寝ようとする時、

どうでせう又々火のついたやうに泣きたてるのです  
氣の短かい四五六爺さんは、カツとして、いきなり  
腰の山刀をぬくが早いか、マロを目がけて投げつ  
けました。

拍子の悪い時には仕方がないので、丁度太股の  
所にザクと突きさしたのです。勿論マロは消魂る  
やうな叫聲を上げました。併し依然として上を見上  
げた儘、吠えるのをやめません。お爺さんは「ハテ  
ナーと思まひした。

其時、何かお爺さんは首すぢのあたりが冷々とし  
たやうな氣がして、思はず後を振りかへりました。  
と、どうでせう。三叉から五尺と離れてゐない所に  
ドス黒い一匹の蟒が、巨大な鎌首を擡げて、ジツとこ  
ちらをねらつて居るではありませんか。焚火の焰に  
あか／＼と輝く眼や、太い胴腹が、幾重にも櫛の枝  
を巻いてゐるのを見た時、お爺さんはゾツとして、  
身體中の肉が震蕩つてしまひました。弓矢を取る暇

いゝ加減を云ふ者もありましたが、到頭そんなもの  
は、一刻も早く退治してしまふがよい、と相談が決  
まりました。

翌る朝四五六爺さんを先頭にして、村の人々は手  
に／＼鎌だの、竹槍だのを持つて、山へ繰り出して  
行きました。

櫛平へ来て見ましたが、たゞ草が一面に亂れてゐ  
るだけで、蟒蛇は勿論、マロの姿も見えませぬ。併  
し蟒蛇の通つた跡が、歴々と草の上に残つて居まし  
たので、人々はそれについて、猶奥深く這入つて行  
きました。

赤沼と云ふ沼の傍で、人々は遂に蟒蛇を発見しま  
した。昨夜あんなに、意氣地なくにげだした四五六  
爺さんも、今日は大威張で、弓に矢をつがへました。  
そして岩陰にかくれて、今、丁度沼を泳いで渡らう  
とする蟒蛇をねらつて、一矢放ちましたが、それは見  
事に蟒蛇の脰を打ち抜いたのでした。人々はよつて

もなく、半分落ちるやうに枝から飛び下りますと、蟒  
はスル／＼と伸びて、見る／＼内にお爺さんの足か  
ら胴へかけて巻いて行きました。お爺さんは聲もた  
てる事が出来ません。

丁度其時、股に痛手を負ふたマロが、勇ましく蟒  
蛇に飛びかかりました。尾の方をしたたか食ひか  
れた蟒蛇は、お爺さんを離して、今度はマロの方へ  
向つて行きました。お爺さんはぼ／＼として居まし  
たが、氣をとりなほして、瀧の方へ向けて目茶苦茶  
に逃げ出しました。

### 三

夜明近く、お爺さんは死んだやうになつて、樵夫  
の小屋に辿りつきました。

「四五六爺さんが蟒蛇にのまれさうになつた」と云  
ふ評判は、忽ち村中の人を驚かせました。

「脰の廻りが四斗櫛程もあるさうだ」  
「頭は三つで、尾は二つに裂けてゐるさうだ」など

たかつて、のた打ち廻る蟒蛇をすだ／＼に切り裂き  
ました。腹のあたりを裂いた時、犬の死體が出て來  
ました。

毛の色が變つてゐたので、マロではあるまいと云  
ふ人もありましたが、猶裂いて行くと、マロが平生  
つけてゐた、鎖の首環が出て來ました。

四五六爺さんは、マロの太股にあり／＼と残つた  
刀傷を人々に示しながら、マロが、飼犬に刀を投げ  
つけるやうな無情な主人に代つて、死んで呉れた事  
を話して聞かせました。大粒な涙が幾すぢもその頬  
を傳つて流れました。

四五六爺さんは、勿論それ以來獵師をやめて百姓  
になりました。

大土呂の近くには、今でもその縁續きの者が居る  
さうですが、其佛壇には例の首環がちやんと納めて  
あると云ふ事です。(をばり)





幼年詩  
虹の歌(推薦)

熊本縣荒尾北校學二

海邊公子

うま  
田をすいてゐる  
うまが  
水にうつつてゐる  
つゆ  
いものつゆ  
ころつころつおちた  
にじ

二つでた  
こいのと  
うすいのと  
二つ出た  
二つ出たにじ  
こいはうが  
青い田に  
うつつてゐる  
にじがたつた  
三日月さんより  
大きいなあ

五月  
うんぜんだけ  
うんぜんだけが  
青うして  
すずしい  
ようと(はつきり)見える  
うんぜんだけの上に  
白いくもが  
ちよつとある  
さかなとり  
雨がやんだ  
子どもが三人  
川へはしつた  
さうり  
きうり  
うつにはひ  
二かいまでしてきた

三月月さんより  
きれいだなあ  
川口  
がたの中に  
すわつたふね  
ほばしらの  
高さあ(高いなあ)

夕日

もうすこうしで  
ちつこうの(兼港の)  
さきにはいる  
お日さん  
がたにひかつて  
まばゆい  
まばゆい

水

ものほしさをに  
みその水が  
うごいてゐる  
かぜ  
田の中から  
すずしいかせに  
まじつて  
あついかせが  
ふいてくる  
なつぎく  
小さくさいた  
かばいろの  
きくのにほひは  
にがいなあ

うめ

本箱に  
入れておいた  
あをいうめ  
きかない  
にほひの  
し出した  
うま  
かへるの  
なきやんだ田で  
うまが  
一こゑないた  
てふてふ  
雨がやんで

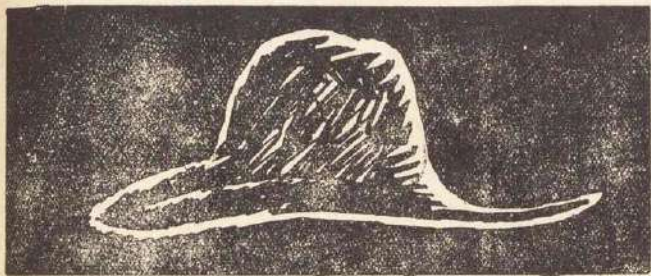
白いてふてふ  
ぐみのはに  
とまつた  
もも



ももに  
ナイフの  
にはひが  
ついてゐる  
うきぐさ

田の中の  
うきぐさ  
かたつぽに  
よとつる  
おみや

田の中の  
おみやの  
もりから  
うたが  
きこえる  
晶  
すいてゐる  
島から  
土のかせが  
ふいてきた  
五九



# 都の晝

竹久夢二

六〇  
留吉は稲田の畦に腰かけて遠い山を見てゐました。いつも留吉の考へることでありましたが、あの山の向ふに、留吉が長いこと行つて見たいと思つてゐる都があるのです。

そこには天子様のお城があつて、町はいつもお祭りのやうに賑かで、町の人達は綺麗な服をきたり、うまいものを食べて、みんな結構な暮しをしてゐるのだ。欲しいものは何でも得られるし。見たいものはどんな面白いものでも、いつでも見ることが出来るし。どこへゆくにも電車や自動車があつて、ちよつと手を舉げると思ふところへゆけるのだ。

おなじ人間に生れながら、こんな田舎で、朝から晩まで山ばかり見て暮すのはつまらない。いくら働いても働いても、親の代から子の代まで、いやおそらくいつまでたつても、もつと生活がよくなることはないだらう。牛や馬の生活と異つたことはない。たとへば馬であつても都で暮して見たいものだ。廣い

都のことだから、馬よりはすこしはましな生活が出来るだらう。留吉はさう考へると、もうちつとしてみられないやうな気がするのです。

それから三日目の朝、留吉は都の停車場へ降りてゐました。繪葉書や雑誌の寫真で見得た想像はしてゐたが、さて、ほんたうに都へ來てみると、どうしてこんなに澤山な人間が、集まつてゐるのだらう。そしてなんのためにこの大勢の人間は忙しさうにあつちこつちと歩いてゐるのだらう。ちよつと立つてゐる間にさへ、自動車も二十臺も留吉の前を走つていきました。

唐草模様のついた鞆一つさげた留吉は右手に洋傘を持つて、停車場を出て、歩きだしました。

「おい／＼危ない！」腕に青い布をつけた巡査がさう言つて、留吉を電車線路から押しだして、路よりもすこし小高くなつた敷石の上へ連れていつて、

「電車に乗るのなら、ここで待つてゐて下さい」と言ひました。

そこには立札があつて『帯地全く安し』と書いてあるのです。留吉は『呉服屋の廣告だな』と思ひましたが、帯地の安いことは留吉には用のないことでした。それよりも今夜留吉はどこへ寝たら好いだらうと考へました。

留吉は、小學校時代の友達で、村長の次男がいま都に住んで好い位置を得てくらしてゐることを思出しました。

卒業試験の時、算術の問題を彼に教へてやつたことがあるから、訪ねてゆけば、彼もあの時の友情を思出すに違ひない、留吉は、昔馴染の友達の仕事をやつと思出しました。

そこは山の手の高臺で、門のある家がすらりと並んでゐるのです。

二十四番地、都は掛値をする所だから、なんでも

半分に値切つて、十二番地、だなんて、村で物議りの老人がいつか話してくれたのを思ひ出したが、まさか今はそんなことはあるまいと、留吉は考へました。

さて二十四番地はどこだらう。  
細つこい白い垣根に、紅い薔薇をからませた門が

ありました。石を積みあげてそのうへにガラスを植ゑつけた塀がありました。またある所に、まるで西洋菓子やうにべたべたいろんな色のついた、ちよつと食つて見たいやうな西洋館もありました。紅い丸屋根をもつた、窓掛の桃色の、お伽噺の子供の家のやうな家もありました。

二十四番地！ さあここぞ、今田時雄、ああこれだこれが昔の友達、時公の家だ、白い石の柱が左右に立つて、鐵の飾格子の扉のやうな門がそれでした。まるで郡役所のやうな門だなと、留吉は考へま

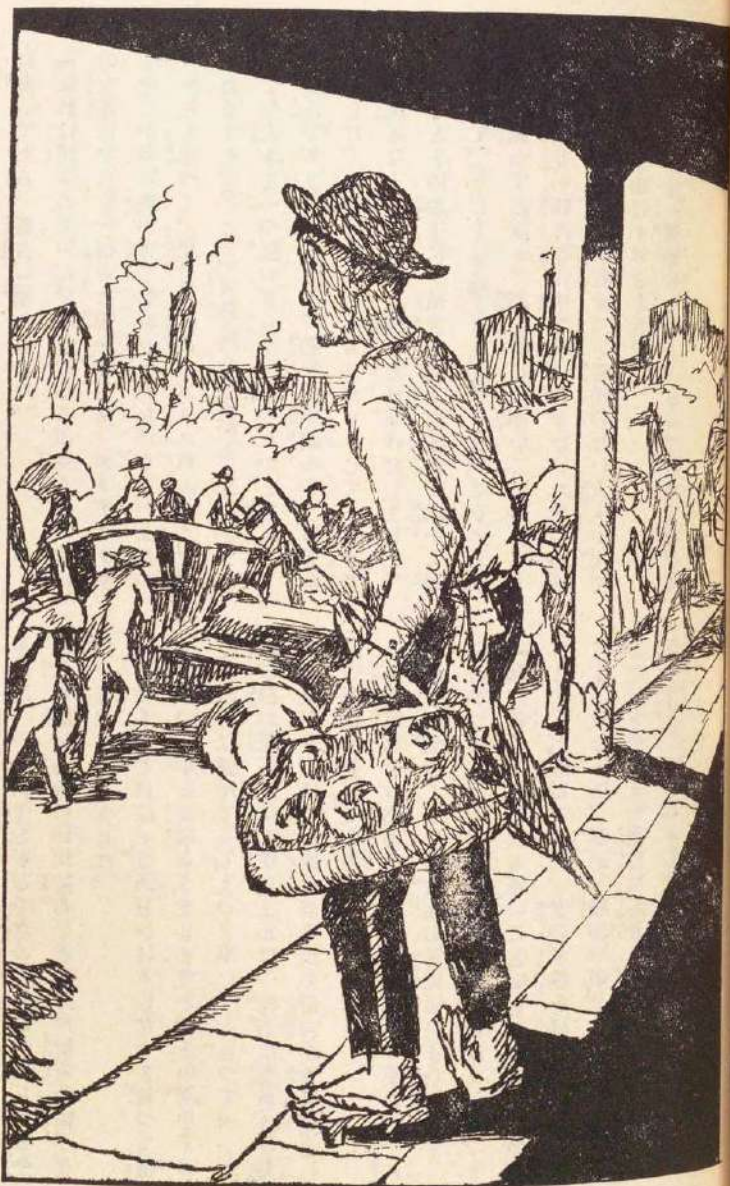
六二  
門からすつと玄關まで石を敷きつめて、兩側に造花のやうな舶來花を咲かせてありました。

「時公もエラクなつたもんだな、算術なんかあんな下手糞でも、都へ出るとエラクなれるものだ」留吉、昔の友達の家に入つて、玄關の方へすん／＼歩いてゆきました。

すると、なんだか變てこな心持が、留吉の心をやに重くしはじめました。變だぞ、留吉は生れてはじめて、こんな厄介な氣持を経験したので、自分にははつきり解らないが、留吉はすこし氣まりがわるくなつたのです。それはたいへん留吉を不愉快にしました。

「時公におれは竹馬を作つてやつたこともあるんだ、あいつはその事もまだ覚えてゐるだらう」

この考は、留吉をたいへん氣安くして、元氣よく玄關の前まで、留吉を歩かせました。  
「御用の方はこの釘を押されたし」と柱の釘のわき



に書いてある。留吉は讀みました。

「おれは用があるのだ。それにこの主人は、おれの友達だからな」留吉は鈕を押した。チリチリチリとどこか家の奥の方で音がしました。さういふ仕かけかなと思つて、留吉は、入口のガラス戸のところを見てみると、そこに一寸角ほどの穴があいてゐます。そこで大きな一つ眼がきらつと光つたかと思ふと、頭の上でチリチリチリと、舶來の半鐘のやうな音がしました。留吉はもうとてもびつくりして、何を考へる閑もなく、どんだん門の方へ駆けだしました。するとその拍子に、留吉の帽子が留吉の頭から飛び去つて、ごろ／＼と轉つてゆきました。こいつは大變だと思つてゐると、悪い時には悪いことがあるもので、造花の西洋花の中から、齒をむいたチンのやうな顔をした、しかしすつと愛嬌のない大犬が出てきて留吉を追ひかけました。

留吉は、十一番地のところまでまるで夢中で駈出し

ました。やれ／＼とそこで立どまると、あとから今田家と襟を染めぬいた被布をきた男が留吉の帽子を持つて立つてゐました。

「どうも、これはお世話をかけました」と言つて留吉がその帽子を受取らうとしますと、その手をぐつとこの男は攔んで「ちよつと來い」と言つてペンキ塗の白い家へ連れてゆきました。椅子に腰かけた人間の眼が十三ほど一度にぎろつと留吉の方を見ました。それは巡査でした。

「先程電話でお話のあつたのはそいつですね」一人の巡査が立つてきて、被布の男に言ひました。

「こいつですよ、旦那」被布の男が言ひました。

「私はその、なんにも悪いことをしたのではないですよ。その、私は、その、昔の友達を訪ねていつたですよ。たゞその、眼が、眼がそのチリチリチリつと言つたですよ」留吉は巡査に言ひました。巡査は髷を引張つて言ひました。

「お前は今田氏の昔の友達だと言ふのだね。それに違ひないか、何といふ名だ」

巡査は今田氏へ電話をかけました。

「ははあなるほど、昔の友達などと當人は申して居りますが……ははあ、いやわかりました。では、とりあへずですな。外に窃盜などの目的はなかつたものと推定して、放免することにいたしませう……はい……はい、どうもお手数をかけました。チリンチリン」

電話をかけ終つた巡査は、また留吉の方へ出てきて言ふには、

「今田氏はお前のやうな友達を持つたことはないと言ふよ」

「今田時雄は、その、算術の試験の時……」

「もう好い。兎にやこの帽子はお前に返してやるが今後は、他人の自宅へ無断で浸入しては相ならぬぞよし」

留吉は、とある公園のベンチに腰かけて、つくづく帽子を眺めました。

この帽子が悪いのだ。とにかくこの帽子は、おれをもつと不幸にするかも知れない。田の草をとる時にも、峠を越す時にも、この帽子はおれの連れたつたが、今は別れる時だ、留吉は、帽子を捨てしまはうと決心しました。そこで、腰かけてゐたベンチの下へ、そつとかくして、そこを立さりました。公園の門を出て二三間歩くと、

「もしもし」と言つて巡査が追ひかけてきました。「これは、あなたのです」と言つて、帽子を留吉に渡しました。

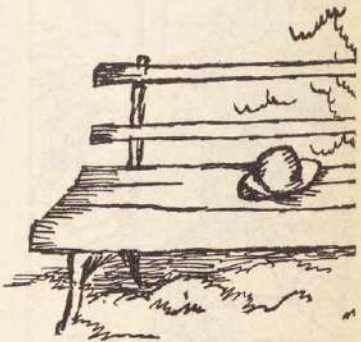
「いや、その、これはその……」留吉が、何か言はうとするうちに、もう巡査は、外の帽子か何かを探しにいつてしまひました。

留吉は、不幸な帽子を手を持つて歩いてゐるうちに、たいへん腹がへつてきました。

「民衆食堂一食金十銭」と書いてある西洋館があり  
ました。留吉は、そこへ入つていつて、隅つこのあ  
いた椅子へ腰かけて、帽子を卓子の上へおきました。  
十銭の食事が終ると、留吉は帽子を椅子の下へか  
くして、何食はぬ顔をして、出てきました。「君の帽  
子だらう」あとから食堂を出てきた車屋さんが、す  
つぱりと留吉の頭へ、帽子をはめてしまひました。  
留吉は、長い間こがれてゐた都を見物することも、



六六  
何か仕事を見つけることも、また昔のお友達を思出  
すことも忘れてしまつたやうに見えました。たゞも  
う、どうして、この不幸な帽子と別れたものかと、  
その事ばかり考へて、知らない街を通りから通りへ  
と歩きつづけるのでした。  
日が暮れて街の人通りが少くなつた時分に、留吉  
は街はづれの汚ない一軒の安宿を探してあてました。  
『今度はうまくいつたぞ』留吉は、宿の二階の窓か  
ら、裏の空地へ帽子を投げ出しました。それで安神  
して、その夜はぐつすり眠つてしまひました。人の  
知らないうちに立上しようとおもつて、眼をさます  
と、帽子は枕元にもやんとおいてあります。  
留吉は、また不幸な帽子を持つて、宿を立ちまし  
た。留吉はとある大川の堤の上を歩いてゐました。  
『ここだ帽子を捨てるのは、川へ流してしまへば、  
もう返つて来ないだらう』  
留吉は、橋の上からカ一ぱい帽子を川の中へ投げ



やりました。帽子は、小さく波に乗つて、ぶつくり  
ぶつくり川下の方へ流れてゆきました。

「あばよ、をととひ来いだ！」

留吉は、泣きたいやうな好い氣持で、だんだん遠  
くなつてゆく帽子に別れをつけました。すゝと一  
艘のモーターボートが、ボクンボクンボクンと言ひ  
ながら、帽子の方へ走り出しました。ボートの中  
には白い服きた男が二人、巡査が一人乗つてゐまし

た。まもなく帽子に追いついて、一人が帽子を救ひ  
あげると、急いでボートを岸へつなぎました。留吉  
があつげらんとして見物してゐるうちに、帽子は  
いつの間にかまた留吉の頭の上へのつかつてゐまし  
た。

留吉は、なせか嬉しくなつて、不幸な帽子を頭へ  
のつけたままで泣き出しました。しかし、どう考へ  
ても、今田時雄の女關の一寸角のガラスの穴からの  
ぞいた眼が、公園のベンチのうしろの木蔭から  
も、公衆食堂の椅子の下からも、宿屋の裏の空地に  
も、大川の橋の下にも、いつもぎらぎらと光つて、  
留吉のするのを見えてゐるやうに思へるのでした。  
これは留吉には、たまらないことでした。

留吉が、不幸な帽子をかぶつて、都の停車場から  
また田舎の方へ歸つたのは、それからまもないこと  
でした。(一九二四、七、二三)

ホシローヒルム

(写生旅行の巻)

1 出発



2 汽車の中



3

大暴風雨



4

大河



5

露営



7

滑り過ぎ



6

大雪渓



8

一夜の宿





オーの  
スケツク

9



蟻軍  
未

10



オニの  
スケツク

13



大風未

14



ホシローの  
一喝

11



絶景  
発見

12



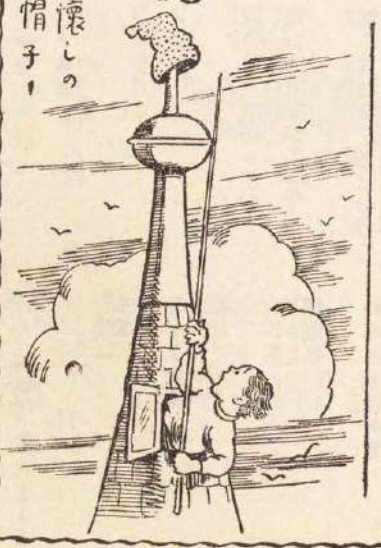
小鳥の如く

15



懐しの  
帽子

16



七一

七〇



童謡

きびの畑の  
チョンチョンギーす  
そろり、そろりと  
啼きやむころだ

日傘

名古屋市 鳥本 夫二

日傘を廻はそ  
くるくる廻はそ

秋が来る

愛媛縣 仙波しげる

お城のうしろで  
城見て廻はそ

朝から晩まで  
小風が吹いて  
ごまの畑の  
ごまの實はせる

赤い傘廻はせ  
青い傘廻はせ  
お蔭のはたから  
城見て廻はせ

なぞかけ

京都市 小西 行夫

なぞかけよ  
なぞかけよ

股引はいた坊さまが  
幾百人と立つてます

姉さま姉さま惚ばたけ

なぞかけよ  
なぞかけよ

なぞかけよ

着物を三かさね五かさね  
お藪の中に立つてます  
姉さま姉さまたげのこよ

縄電車

七二  
大阪市 名方まさる

ちんちんごうごう  
縄電車

あんよを捕へて  
駆けて行く

ちんちんごうごう  
縄電車

わんわも後から  
駆けてこい

草取娘

名古屋 大空 夏子

なせくはえた  
小さな草よ

お花畑の  
うねまの草よ

麦ぶちの唄

臺北市 中島みさを

うんとこサツサツ  
やれこらさ

どつたんばつたん  
麥ぶちばつたん

兄きの唄は  
をかした節だ

姉さが唄は  
わからぬ唄だ

うんとこサツサツ  
やんこらさ

どつたん ばつたん  
麥ぶちばつたん

お人形返へそよ  
妹は



どーこの  
草葉の

おはやしはれ  
草取娘  
抜かには叱れる  
抜くのは可哀想  
抜こかどうしよ  
もう陽は高い  
小さな草よ  
なせく生えた

とんぼつり

群馬縣 青柳 花明

とんぼ追つてとんぼ追つ  
て 来た道は

どこのどの道知らぬ道  
小山のむかふに

きこえるは  
夕やけ小やけの唄のこゑ

お人形かへそよ

東京市 小日向マサヲ

お人形返へそよ

ねえさんは  
あの秋や

七つの  
ただっ子さん





# 鳥の國

宵島俊吉

ある處に大變に鳥の好きなお爺さんがありました。色が黒くて、しやがれ聲で、このお爺さんが「カアカア」と鳥の鳴く真似をすると、ほんとの鳥までが間違へて飛んでくるのでした。そのうち鳥の方でもちやんとこのお爺さんを覚えてしまつたと見えて、いろんな鳥が毎日お爺さんの庭に遊びにくるやうになりました。お爺さんは又それが大變うれしくつて、いつも鳥たちの好きさうな、おいしいお饅頭

やお菓子や庭に投げてやるのでした。それで鳥たちはすつかりこのお爺さんの友達になつて、手にとまり、肩にとまり、頭にとまり、まるでお爺さんの小さい孫たちのやうに仲よくなつてしまひました。

ところがどうしたことせう。ある日のことお爺さんは又今日も鳥たちが澤山遊びにくるであらうと朝早くから起きて待つてゐましたが、たつた一匹の

鳥もやつて来ないのです。お午になつても夕方になつても、とうとう鳥の姿を見ることは出来ませんでした。お爺さんは大變しよけてしまつて、その夜はまんじりともせず、明日の日の明けるのを待ちました。明日になつたらば、きつと又あの可愛い鳥たちは、鳴き合ひながら遊びにくるだらうと、枕元にどつさりお饅頭だのお菓子だのを積みあげてゐました。

さて待ち焦れてゐた次の日は来ましたが、鳥は又今日も一匹もやつてこないのです。お爺さんは一日中あちこちと、空を見廻して、もう来るか／＼と待つてゐましたが、とうとうその日も鳥とあそぶことは出来ませんでした。お爺さんはすつかり悄氣てしまつて、その次の日をたのしみにして寝ましたが、その次の日も、その次の日も、たうとう十日ばかりも経つたのに、鳥はたつた一匹も姿を見せません。お爺さんはもう病氣になりさうになつて、色々心

配に心配をつづけました。

ある日のこと、いつものやうにお爺さんが庭に出て空を見てゐると、一匹のひどく怪我をした鳥が、お爺さんのあたりにパタ／＼と落ちてきました。お爺さんは大變おどろいて、早速その鳥を抱きあげて色々傷口を調べて見ましたが、これは中々大怪我をしてゐるらしいのです。そこでお爺さんは、大いそぎでその鳥を抱いて、近所のお醫者の所に駆けつけました。

お醫者さんは鳥の傷口に色んな薬をつけてやりました。そして顔から翼へかけてすつかり繻帯をまかれた鳥は、又お爺さんに抱かれて、お爺さんの家に歸つて来ました。

お爺さんはそれからと云ふものは、まるで自分の怪我のやうに一生懸命になつて、鳥の傷をいたはつてやりました。小さい床を敷いて鳥が寝てゐる枕元に、お爺さんは夜の目も寝ないで熱心に看護しまし

た。その甲斐があつたと云ふものでせう、一時はもう駄目かと思つた鳥は、今ではどうにかかうにか口の利ける程になりました。

そこでお爺さんは、或る日のこと鳥に尋ねました。

「お前は どうして そんなに怪我をしたのだい」

「戦争に出たんです。そして もう少しで俘虜になりさうになつたんです」

鳥のその答に、お爺さんは又びっくりしてしまひました。そして

「おや、それではこの庭に来てゐた鳥たちは、みんな、その戦争に出かけたんだな」

と、はじめて知ることが出来ました。それにしても一體何を相手に戦争してゐるのだらうと、又鳥に尋ねますと、

「燕の國とです。あいつらはすばしくつて、その上嘴がするどいので、どうしても、思ふやうに勝つことが出来ません」



と鳥は残念さうに答へました。お爺さんはどうかして鳥たちに勝たせてやりたいと思ひました。あの可愛い鳥たちが、どんな目に遭つてゐるのだらうと思ふと、とてもちつとしてはゐられないのです。しかしお爺さんの力では、どうすることも出来ませんでした。

お爺さんの介抱の甲斐あつて、間もなく鳥はすっかり癒つてしまひました。よくなつて見ると、鳥は尙更戦争のことが氣にかかつて、どうにかしてもう一度戦争に出て、あの憎らしい燕たちを打ち負かしてやらなければならぬと思ひました。

そこである日のこと、お爺さんにそのことを話すと、お爺さんは、

「滅相もない。もうそんなのぞみは捨ててくれ。どうかたのむから捨ててくれ。なにもお前が一人位ふえたからと云つて、お前の國が勝つわけでもなからう。もつと養生して、身體を丈夫にして、それ

からにした方がいい」

と、どうしても許してはくれません。何度たのんでもやつぱりお爺さんは同じことを云ふばかりです。その上お爺さんは終には涙を流すやうにしたたのむのです。鳥はどうしたらいいかわからなくなつてしまひました。このまま、この親切なお爺さんを捨てて行つたならば、自分はこの上もない思知らずになつてしまふと云つて自分の仲間たちが一生懸命に戦争してゐるのを思ふと、とてもかうして安閑と遊んでゐるわけにも行かないのです。

たうとうある晩のこと、お爺さんの目の覺めないやうに、鳥はこつそりとお爺さんの家を抜け出してしまひました。翌朝目を醒ましてから、初めてそれと知つたお爺さんは氣の狂つたやうになつて、鳥の行方を探しましたが、勿論遠い所に行つてしまつた鳥の姿は、見つけ出すことは出来ませんでした。そこでお爺さんは、それからと云ふものはただ一生懸

命になつて鳥の國の勝つやうに祈つて居りました。

十日程も経つたある晩、お爺さんがもう戸を閉めて眠に就かうと思つてゐる矢先に、コッ／＼とお爺さんの室の戸をたたくものがあるのです。お爺さんは不思議に思つて戸をあけて見ると、そこに三匹の鳥が「ロヨ／＼とお辭儀をして居りました。

「今晚は、お爺さん」

一匹の鳥が云ひました。よく見ると、その鳥はお爺さんの庭に毎日のやうに來てゐた者でした。

「おお、よく來てくれた。さあ／＼」

と、お爺さんは人間のお客さんでも來たやうに大悦びでした。

「ところが今日は私たちはお爺さんをお迎へにあがつたのです。實は私たちの王様の御命令で、どうしても今夜のうちに、お爺さんを私たちの國に連れて行かねばならないのです」

お爺さんは大變驚びましたが、しかし戦争のこと

のでした。しかしもうその時は、殆ど半死半生で、どこをどう逃げまはつたものやら、とにかくお爺さんのお庭の上まで來たとき、力盡きてパツタリと地上に落ちてしまつたのです。

さて、鳥の國では王子が何處かへ居なくなつてし



まつたので、これはキツと戦死してしまつたのであらうと、王様はじめ誰もすつかり氣を落してしまひました。それからと云ふものは戦争はまるで負けつ

が氣にかかつてたまらないので、そのことを話すと鳥たちは異口同音に、

「お爺さん、悦んで下さい。大勝利なのです。それに就て私たちはお爺さんにどうしてもお禮を云はなければならぬことがあるのです」

鳥たちがさう云つてうれしがる以上に、お爺さんは飛び立つやうに悦びました。

「お爺さん、實は私の國の勝つことが出來ましたのも、お爺さんのためだつたと申してもいいのです」と云つて鳥が話しはじめた話をきくと、かうなので

す。お爺さんの庭に、大怪我をして落ちてきたあの鳥は鳥の國の王子で、ある日の戦争で散々にうち敗れて、しまひには唯一匹残つて戦つてゐたのです。處が敵はだん／＼數を増して、とう／＼王子は俘虜になりさうになつたのです。そこで王子は無我夢中で切り抜け切り開き、やつと敵の圍みから逃れ出た

づけで、この様子ではもう降参してしまはなければならぬやうな哀れなことになりました。

その時です。もう死んだものと思つてあきらめてゐた王子が、突然鳥の國に歸つて來たのでした。それを見た王様は勿論のこと、それを知つた鳥の軍勢は一度に百萬の味方を得たやうに元氣が出て、それからもう燕の軍を追ひまくり追ひ落し、とう／＼鳥の國は大勝利を得たと云ふのです。

「そこで王様は、どうかしてその親切なお爺さんを私たちの國にお招きして、出來るだけのお禮をしなければならぬ、と仰せになるのです。どうか私たちのこの願をきき入れて下さりたく存じます。」

と、鳥は一生懸命になつてお爺さんにたのみました。しかしお爺さんは、もう足も腰も弱くその上この頃では、だんだん目も見えなくなつて來るやうな氣がしますので、とてももうそんな長い旅は出來さうに思はれませんでした。お爺さんは鳥たちの親切

な勧めに、涙を流して悦びましたが、この年老つた身では、この住み馴れた家にちつと引つ込んでゐる他には、もう何ののぞみもありませんでした。

「わしは旅には出られないよ、こんなに歳をとつてゐては……」

お爺さんはさう云つて、どうしても鳥の國に行くのを承知しませんでした。

鳥の國と云ふのは何處も彼處も眞黒で、そこは黒水晶の山、黒檀の家、それから黒竹の林、黒松の林など、何もかも黒い常夜の國なのです。

鳥の國の使者たちは色々とお爺さんの心を動かさうと、その國の面白い事を話してきかせました。そこでお爺さんも、たうとうその國を見に行く決心をいたしました。そして

「けれどもこのまま直ぐに行くのはこまるから、どうか明日の晩まで待つてくれ。そのうちに旅の用意をととのへて置くから……」

と、答へましたので、鳥たちは雀躍りして悦んで、明日の晩を約して歸つてゆきました。

鳥の國では、今までにない大切なお客様を迎へると云ふので王様は國中にお布令を出して、美しく飾りたててお爺さんの來るのを待ちました。そして夕方になるのを待つて、三羽 鳥を先頭に、澤山の鳥が列を作つて、お爺さんを迎へに鳥の國を出發しました。

その夜、お爺さんの魂は鳥の脊に乗つて、遠くの國に行つてしまひました。そしてお爺さんはもうこの世のものではなかつたのです。ただ冷たい屍だけがこの世にのこつて居りました。世の中と云ふものは、ほんとに思ひがけないさまさまな出来ごとが起るものだ、と、お爺さんの近所の人々は噂し合ひました。

「まあ 丈夫さうに見えましたがね」と一人が云へば、

「あの日も庭に出て空を見てゐなすつたのに」と、また一人が云ひました。そしてお爺さんの死んだと云ふ知らせは、忽ち町中に擴がりました。

いつまでたつても

夜のあけぬ

とほいはるかな

夜の國

わたしの好きな

お爺さん

とほいとここに

ゆきました

いつまで経つても

夜のあけぬ

とほいお國に

ゆきました



子供たちは子供たちで、あの優ししてお爺さんの亡くなつたのを聞いてこん 悲しい歌を歌つて歩きました。それにしても、黒水晶の山黒檀の家、それから黒竹の林黒松の林、何處も彼處もまつ黒な常夜の國にお客になつて行つたお爺

さんはあの國のさまさまな響應をうけて、たうとうこの世に歸ることを忘れてしまつたのでありました。

優しかつた私のお爺さんも、このお爺さんのやうに、とほい〜夜の國に行つて、歸ることを忘れたのかも知れません。私は私のお爺さんも何處かに生きてゐるやうな氣がします、父も母も近所の人もみんなは亡くなつたと云ふけれど……。

(をばり)



前田  
慶次 第一の話

三島 霜川

赤い、ちよつかい、革袴。  
鳥の、とさかの、立烏帽子。  
前田慶次が馬にて候ふ。

一人の下郎が、そんな小唄をうたつて、鴨川の流  
れで、馬に水を飲ませて居りました。その下郎は、  
眞ッ赤な着ものを着て、赤い革袴を穿いて、烏帽子  
をかぶつてゐました。そして、馬はと云ひますと、  
いかにも遅ましい、見るから名馬らしい逸物でござ

いました。  
「これは、すてきだ！ 實に好い馬だ。どなたのお  
馬でございますか。」と、そこを通りかゝった武士は、  
大概足をとめて、さう云つて、たづねました。  
すると、下郎は、その度にニコ／＼しながら、さ  
つと、扇をひらいて、  
赤い、ちよつかい、革袴。  
鳥の、とさかの、立烏帽子。  
前田慶次が馬にて候ふ。

と、うたつて、おどけた様子で、ちよつと、舞ふや  
うな真似をして見せました。

「は、はア、なるほど！ 前田慶次郎殿のお馬でこ  
ざいますか。道理で、好い馬だと思ひました。」  
皆々然う云つて感心しました。前田慶次が馬の  
「松風」は、それほど有名な名馬でございました。  
何しろ戦國時代——と、申しましたが、あの、豊  
臣秀吉が、まだ京都の聚樂邸にゐて、やつと天下を  
をさめかけた頃のことでございます。大名でも、武  
士でも、心ある者は皆な、好い馬を欲しがつて居り  
ました。そして、自分の名前や武器と同様に、大層  
馬を大切に致しました。それで、「松風」を見た大名  
や武士たちは皆な、慶次の馬を羨みました。  
「それにしても、どうして、あゝやつて、毎日々々、  
鴨川まで水を飲ませに出すのだらう。をかしのこと  
をすするもんだ。」  
と、皆な其れを不思議に思つて居りました。

ある武士が、その譯を下郎にたづねますと、  
「そりや、馬にだつて、好い水を飲ませなければなら  
ないぢやございせんか。鴨川の水は天下の名水、  
こちらにゐるうちは、毎日飲ませてやれ……と、斯  
う、主人の仰せつけでございます。」  
と、云つて、下郎は「赤い、ちよつかい」の小唄ま  
で、御自分で作つて、お授けになつたことを話しま  
した。

この事が、いつか秀吉の耳に入りました。  
「面白い奴だ。一度逢つて見よう。」  
と、云つて、早速、聚樂邸へお招きになりました。  
慶次は、前田慶次郎利大と云つて、加賀大納言利  
家の血筋の甥に當ります。若い時分から、利家に従  
つて、毎度戦功もあり、武術にも長けてゐたので、  
小さな大名位の格式があつたのでございます。  
ところが、秀吉の招を受けますと、何んと思つた  
ものですか、「赤い、ちよつかい、革袴」其のまゝの

姿——つまり、下郎同様の姿で、ノコ／＼出かけて行きました。これだけでも、もう、その頃の滑稽家、曾呂利新左衛門を『あッ』と、云はせるに充分でしたのに、その上、慶次は、秀吉の前に出ると、いきなり横ツちよに、ちよこなんと坐つて、片手を突いて、首を傾げ、片手を『失敬』と、云つたやうに、かざして、斜に秀吉を見上げるやうにしました。その、ひやうきんな様子も、てもなく『さア、どうぞ、御覽下さいませ』と、云つた恰好でございます。さすがに秀吉も、これには、度膽をぬかれて、『なるほど、こいつは、變つた奴だ』と、その挨拶に、まごつきました。

慶次は、そのまゝ、ついと立ちあがって、さつさと退つて行きました。

その、きび／＼とした、放膽さ——人を人とも思はず、づばねけて、ひやうきんな仕方が、ぐんと、秀吉の氣にいりました。そして、『茶を一眼、振舞ひ



たい。』  
と、呼びめさせました。

『茶』は、その頃の大名家たち、間に、大層はやつて居りました。慶次も、もちろん、『茶』の心得がございました。そして、大好でございました。そこで、あらかじめ用意して来た衣装に着換へまして、今度は格式通りに、威儀をととのへて、しづ／＼と秀吉の前へ出て行きました。さうして、茶の作法通りにして、茶の御馳走になりました。

『貴公は、なか／＼面白いことをする。あの、赤い、ちよつかいの思付は、なか／＼曾呂利も及ばんぞ。』と、秀吉は、打ちつけて、さう云ひました。

『いや／＼、殿下。曾呂利の奴などは、殿下の思召にかなふやうにと、一生懸命に智慧を拵つて、いろいろな真似をするのでございます。私は、何も殿下のお氣にいるやうに思つて、致した譯ではございません。私は、只、私の思ふまゝをやつたまで

でございます。殿下が、折角、私を見て遣らうとの思召だと承はりましたから、あゝして、御覽に入れたまででございます。』

慶次はまた一本、秀吉をまゐらせました。

秀吉は、フ、ンと、軽く笑つて、『そこで、今度は、茶席の招待だといふので、衣服を改めた譯か。』

『はい。客に參つたのでございますからな。』

『貴公は、毎日、馬に、鴨川の水を飲ませるさうぢやな。』

『はい。私の馬は、私に一番よく盡してくれましてから、水一滴でも、出来るだけ好いの、與へたいと存じまして。』

『叔父御の大納言は、着實な仁ぢやが、貴公は、ちよとも似て居らん。』

『似ては堪りません。叔父は、大々名になりたいばかりに、あくせくしてゐる人でございます。てんで、肌合が違ひます。私は、只、自分の爲たいと思ふ

ことが爲たいのでございます。戦は好でございますから、戰場では、よく働きましたが、それは何も功をして、大名になりたいなぞといふ考ではございません。一體、私は、人に使はれることが大嫌でございます。

と、づけ／＼云ツて、にやり、にやりと笑ツてゐました。

『だが、わしなら可いだらう。』  
と、秀吉は、ちよつと子どもじみた自負心から、さう云ツて見ました。そして、疑もなく、『殿下でございましてら』と、飛びついて來るだらうと思つてゐました。

ところが、案外にも、  
『いえ……殿下は、猶のこと、可けません。殿下の方が、叔父よりも、たしかに窮屈でございますから。實は、斯うして居りますのも、ちと閉口なんです。』

『さうか。』  
と、云つたきり、秀吉は、黙ツて了ひました。

それから間もないことでした。ある日、慶次は、叔父の利家に向ツて、  
『まことに結構な冬日和でございます。お茶を立てるには、もつて來いの日です。如何でせう、宅で、一服差上げたいと存じますが……』  
と、云ひました。

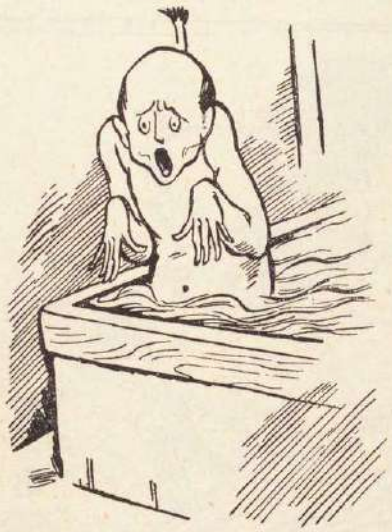
利家は、大層悦んで、  
『それは結構だ。では、出かけて、久しぶりで、お前の「てまへ」を賞翫しようかな。』  
と、慶次は、何に喰はぬ顔で、利家を自分の家へつれて行きました。

慶次は、あらかじめ、風呂桶に冷水を一杯瀝へて

置きました。さうして、二三服、茶の御馳走の濟んだところで、  
『どうも冷えるぢやございませんか。幸、風呂を沸かして置きました。一風呂、お召しになツて、温まられたが宜しうございます。』

『それは、かたじけないな。』  
『さ、御案内致しませう。』  
さう云ツて、慶次は、自分に利家を風呂場に案内致しました。

さうして、風呂桶のなかに手を入れて見て、  
『丁度加減も、宜しうございます。』  
『さうか。』  
と、云ツて、利家は、何気なく、着物を脱いで了ひ

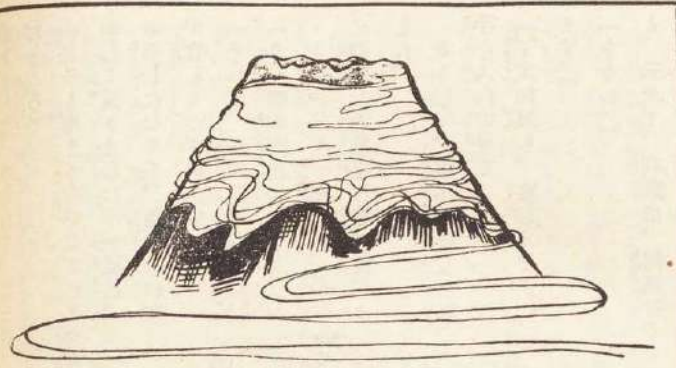


ました。  
『しめたぞ。』  
と、慶次は、ホク／＼しながら、ビシヤリと風呂桶の戸をしめました。

利家は、ざぶりと、冷水のなかへ……ブル／＼と慄上ツて、  
『おのれ、慶次め、また悪戯をしておつた。』  
と、急いで、風呂場を飛出しましたが、その時はもう、慶次は裏門の方に出て、そこに鞍を置かせてあつた一松

風」に、ヒラリと飛乗ると、一鞭くられて一目散……、慶次は、それきり、浪人になツて了ひました。

(をはり)



富士の初雪

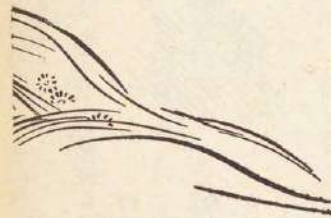
若山牧水

糸まきの

糸がほぐれて

しらじらと

富士のお山に



かかった。

白糸の

富士の初雪

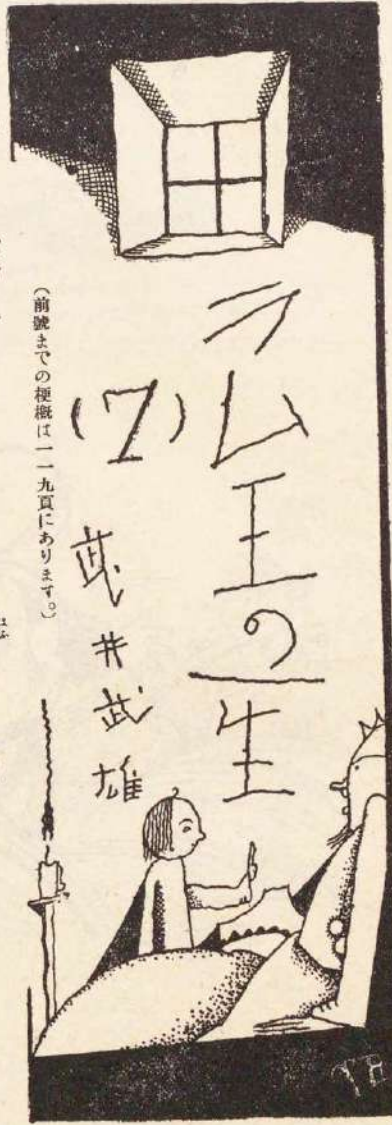
てつべんに

もつれもつれ

かかった







(前巻までの梗概は一一九頁にあります。)

「くらの面ホタルの宿料を知つてゐるかい。」

と、お星様は妙な心配をはじめました。

「知らない。だが僕はどこへ行つても、何でも只だ。」

と、ラム王が毛布の襟から頸を出して答へました。

お星様は寢床の中で、チロチロンと銀貨の音をさせ

ふ法もあるまい。」  
と獨語らしく呟きました。

「だがしかし、君は星のくせにどうしてお錢なんぞ持つてるんだい。」

とラム王はキョトンとした顔で訊ねました。

「僕は君の様に、只食ひや只乗りをしては歩るかない。僕はちやんと自分の小づかひは自分で稼ぐんだ。」

「只食ひなんかといふのはよしてくれよ。僕は自分の名前を云ふと、どこでもお錢はいりませんといつて突返すのだから仕方がない。しかし君は感心だね。まさか内職に紙屑屋でもやつてるといふ譯ちやアあるまいね。」

「いくらなんでも屑屋はやらない。僕は手品を少しばかりやる。それから花のかげで、蟋蟀にタランテラを踊らせて、旅人からお錢を貰ふんだ。」

「冗談云つちやいけない、蟋蟀がダンスなんぞ覚えるもんかい。」

「けれどね、僕と蟋蟀とは、それはうんとこさ古い關係にあるのね。まだ天に居た時分、あいつ等はみんな僕の姿の美しさに見とれては、詩を作つたり、童謡を作つたりして唄つたもんだからね。僕のいふことなら何でもハイハイ云ふよ。もしも嘘だと思ふなら……」

と、云ひながら、手提げの繻子の袋から、それは

小さな可愛い睡靴を、二十足程出して見せました。大きさは烏瓜の箱位で、それが、赤や青や紫や、金や銀や、そして玉蟲色などで綺麗にキラ／＼光つておました。ラム王は眼の中へもはひつてしまひさうな、この小さな睡靴を見てゐるうちに、ふと釣針のことを思ひ出しました。

「僕は、旅行をするのが目的ではないんだ。……西へ西へ行けばだね、い／＼かい、黒燧石の釣針がある。これを手に入ると本當の生れ甲斐といふものがはじめてわかる……と、まあかういふ夢を昔見たのね。珊瑚屋の自分のおやちの家をとび出して、西へ西へと随分久しい旅をしてきたのさ。その間に四へんまでも王様になつたんだけど、まだ釣針の見つからない内は、こんなことが本當の生れ甲斐といふものではあるまい、とまあ、かう思つて、いつも位をすてゝは自由な旅人になつて、根氣よくそれを探してゐるんだ。」

ラム王は眞面目になつてそんなことを云ひ出し  
ました。

『うん釣針  
か、うん生れ  
甲斐か、なる  
にどね。懸賞  
謎々の様だ  
ね。しかし、  
人間の生れ甲  
斐などいふ  
ものは、ヒョ  
ツとすると一  
本の釣針位に  
ひつかへて  
ゐないものと  
も限らない。星にはそんなことは一切解らない。只  
君の一生のことだけは解つてゐる。どうしてどうし



て、どうなる、といった様なことはね。それからす  
つと向ふの二十世紀や三十世紀の頃、君は何に生れ  
變つて何をやつ  
てるなんていふ  
ことも大體僕に  
は解つてゐる。  
だがそれを云つ  
てしまふと、君  
のその生き甲斐  
といふ奴が無く  
なつてしまふか  
ら止めさ。  
さし當りその  
釣針だが、君は  
かつてそのつい

近くまで行つて、そこに暫く暮してゐたくせに、そ  
れとは知らずに又だん／＼遠ざかつて來たのだね。

- 一、金一錢 螢草
- 一、金四錢 角砂糖
- 一、金十一錢五厘御宿料

合計 金三十三錢五厘也

と、かいてありました。ラム王は只でした。二人  
はくらげの面ホタルを出しました。これからラム王の  
三界めぐりがはじまるのです。

これからはまづ途中で玉様になどなつて遊んでゐな  
いで、三界をめぐらなくてはならない。三界といつ  
ても過去、現在、未來といふ様なものではない。空  
中と地上と水中だ。地中はすべてのものの眠るとこ  
ろだから、はひつてはならない。まづ鳥と獸と魚と  
になれば、蟲にはならなくつてもよろしい。それで  
三界へ行けるからだ。ところが地上はもう知つてる、  
など云つてはいけない。君は玉様なんぞといふ眼  
からばかり地上を見てきたのだ。今僕はラム王など  
といふ名前も捨て、只一匹の獸となつて、この地球  
の上を頭を低く垂れて這つてみるがい。さうかう  
してゐるうちには、釣針もまあ見つかるといふもの

だ。

『ん、ありがたう、蠟燭を消すよ。』

二人はいつの間にか眠つてしまひました。翌朝ホ  
タルの書付を見ると、

- 一、金十七錢 とらゝ

ラム王の三界めぐりをくはしく書いてゐると、そ  
れだけで字引より厚い本が出来てしまひます。で、  
それは又いつかの時にまはしておいて、こゝでは極  
簡單に二つ三つの出来事だけを記しておきませう。  
づ空の世界では、何といつてもバクイタイに出  
逢つたことを記さなくてはなりません。バクイタイ  
は椎の樹にゐました。もう年をとつて眼鏡をかけて  
ゐました。

「ヤア、そこにいらつしやるのは姿こそ木鬼だが、

ラム王様だと見たのは間違ひではありませんまい。」

と、バタイクイは聲をかけました。

「私は、あなたも御存じの水萍の婆さんの家來のバタイクイです。」

いや、とても不思議なことを云ひ出したから驚きました。

「お婆さんは、この世へ一人の善人を生れ出させる爲には、一人の悪人をこの世からさらつて鬼にしなくてはならないので、私は悪人を見付けては海へ搬ぶ仕事をしてゐました、しかし、あなたのお姿を見た時、決して悪人だと思つたわけではありません。あなたがあんな毒蛇やライオンのうろつてゐる岬においでになるので、あぶないと思つて安全なところまで、おつれしようとしたのです。ところが、不思議にも中途で何だか堅いものに變り、見ると仲間の姿がありとそれに寫つてゐるので、畜生間違へたか、いまいまいまいと思つて、つかみかいらうと

遊んでおいでになりました。人間の眼にはとてもこの神様のお姿は、偉ら過ぎて見ることが出来ないもので、いろ／＼の命だとか、お釋迦さまだとか、エス

様だとかのお姿を透して拜んでゐるのに、獸たちは、本當にのんきな神様になつて遊んでゐました。なるほど獸の中

に、一匹だつて心配さうな顔をしたのが居ないのは、神様と始終一緒にゐるからだな、と思ひました。そこでラム王に、野原によだれを垂しながら草を食



べてゐた牛の肩をたゝいて、

「おい、君等の様な世の中にも、亦生き甲斐といふものがあると思ふね。」

と、云ひますと、牛は頻りに眠むさうな細い眼をして、

「なんだと、あゝそれはなんだ、ことにまると、海に居るかもしれないから、あそこへ行てごらん。」といふものですから、ラム王は海の方へ走つて行つて魚なつてザブンと水の中

したとたん、すべり落してしまつたのです。大變なお怪我をおさせ申した、といふことが本當に申譯ございませぬ。お婆さんにひどく叱られました。それから私は隠居をして、今では俸におつとめをさせ居ります。」

と、泣き泣きお詫びをしました。ラム王はこれを見て、ひとの親切を矢鱈に怖がつたからだ。外見を見て姿のおそろしいものは、何でもあぶないと、早合點をしたのが、そもそも悪るかつた。つまり自分の死ぬ程の大怪我也、身から出た錆で、誰を恨むこともない、と思ひました。空に三年、いろ／＼不思議なことに出逢つたり、面白い教訓を得たりしましたが、ある秋の日に丘へ下つて一頭の羊になりました。

獸の世界には、強いものと弱いものとはありましたが、王様もなければ、家來も兵隊もありませんでした。その代り、神様がいつも一緒にこの獸たちと

き貝と聞いたんだな。あきれかへつて物も言へない。おれも少々あわて過ぎたわい。』

魚の世界は年中黙りこくつた、静かなものでした。でも口と口をつき合せてゐるか、又は尾や鰭を動かすと、話しはそれで通じました。

ある時、魚のラム王は浅瀬のところで面白い小さな出来事を見てゐました。この出来事は露西亞のソ

ログウブといふおちさんが詩に作つてゐますから、その詩をかいておきませう。

大きな魚が小さな魚を追ひつめて呑んでしまはうとした。

——小さな魚は泣聲を出した。

そりや無法だ。私だつて生きてゐたい事はおん

かたラム王は急にをかしくなつて、ブクブクブクツと吹出してしまひました。すると、小さなあぶくが、ブクブクブクと、綺麗な行列を作つて上の方へ浮んでゆきました。あぶくが水の上に消えたと思ふころ、はるかに上の方で、

『おつと一匹居やがるぞ!!』

と、いふ聲がしました。それと同時に上の方から、何かしら黒光りのしたものが、ヒラヒラヒラツとさがつてきました。

チラツとこれを見たラム王は、本當にこのだしぬけの出来事にびつくりして氣を失ふ程でありました。何がだしのけかかつて、今迄夢にさへ忘れなかつ

なじだ。魚としてはお前だつておれだつて平等だ。

——大きな魚が答へるにはよろしい、平等だといふならそれでもいい、おれに喰はれるのがいやかい。ちや構はない、滋養におれを呑むがいい、いゝよ、お呑みよ、嘘ちやない、どうもしやしなないよ。

小さな魚は、あゝしかうし、いろくやつてみた。

大きな魚はどうしても呑めない。溜息をついた、さうして云つた。

——まゐつた——呑んでくれ。この有様を見て



と同時に、ラム王の體は、シユーツと水を切つて眼にも止らない程の早さで、水の面へ引上げられてゆきました。

ハテナ。……

(つゞく)



## 仙人にたつた鳴江

(薦推)

早田敬次郎

九八  
昔、支那の或る山家に、鳴江といふ樵夫が住んでおりました。年老つたお父さんと一しよにむつまじく暮してゐましたが、或る日のこと、いつも持ちなれた斧を持って、山へ行きました。その日は、暖くて大そう氣持のよい日でしたので、鳴江は知らず識らず、山奥深く這入つて行きました。すると、何處からともなく、何ともいへない、いい匂ひがして來ました。鳴江は不思議に思つて、  
「何んと云ふい、匂ひだらう。」と、我知らず獨り言を云ひながら、ふと見上げると、傍の大きな松の木の枝に、頭の赤い、それはそれは美しい丹頂が、二羽とまつてゐます。鳴江は、我を忘れて見とれてゐました。

すると鶴は、ひよいと地面に飛び降りましたが、その拍子に立派な人間になつて、樹の下の美しい芝生でばちり／＼と、碁を圍みはじめました。鳴江は狐にでも化かされたやうな氣がして、そこにションボリ立つて、考へてゐました。が、やがて、ハタと膝をたいて、

「これはきつと仙人に違ひない。」

かう思つて、尙も一心に見入つてゐると、仙人達はやがて又鶴になつて、何處ともなく飛んで行つてしまひました。

鳴江はあつげにとられて、鶴の飛んで行つた後を見送つてゐましたが、ふと氣がついて見ると、自分の手に持つてゐた新しい斧の柄が朽ちて、ボキリと折れました。

「はてな、つい近頃拵へた柄なのに、どうして朽ちたのだらう。」と、不思議に思ひました。しかし、さして氣にもとめず、そのまゝ我家に歸りました。

ところが、家へ歸つて見ると、自分の家の戸は堅く閉つてゐて、誰もゐる様子がありません。

「お父さん、何處かへ遊びにでも行つたのかな。」

かう思ひながら、戸をこじ開けて中を見ると、驚きました。家の中はガランとして、何一つありません。がた／＼と、ねずみが我物顔に、床のヒを走り廻つてゐます。不思議に思つて、隣の小母さんの家へ尋ねに行くと、さも吃驚したやうに、

「まあ／＼、お前は何處へ行つて來たんや。」

「俺は何處へも行かなんだが、いつもの山へ。」

「いつもの山、冗談いはんすなよ。家を出たなりさつぱり歸つて來んで、てつきり虎か何んどこに食ひ殺されたのやと思つて、お前とこのお父さんは、家財をまとめて、何處ともなく行方知れなくなつたんや。」

「えッ。行方知れなく……」と鳴江は、夢に夢見る心地して、たゞ呆然と聞いてゐましたが、

「實は、いつもの山へ行つて、仙人に出逢つて……」と、すっかり話してしまひました。

「しかし小母さんは笑つて、  
「馬鹿な、仙人なんかあるもんか。お前はいつも仙人と云つてゐるで、とうとう狐に化かされたのや、阿呆やなあ。」と云つて、本當にしません。仕方がないので、

「ちやあ、今夜一晩泊めておくれよ。」

「さあ、風呂が沸いてゐるから、這入つておいで。その間にご飯の用意をしておくから。」と小母さんは、親切に云つてくれるので、鳴江は喜んで風呂場へ行きました。

「まあ、可哀さうに、狐に化かされ、三月も四月も山の中にあつて、何を食べてゐたのだらう。」と、獨り言を小母さんは云ひながら、ご飯の用意をしてゐました。

鳴江は、暖い湯に浸り、目をつぶつてゐると、今

までの出来事が、はつきりと目に見えるやうに浮んで來ました。

「どうも不思議だ。小母さんは俺が大分長く山の中にあつたやうに云ふが、俺は確か、仙人が碁を圍んでゐるのを見てゐた間だけだ。精一杯二時間か、三時間位だ。行き來合せて六時間位だと思つたに、親父もあまり氣が早い。もう一日二日待つて居ればいいのに。あ、い、氣持になつた。どれ出ようかな。」

鳴江はその晩、小母さんの心づくしの夕飯を食べて床に就きました。

それから鳴江は、寝ながら考へました。

「今日碁を圍んでゐた人は、きつと仙人に違ひない。仙人と云ふものは、便利なものやなあ。ぶらぶら方を遊び廻つて、鶴になつたり、雲にのつて飛んで行つたり、心配 ども少しもなく、いろ／＼の仙術を使つて、面白く楽しく暮してゐる。俺も仙人にな

りたい。俺だつて仙人になれんことはあるまい。さうだ、仙人に頼んで、仙術を授けて貰つて、父の居所を探さう。」と鳴江は、何やら口の中でつぶやきながら眠つてしまひました。

鳴江は翌日は朝早く、昨日の山へ行きました。仙人を探しあて、熱心に頼めば、自分にだつて仙術を授けてくれないことはあるまいと思つたからです。確かこのあたりだつたらうと、昨日の鶴のとまつてゐた所を探し廻つてゐましたが、そのうちにとうとう路に迷つて、いくら行つても、昨日の美しい芝生の所へは出ません。奥へくと山深く這入つて行くやうです。おまげに、だん／＼日が暮れさうになつて來ま



す。鳴江は氣が蒸でありませんが、あせればあせる程、來たこともない深山へ深く這入つて行くやうなので、これではいけないと、とある木の切株に腰をおろして、思はず溜息をもらしました。

その時ふと、何心なく向ふを見ると、夕暮の空を、名も知れない鳥が、悲しさうに鳴きながら飛んで行きます。美しい夕日の輝いてゐる方に、ほの／＼と煙が立ち上つてゐます。鳴江は喜んで、

「今夜はあそこで泊めて貰はう。」と思つて、その方へ進んで行きますと、小さな葺茸の小屋がありました。こんなところに仙人は住んでゐるのだらうと思ひながら、入口に立つて、

「ご免下さい。」と、聲を懸けました。と、一人のお爺さんが出て来ました。

「あなたは誰です。何しに此處へ来たんですか。」とお爺さんは、髭をなでながら問ひました。

鳴江は恐る／＼、

「はい、私はこの山の麓に住んである樵夫の鳴江といふ者ですが、仙人を探し廻つてゐる途中、路迷つて、こんな所へ来たんです。どうぞ一夜のお宿をねがへませんでせうか。」と頼みました。

お爺さんは、變な目つきで、じろ／＼鳴江を見つめてゐましたが、やがて、

「まあお上り。わしは仙人だが、何か用かネ。」

「えッ！ あなたが？」

「さうです。」とお爺さんは目をきよろきよろ光らせて、力のある聲で云ひました。

鳴江は胸をドキ／＼させながら、

「あなたは仙人ですか。私はあなたに折り入つてお

願ひしたいことがあるんで。」

「お願ひつて何だね。」

「如何でせう。仙人になる仙術をお授け下さいませんでせうか。」

鳴江は思ひ切つて頼みました。お爺さん 半ば笑みをつくつて、

「仙人になるには、仙人の修業をせねばならぬ。その修業と云ふものは、中々苦しい。お前はその苦しい修業をするかね。」

「はい、どんな苦しい修業でも致しますから、どうぞ授けて下さいませ。」と、鳴江は熱心に頼みました。

お爺さんは、

「よし／＼、わしの家にをれ。仙術を授けてやらう。

これから三年間修業をするのだぞ。」と、快く承知してくれました。それからと云ふもの、鳴江は谷へ水を汲みに行つたり、ご飯を炊いたりして、下女下男代りに働きました。けれどもこのお爺さんは、仙

人どころか、實は人を殺したり、悪いことをしたあげく、何處にもゐられなくなつて、とう／＼この山に隠れることになつたのです。ですから、仙術なんかは知つてゐる筈はありません。よし知つてゐても、鳴江に授けてやらうと云ふ親切は、全くないのです。

鳴江は、仙術を授けて貰ふのを楽しみに、朝は薪をとりに行き、夜は、師のお爺さんの肩をもんだり、蚊を追つたり、或は山を下つて、町へ買ひ物に行つたり、朝は早く夜はおそくまで、骨身をします働きました。しかし、師のお爺さんは、仙術のことなど、一ことも云ひません。鳴江は、今日は授けてくれるか、明日は授けてくれるかと、待つてゐるうちに、早くも約束の三年は過ぎてしまひました。

鳴江は、たゞ仙術を授けて貰ふ日のことを想像して、早く授けてくれ、ばい／＼がと思ひながら、一生懸命働いてゐました。お爺さんは考へました。

「とう／＼期間は過ぎたな。彼奴、仙術を授けて貰へると思つて、一生懸命働いてをる。可哀さうに。けれども仕方がない。授ける仙術を俺は知らないのだ。何處かへ連れて行つて、一思ひに殺してしまはう。」とお爺さんは、心の中で恐しいことを考へながら、鳴江を呼びました。

「今日はお前に仙術を授けてやらう。わしの後へついて来なさい。」と云つてお爺さんは先に立ちました。

鳴江は喜びのあまり、雀躍しないばかりに、嬉しさと有り難さに、後からお爺さんの姿を拜みながらついて行きました。

やがて、ある崖の上まで来ました。深さ何十丈あるかわからない、底知れない谷底は、霧がかゝつてゐて、魔のやうな切つ立た岩が、傲かに見えてゐて、見てもぞつとするやうな所です。そこに一本の大きな松が、谷間に突き出て生えてゐます。お爺さんは、その松の木を指さしながら、

「さあ仙術を授けてやらう。この松の木に登りなさい。」と云ひました。

鳴江はたゞ覗いてさへ怖いのに、どうして、どうして、恐ろしくて登るところではりません。けれども仙術を授けて貰ひたいばかりに、怖々登りました。お爺さんは、

「登つたか。わしが號令をかけるから、その通りす



るんだぞ。先づ最初に兩足をはなせ。」  
鳴江はわな／＼顛へながら、仙人になりたい一心で手でしつかりと枝を掴んで、足をはなしました。  
「今度は兩手をはなせッ！」  
爺さんはさながら死ねと云はぬばかりに號令をかけた。鳴江は一生懸命です。顔はまるで土色になつて、びつしより冷汗をかいてゐます。けれども、木の枝に噛みついて、遂に兩手兩足をはなしました。  
「今度は最後の修業であるぞ。睡へてゐる口をはなせッ。」  
鳴江はもう絶對絶命です。睡へてゐる口をはなせば、何十丈あるか底知れない谷です。はなさなければ仙人になれないと思つて、幾度も／＼ためらひましたが、身體の重みのために、睡へてゐた口がしびれて、あつと云ふ間もなく鳴江の身體は、谷底めがけて矢のやうに落ちました。  
今少しで、谷底に切つぎつた岩の上に落ちて、鳴



江の體が粉微塵になると思ひのほか、不思議にも一羽の鶴となつて、しばらくの間、雪のやうな翼をひろげて飛び廻つてゐましたが、やがて又、元の松の木

の枝にとまつて、鳴江の姿にかへりました。そして、包み切れない嬉しさに、ニッコリと微笑みながら、「師匠様、まことに有難うございます。お蔭で私も仙人になりました。これでお別れ致します。私は父の行方を探さなければなりませんから。」  
かう云つて、又鶴になつて、何處ともなく飛び去つてしまひました。鳴江はとう／＼仙人になつたのです。お爺さんは、たゞ呆然と鶴の姿を見送つてゐましたが、やがて、我にかへると、  
「どうも不思議だ。彼奴、此處から落ちて殺してやらうと思つたに、とう／＼仙人になつた。さては、あゝすれば、仙人になれるのかな。」  
かう思つた爺さんは、自分も松の木に攀ぢ登つて、自分で號令をかけて、兩手兩足をはなしました。ところが、爺さんは、眞倒さまに谷底へ落ちて、岩に身體を打つて、粉微塵になつて、とう／＼死んでしまひました。  
(をばり)



## 鳥と獸の戦

中島孤島



(11)

ある夏の日のことでした。熊と狼が林の中を散歩してゐると、なにか小鳥がいゝ聲で歌をうたつてゐるのが聞えたので、熊は立ちどまつて、狼にいひました。

「狼さん、あんなに面白さうにうたつてゐるが、ありやア、君、なんといふ鳥かね？」  
「あれは鳥の王だ。鳥が答へた。あの鳥の前へ

行くと、我々だつて敬禮をしないわけにはゆかないのだせ。」

けれどもその鳥の王といふのは、小さなみそさといでした。

それを聞いた熊は、狼に向つてかういひました。

「本當にさうなら、僕はその王様の宮殿へ行つて見

たいから、つれてつてくれたまへ。」  
「そんなわけには行かないよ。」と狼が答へた。「女王がかへるまで待つてゐたまへ。」

すばらしい宮殿なんだ！」

いひながら、じろ／＼と巢の中をながめてゐたが、そこに頭をならべてゐる雛たちに向つて、かういひました。

「お前たちは王様の子どもどころか、貧乏人の餓鬼どもだ！」

するとそれを聞いたみそさといの子どもたちは、火のやうにいきり立つて、めい／＼に金切聲を立てて、一しよ／＼に、かうしやべり立てました。

「ちがふ／＼僕たちは餓鬼ぢやないよ。僕たちのおとうさんやおかあさんは、立派な身分の人なんだ。熊さん、君は今いつたことをおほえておいでよ。」

かういつて、口々に騒ぎ立てられたので、熊と狼はすつかりめんくらつてしまつて、大いそぎで自分の穴へ逃げかへりました。

けれどもみそさといの子どもたちは、貧乏人の餓鬼だといはれたのが、くやし／＼つてたまらなかつた

間もなくみそさといの女王が、嘴へなにか餌をくはへて、かへつて来ると、王もやつて来て、雛に餌をやりはじめたので、熊はすぐに行つて見ようとする

と、狼は耳をひつばつてかういひました。

「いけない／＼、まア王と女王がふたりとも行つてしまふまで待ちたまへ。」

そこでふたりはみそさといの巢のあるところをよ／＼見定めておいて、そこを立去りました。

けれども熊は、どうしても王様の宮殿が見たくつて見たくつてたまらなかつたので、少したつと、狼をせびつて、また元のところへ引きかへして来ました。

その時には、みそさといの王と女王は、もうそこにななかつたので、熊は近よつて巢の中をのぞくと、五六びきの雛がその中にねてをりました。

「これが王様の宮殿なのか？」と熊は大きな聲を出して、あざわらふやうにいひました。「なんといふみ

ので、両親がかへつて来るまで、しつかりなしに  
やべりつとけてをりました。

そのうちに親鳥が、口に餌をくはへてかへつて来  
たのを見ると、子どもたちは待ちかまへたやうに、  
かういひました。

「わたしたちは立派な身分の子ともだか、さうでな  
いか、はつきりときめて下さい。それがきまるまで  
は、蠅の足一本だつて、のどへはいれません。熊が  
さつきこへ来て、わたしたちに恥をかゝせたので  
すから。」

「そんなに騒がなくもいゝ。」とみそさといの王がい  
つた。「すぐにきめてやるから。」

かういつておいて、みそさといの王は女王と一し  
よに熊のうちへ飛んで行つて、入口からかう聲をか  
けました。

「よぼくの言葉いひめ！ なんだつてうちの子ど  
もたちにけちをつけるんだ？ たゞではすませない



ぞ！ さア戦争をして勝負をきめるからその覺悟で  
ゐろ！」

かう喧嘩をふきかけておいて、みそさといの王は  
女王と一しよにまた自分の巢へかへつて来ました。

(二)

みそさといの王から戦争を申込まれたので、熊も  
もうそのまゝにしておくわけにはゆかなくなつて、  
四足の獸を集めました。牡牛、驢馬、牝牛、山羊、  
鹿をはじめとして、この地上に住んでゐる獸といふ  
獸は一匹残らず集まつて来ました。

一方ではみそさといの王も、羽のあるものを残ら  
ず召集しました。大きな鳥も、小さな鳥も一羽残ら  
ず集まつたばかりでなく、蚊や、熊蜂や、蜜蜂や、  
蠅なぞの羽蟲も、みんな加勢にやつて来ました。

そこでいよいよ戦争がはじまるといふ前に、みそ  
さといの王は、間諜を出して、敵の總大將にはだれ

が選ばれたか、見せにやりました。鳥の軍勢のうち  
で、一番小さくつて、はしつこい蚊が、この大事な  
役目を引受けて、敵の陣取つてゐる林の方へアーン  
と飛んで行きました。その時獸の軍勢は一本の大木  
の下へ集つて、軍の評議を開いてゐましたが、蚊は  
その大木の上へとまつて、羽の下へかくれて、軍議  
の様子をうかがつてをりました。

すると木の下へ立つてゐた熊は、狐を呼んでかう  
いひました。

「君は獸のうちで一番智恵者だから、總大將になつ  
て、軍の指揮をしてみらひたい。」

「よろしい！」と狐はすぐに引受けて、そして大勢  
の顔を見まはしながらかういつた。「けれども合圖に  
はなにを使つたらいいだらう？」

かうきかれたけれども、狐はひとり返事をするも  
のなかつたので、狐にまたかういひました。

「我輩の尻尾は長くつて、太くつて、それにきれい

な色をしてゐるから、遠くから見ても、赤い羽根のやうで、だれの目にもよく見分けられる。そこで我輩がこの尻尾を真直に立てゝゐたら、旗色がいいものと思つて、君がたはあとから進んで来るのだ。併し我輩がもし尻尾を下へたらすやうだつたら、敗軍だと思つて、君がたは大いそぎで退却するがいい。」

蚊はこの評議を聞くと、すぐに飛んでかへつて、みそさといの王に、見て来た通りのことを、残らず報告しました。

戦争の時刻が来ると、四足獣は残らず戦場へ集まつて来ました。そして大勢の獣たちの唸る聲や吼る聲は、天地もふるへるばかりでした。

みそさといの王も、自分の軍勢を引きつれて戦場へ進んで来ました。鳥や羽蟲の羽ばたきの音や鳴き聲で、それはもう耳もつぶれるばかりでした。

その時みそさといの王は、熊蜂を呼んで、その方はとつと行つて、あの狐の尻尾のさきにとまつて、

力一ぱいに刺して来いといひつけました。

そこで熊蜂はその通りにして、第一の針をさすと、狐はいたさうに後足をちぢめたが、それでもがまんして尻尾は前の通り真直にもちやげてゐました。

二度目にさした時には、狐はぼつちり尻尾をさげました。けれども三度目の時には、もうどうしてもがまんが出来なくなつて、尻尾をたらし後足の間へさしこんでしまひました。これを見ると、ほかの獣はもうだめだと思つて、われがちに自分の穴へ逃げかへつてしまつたので、鳥の軍勢は骨を折らずに大勝利を得ることになりました。

## (三)

戦争がすむと、みそさといの王は女王と一しよに子どもたちのところへかへつて来てかういひました

「さア、悦べ！悦べ！戦争はこつちの勝ときまつたぞ！これでもう腹一ぱい飲み食ひしてもよからう。」

「まだいけません。あの熊がこゝへ来て、頭をさげてあやまつて、そして僕たちを立派な身分の子どもだといふまでは、なにも食べるのはいやです。」

そこでみそさといの王はまた熊の穴へ飛んで行つて、外からかう聲をかけました。

「よばくの言草いひめ！おれの巢へ来て、うちの子どもたちに貧乏人の餘鬼だなんぞといつたのをあやまるかどうだ。いやといへばお前の肋骨を折つべしよつてやるぞ。」

かういはれたので、熊はびつくりして、ふるへあがつて、すぐに穴からはひ出して、みそさといの巢へ行つて、自分のわるいことをあやまりました。

そこでみそさといの子どもたちは、やつと機嫌がなほつて、みんなして食べたり飲んだりしました。そして夜おそくまで陽気に騒いでゐましたから、わたしはみんなが酔つぱらつて、巢の上からおつこちでもしなればいゝと心配してゐるのです（をばり）



けれども、みそさといの子どもたちは、首をふつて、かういひました。

# こほろぎ遊び

(童謡遊戯)

野口雨情

こほろぎ コロク

夜長ぢやな

——と、大勢が二列にならび、手をたたきながら歌ふ。

夜長ぢや 夜長ぢや

帯くけた

——と、こほろぎの二人は、こほろぎの前後を左右にひろげたと歌けて来て、三列にならびて大勢の方へ向けて歌ふ。



その帯 どの子に  
締させる

——と、大勢がこほろぎを両し立てながら歌ふ。

この子に この帯  
締させる

——と、歌ひながらこほろぎは前後を左右にひろげたと歌けて来て、大勢のうちの一入を捉へやうとする。(捉へられたものは、こほろぎになつて又初めから同じ遊戯を繰り返す。)大勢は捉へられぬやうに逃げ廻る。  
(注意) この童謡遊戯は極く風刺ですが、幼稚園が尋常一二年位の子供さん達に試して下さい。  
歌詞は子供さん達が自由に歌ひ方でよろしいのです。指導者の方が歌詞をノリザリをつけてお興へになつても結構です。





## 二人の泥棒

林 眞 珠

ふたりの男が、暗い森のなかを歩いてゐました。ところが、このふたりはどこまで行くといふあてのない泥棒なのでありました。で、ひとりの、秋刀魚のやうにひよろながい方が、ごろりと路傍に寝ころびました。するとつれの男も、黙つてうづくまつてしまひました。いつもかうして夜の仕事をうまく運ぶために、ちよつと息をつくのでありました。そこで、さつそく相談を始めればよかつたのに、つかれてゐたので、ふたりは眼をつぶつたのでありました。——すると、頭のうへで一疋の蟲が泣き出しました。「おい、いゝ聲だな——」

とおもふまもなく、草葉のなかから、いちどきに、仲間の蟲が聲を張りあげました。

「わたしが、左官屋の小僧だつたときに。」

と、もひとりの、眼のまんまるな、ふくろのやうな男が、とつせんかう言うのでありました。

「ふん、それがどうしたのさ。」

秋刀魚の方も、のんきな聲で言ひました。まるで散歩者のやうに。

「毎日、土をこねませるのがつまらなくて仕様がななのだ。いくらやつて見たところ、土なんだからね。でね、あるとき鼠をつかまへてこね廻したのだよ。すると壁のなかで、そいつが一と晩ちゆう泣いてゐたよ。それが蟲の聲によく似てゐるのだ——今でも泣いてゐるだらうかと、ふと思ひ出したのだよ。」

「莫迦だな。」

秋刀魚の、ひよろながい男は、かう言つてごろり

と寝返りをしました。が、あきらかに「おれ達は泥棒でなかつたら、もつと愉快なのだがなあ。」と思つたのでありました。

ところが寝返りをしたはずみに、秋刀魚は両手をついて起きひりました。すると、ふくろの方も立ち上つて眼を見合せました。「それではひとつ出掛けるかな」といふやうに。——ふしぎなことに、ふたりは歩き出すと、すつかりもとの泥棒の心持になつて來ました。

森をぬけると、一軒の家が山陰に見えました。空から流れてゐる灯の光で、ふたりの泥棒はすぐ目星がつかしました。

窓ぎはに忍んで、秋刀魚の方は部屋のなかを窺ひました。

「誰だい。」

と、思ひがけない鼻の先で聲をかけられたので、びつくりしました。

「まさかお前さんは泥棒ぢやないだらうね。」  
部屋へやのなかにゐたおちいさんは、凄こわい眼めで、秋刀魚あじのこを覗のぞみつけました。

「——旅たびの者ものですよ。おうちが明るいので、ちよつと拜見はいけんしてゐたところですよ。」  
かう秋刀魚あじのこは、あやうく言いひ出ださうとしました。



116  
——ところがおちいさんの手てに、ひと握にぎりの紙幣きずが握にぎられてゐたので、「さあ、うまいぞ。」と思おもひました。そこで、ふたりはさつそく泥棒どろぼうの本性ほんしやうをあらはして「ごめんよ」と言まつて、窓まどからゆつくり這入はいつて行いきました。

おちいさんは、あつげにとられてゐましたが、やがて怖おそしくなつて來きました。

さいしよに、ふくろの大きな拳こぶしがおちいさんの頭あたまに飛とんで來きたので「あつ」と聲こゑを上げました。

「これは、そちらのポケットに入れときな。」

秋刀魚あじのこは、紙幣きずをふくろに渡わたしました。

「誰もゐないのだね。」

ふたりの泥棒どろぼうは部屋へやのなかを見まはしながら言いひました。「——たんすの傍そばで、ばんやりしてゐた爺ぢやうさんは、をかしいほどこのときまごつきました。そして痛いたい頭あたまをおさへながらかう言いひました。「わしはもすこし若わかかつたら、お前まへたちにこんな事こと

いたので、びつくりしてそちらを見ると、樵夫せうふの夫婦夫婦がやつて來きるところでありました。

「あつしやい。」

ふくろは機轉くるまをきかしてかう聲こゑをかけました。

「今晚こんばんは——ところであなた方はどなたですか？」

樵夫せうふはびつくりして不審ふしんさうに眼めを睜みつたので、秋刀魚あじのこは「おや、これはへんなことになつて來きたぞ。」と思おもひました。で、すぐかう言いひました。

「あなたはこの家うちのご主人しゆじんですね。さうですね——それだと、じつのところわたし達は旅たびの者ものですよ。おうちの灯あかりが見えたので、休やすませて貰もらつてゐたのですよ。」

「わたし達たち夫婦夫婦は、今朝けさから町まちに出掛でかけてゐたのですからね。」

この話はなしの最中さいちゆうに、樵夫せうふのおかみさんは部屋へやのなかで、とつせん、けたましい叫聲けいせいを上げました。

「たいへん、たいへん、泥棒どろぼうが這入はいつてゐるんです

似にはさせないのだが——。」

けれど奇妙くわうめうなことに、その爺ぢやうさんは手早てはやく大きな風呂敷包ふろしきを背負せおつて、泥棒どろぼう達が這入はいつて來きた窓まどからはんたいに逃げ出でしたのであります。

「おや、おや——。」

と、秋刀魚あじのこもふくろも、このときばかりはあわてました。

ところが思おもひがけないことに、表戸おもてどがしせんを開あ



よ。」

樵夫のおかみさんは、驚きのあまりまつ青になつてしまひました。——無理もないことで、幾年もかかつて朝からゆうぐれまで働いて蓄めたお金や品物を、すつかり盗まれてゐたのですから。

『あゝ、わたし達はもう乞食同様に明日から喰べていけないのだ。』

かう言つて、おかみさんはおろおろと泣き出ししました。

『それではあの締め、泥棒だつたのだな。』

『こんな正直な樵夫の金を盗むなんてひどい奴だ。』とふたりは自分のことを忘れて、同時にかう言ひました。

『では、お前達は泥棒ではないのだな。』樵夫はおそろしい顔をして、ふたりを睨みつけました。

『そんなでもない——それどころか泥棒をおんなぐつ

て、それ、このお金でせう、わたし達が取り戻してあげたのですよ。』

ふくろはかう言つて、ポケットからさつきのお金を出しました。——このとき秋刀魚と、ふくろのやり方がいかにも氣に入つたらしく、樵夫夫婦の喜んでゐる顔をうれしさうに見つめるのでありました。

さて、このふたりの泥棒は、それからまた何處といふあてもなく歩き出しました。ふたりとも黙つて

さうして夜が明けたときに、ふたりは山の上に腰を掛けてばんやり朝の空をながめました。美しい町の上には工場の煙突から、しづかに煙が立ち昇つてゐました。

『町に出て働けな。』

秋刀魚はかう言つて、ふくろの顔をふたたび見つめました。

するとふくろは黙つて立ち上りました。そしてふたりとも歩き出しました。町の方に——。(をばり)

長篇前號の梗概

十五少年漂流物語 濠洲にニューグランドといふ島があります。この島にオーグランドといふ市があつて、そこにチエイマンといふ學校がありました。暑中休暇には二ヶ月間の休みがあります。そこで、この學校に通學してゐる十五人の少年達が集つて、暑中休暇を利用してニューグランド島を一周しようといふことになつて、少年の一人がノットのお父さんの所有船であるスロー船に乗つて、船出する事になりました。船には十五人の少年の外に、船長としてサーネット少年のお父さんが乗組み、外に副船長が一人、水夫が六人、料理番が一人、これは皆な大人が乗る事になつてゐました。ところが、いよいよ明日は航海に出ようといふ前の晩、ヤサツタといふ少年のいたづらの爲めに、また大人が一人も乗込まない内に、船が離れ、明日は航海に出ようといふ前の晩、船は大嵐に出遇ひ、遂に太平洋の真つただ中を、風のまにまに吹き流されて、一つの無人島へ着きました。十五人の少年達は、この島で暮さなければならなくなりました。いつか助け船が来るだらうといふ微かな望みから、不自由なこの島で、艱難辛苦の生活をしました。寒い冬が来た後には春が来て、困難な生活にも慣れて來ました。ゴールドン、プリヤン、ドノバンなどが年長者で、皆の世話をしてゐました。

ところが、この無人島へ、一艘のボートが打上げられたのです。少年達の驚きつたら、ありません。ボートには「セメンン」號サンフランシスコと記してありました。

山の少年 この長篇は紐州の山の中についた三人の少年の物語りです。三人の名は、信次、孫四郎、善太といひました。三人はいつも遊び友達で楽しく暮してゐましたが、仲間の善太が、今度皆なに別れて、樵夫の見習に行、ことになりました。孫四郎も信次も別れを惜んで、その日は一日、三人して山の中で遊び暮しましたが、それでも未だ別れが惜しまれるので、その晩は善太の家を集つて、面白く話をして過さうといふ事になりました。そこで三人は、善太の家でタカノ坊の話をどなして興がつてゐますと、ふいに外で妙な音がしました。出て見ると、蜜蜂の巣を盗みに來た泥棒だつたのです。善太の父親は近所の秋川に加勢をたのんで、追つかけて行きましたが、肝心の泥棒は見失つて了つて、熊が出て來たのです。驚いて、二人とも腹を抜かして了ひました。

ラム王の一生 ラム王はエンペ國の理刑の子供として生れました。生れながらに變身術を心得てをりましたので、いろ／＼の不思議を現して人々を驚かしてゐました。さてラム王は、諸國をさまよひ歩いて、いろ／＼の手帳を現し、四度も王の位に即きましたが、しかし、いつもちつとしてゐる事がいやになつて又ちきに旅に出ました。今度もヒツヒツの國で、王の位に即きましたが、それも直ぐにやめて旅に出て、ある晩、お星様と逢つたので、お星様と逢つたので、お星様に泊りました。

# 山の少年 (長篇)

(前巻までの梗概は一八九頁にあります)

## 沖野岩三郎

### 智謀兼備の軍師

翌る朝早くから、村の人達は與一の家を集つて来て、熊狩の相談を始めました。けれども善太は今日山入りの約束があるので、面白い熊狩も見えないで、川合山の木藪小屋へ行く事になりました。



信次も孫四郎も一緒に見送つて行くつもりで、溝ッ縁の細路を話しながら歩いてゐると、竹

敵の所から「白」が尾を振りながら駆け出して来て、ふざけるやうに、ワン、ワンと吠えました。「白、白、こんな所に居たなら、熊に咬み殺されるぞ。」

信次は心から心配さうに言ひました。

「うん、本當にあぶないぞ。猪だつたら大丈夫だが、熊に出會つたら殺されるかも知れない。」

孫四郎も心配さうに言ひました。すると善太は、「白を川合山の方へ連れて行つてやらうぢやないか。此のまゝにして置けば、きつと熊狩りに連れて行かれるよ。」と言ひました。

「さうだ、川合山の方へ連れて行きやア熊に殺される氣遣ひはない。孫四郎さん、其所の繩を拾つて下さい。」

信次はさう言ひ乍ら白の首を抱へました。そして孫四郎のもつて來た草刈繩で、白の頸を縛つて連れて行きました。

五六町程川に沿うて下ると、橋の向ふから一挺の山鴛が來ました。二人は鴛を擔つて、一人が小荷物を持つてゐました。近づいてみると 昨晚腕を折つた秋川が其の駕に乗つてゐました。

三人は鴛を見送つて置いて、細い山路を、支流に沿うて五六町も上りますと、一番前を歩いてゐた孫四郎が、

「あ、あれは何だらう？」と言つて立止りました。

信次も善太も驚いたやうに川の向ふを見ました。

川向ふには疊一枚程の黒い滑岩があつて、其の岩の上に一疋の不思議な物が、こちら向いて坐つてゐます。眼の玉は黒く光つてゐます。口は大きく耳の所まで裂けて、齒が白く見えます。耳は唐犬のやうに垂れてゐますが、尾はピンと撥ねてゐます。前足をきちんと揃へて行儀よく坐つたまゝ、こちらを睨んでゐるのでした。

「わあーい？」と嗷鳴るやうに叫んで、怪物の方へ



石を投げてみた善太は、少し色を變じて、  
「何だらう？ お化ぢやないか知ら？」と言ひまし  
た。

「白、白、行け行け！」と言つて白の頸から繩を解  
いたのは信次でした。けれども白は川向ひの怪物に  
は目も呉れないで、道の上の方に鼻を向けて、クン  
クン言つてゐました。

「わあーいッ！」と三人は聲を立て、叫びました。

けれども不思議なお化は、びりッとも動きません。  
「石を投げろ、石を投げろ。」と言つて三人は小石を  
擲んでばらばらと川向ふへ投げてゐるうちに、孫四  
郎の投げた可なり大きな礫が、こつりと怪物の頭に  
當りました。けれども怪物はやつぱり端然と坐つ  
て、こちらを睨んでゐました。  
「俺は其の白を伴れて、川向ふへ渡つて行つてみ  
る！」  
孫四郎は勇氣を出して言ひました。

けしかけたが、白はちつとも  
怪物の方へ行かうとはしま  
せんでした。

「こらッ、撲り殺す  
ぞー！」

孫四郎は石を跳  
び降りて、其所に  
あつた棒ちぎれを  
拾つて振り上げ乍  
ら怪物の方へ突進  
しました。信次は  
角の尖つた割石を  
二つ擲んで孫四郎の  
後へ續きました。白  
は何事が起つたのかは  
知らないが、兎に角面白  
い出来事でもあると思つたらし



「行つて見よう！ なアに世の中に化物なんてある  
もんか。」と信次も言ひました。

「だつて、あれは犬でも猫でも猿でもないよ。變な  
ものぢやないか。」

善太は川を渡る事に替成しないやうでした。けれ  
ども孫四郎は、もう着物を脱いで川岸の石の上に置  
いて、川を涉りかけてゐました。

「白！ 行け！」

言ひ乍ら信次も着物を脱いで川へ跳り込みまし  
た。白は信次と一緒に水に跳び込んで、嬉しそうに  
泳ぎ始めました。

孫四郎と信次とは、自分で自分を勵ますやうに、  
わア、わア、と叫び續け乍ら、川を渡つて向ふの岸  
に着きましたが、直ぐに怪物の居る岩の方へは、突  
進しなかつた。

二人は白い大きな石の上に這ひ上つて、其所から  
小石を二つ三つ投げてみました。そして頻りに白を

く尾を掉り乍ら、二人に跟いて走りました。元氣を出しながらも、恐る／＼棒ちぎれを振り上げて真先に進んでゐた孫四郎が、滑岩から四五間こちらまで来た時、

「おーい、こら／＼、悪戯をしちやアいけないぞー」と叫ぶ聲が聞えたので、振返つてみますと、川向ひの善太の後に立つてゐるのは、與兵衛爺さんでした。

「祖父さん、あんな化物が居るので、撲り殺してやらうと思つたのです。」

信次はまだ石を掴んだまゝ言ひました。

「馬鹿を言へ、晝日中化物が、そんな所にアンケラカシとして居るものか、あれは化物でも何でもありません。近くへ行つて能うく見ろ！」

與兵衛爺さんは齒の無い口を少しく開けてにこにこ笑ひ乍ら叫びました。

お化で無いといふ事を知つた二人は、襦袢のまゝ

滑岩の方へ走つて行つて見ますと、夫れは木影のコマ犬でした。

「まア！ お宮のコマ犬ぢやないか。」と言つて信次は腹を抱へて笑ひました。けれども孫四郎は笑ひませんでした。夫れは孫四郎の投げた小石が、コマ犬の頭に五厘銅貨程の疵をつけてゐたからでした。

間も無く與兵衛爺さんは、上手の淺瀬をさぶ／＼と渡つて来ました。そしてコマ犬の所へ来て、兩手を合せて拜みました。孫四郎は與兵衛爺さんに何と言つて叱られるか知ら？ と思ひ乍ら黙つて見てゐると、與兵衛爺さんはコマ犬の頭を軽く手の平で撫

でながら、  
「さア、コマ犬さん、私の家へ参りませう。今日から私の家内になつて、信次と一緒に遊んでやつて下さい。夫れから白の守り神になつてやつて下さい。」と言つて、さて可愛いといふ風に、コマ犬を胸に抱きました。

「祖父さん、其のコマ犬は、どこのお宮にあつたのです？」

信次もコマ犬の頭を撫でながら言ひました。

「これはネ、こゝから二十町ばかり奥の東谷といふ所の氏神様にあつたコマ犬だ。」

言ひながら、與兵衛爺さんはコマ犬の口の中に、人さし指を入れてみました。

「東谷の氏神様にあつたコマ犬が、どうして、こんな川原へ来たのです。」

「政府が神社合併といふことをしたので、小い氏神様は皆な打き毀されてしまつたのだ。そしてコマ犬は川へ投げ込まれてしまつたんだよ。可哀さうに。」

「どうして、そんな亂暴なことをしたの？」

「政府の御都合で、あまりお宮様が多いと困るんだとサ。小い宮は打き毀されて、大きなお宮様だけ残るんだよ。お前達の参るあの権現様は大きいお宮だから残つてゐるよ。」

「お宮様と政府と、どつちが偉いんです？」

「お宮様に有難いが、政府は偉い。」

「有難いのと偉いのと、どんなに違ふんです。」

信次はコマ犬の尻尾を撫でながら訊きました。

「政府は時の將軍だから偉いんだよ。」

「時の將軍ツて、どんな事ですか？」

「時の將軍と云ふのはネ。」と言ひかけて與兵衛爺さんは、コマ犬を石の上に措いて「昔も、神社合併といふ事があつて、役人が氏神を焼拂ひに來たことがある。時其大森の氏神は、どんなに火をつけても焼けなかつた。松や杉の枯葉を宮の周圍へ堆高く積んで置いて、夫れに火をつけても、宮は柱一本焦げも焼けもしなかつた。夫れを見た氏子の人達はお宮様の御威光を有難がつて涙をこぼして拜んだのだ。所が焼拂ひに來たお役人は、氏神様に對つて「時の將軍に従ふべし」と大聲で、叫んで置いて火をつける。見るうちに、めら／＼と焼けてしまつたさう



善太はいつになく勇ましい事を言ひました。  
 「鹿が山から出て来たなら、あの青潭へ入つて泳ぐに違ひない。其時俺は此の帯で鹿の角を縛つてやる。あんた方二人は前足と後足を一つに縛つてやれ。わけなく取れるぞ。」  
 孫四郎は胸に成算のあるやうに言ひました。  
 「そんな事が出来るもんですか。」  
 信次は孫四郎の無謀を笑ふやうに言ひました。けれども孫四郎は強く頭を掉つて、  
 「なアに、鹿は水の中へ入ると、材木を流すやうに、静かにしか泳ぎはしない。少うし拔手をきつて泳げば、直ぐ鹿に泳ぎつくサ。そして俺は鹿の脊へ馬乗りに乗つて、此の帯で角を縛るから、其間に信次さんは水をもぐつて鹿の前足二つを一緒に縛つてやれ。善さん、あんたは後足二本を一つに縛つてやるんだよ。さうしたなら、あの浅い瀬の所へ行つた時、鹿はごろ／＼瀬を轉がつて、獨りでに死ぬ

だ。だからお宮様は有難いもので、時の將軍は偉いものといふ事を知つたのだ。此の東谷の氏神も有難い氏神様ではあるが、政府からたゞきつぶせとの御命令があつたから、夫れきり打きつぶされてしまつたのだ。お役人が来て、此のコマ犬を川へ投げ込んだのだ。所が私は昨日狩に来て、此所の水際に其のコマ犬が流れついでゐるのを見つけて、此の滑岩の上安置しておいたのだ。」

與兵衛爺さんは、其のコマ犬を抱いて川の方へ歩いて行きました。そして三人は川を渡つて向ふ岸へ歸つて行くと、善太はひとり淋しさうに杉の切株に腰をかけて待つてゐました。

「白は？ 白は何所へ行つた。」

與兵衛爺さんは滑岩の方を見ながら言ひました。

其時孫四郎は、川下の方を指さして、

「あ、白があんな所を泳いでゐる！」と言ひましたので、三人は一度に川下の方を見ますと、白は丁度

今 大きな樫の木が生えてゐる川岸へ這ひ上つた所でした。夫れを見た與兵衛爺さんは、

「白があそこへ行つたら、今に此度あの樫の木の所へ鹿を追ひ出して来るぞ。さア早く家へ歸つて、鐵砲をもつて来よう。」と言ひ乍ら、コマ犬を抱へて家の方へ、どん／＼と走りました。

「善さん、あとで送つてあげるから、暫くの間こゝで見て居ようぢやないか。」

信次は聲を潜めるやうに言ひました。

「うん、見てゐよう。今に白が鹿を追ひ出して来るかも知れない。」

「信次さん所の祖父さんが来ないうちに、鹿が來たらどうしよう。」

孫四郎は右の手の母指を銜へながら言ひました。

母指を銜へて吸ふのは孫四郎の癖でした。

「若し鹿を追ひ出し、來たなら、三人で打殺してやらうぢやないか。」

ふ。屹度死ぬよ。」

「さうだらうか。信次も孫四郎の言ふことを半ば信じました。」

「夫れは本當に、うまく行くかも知れんぞ。」

善太は殆ど孫四郎の發起に賛成しました。

「さア、あの淵の所へ行つて、待つてゐようぢやないか。」

孫四郎が先に立つて歩き出さうとした時、ごろごろと石の轉がる音がしたので、三人は思はず一度に樫の木の方を見ますと、一疋の大きな鹿が、角を振り立てながら、縁の木の間に隠れに川の方へ走つてゐるのが見えました。十四五間後れて白い犬の走るのが、ちら／＼と見えました。

「さうりや来た！ 鹿だ鹿だ。早く／＼。」

孫四郎はもう帯を解きながら走りました。信次も善太も一緒に帯解になつて走りました。

「来た／＼来た／＼」と孫四郎が叫んだ時、人の頭

命に泳いでゐました。

犬と睨み合つてゐた鹿は、ひらりと身を躍らして又た潭の中に飛び込みました。

「さうら、信次さん、前足を縛るんだぞ。」

孫四郎は叫び乍ら鹿から二間ばかり手前まで泳いで行つた時、岸の方から、

「おーい、危ない危ない：早く岸へ戻れ！」と叫んだのは與兵衛爺さんでした。

信次も孫四郎も、與兵衛爺さんが来たので、安心して岸へ泳ぎついた時、丁度鹿は淺瀬の所へ行つて、高く首をあげて、ぶる／＼と身顛ひをしたと思ふと、ばったり倒れました。と、同時にドゥーンと鐵砲の音が聞えました。

「射つた／＼、鹿が流れないうちに、早く引止めろ！」孫四郎は叫び乍ら瀬の方へ走りました。信次も善太も一緒に走つて来て、手にもつてゐた帯で足と角とを縛つて、よいしよ／＼と川原の方へ引き揚

程の大きい石が、ごろ／＼と轉がつて来て、どぶんと淵に落ち込んだと思ふと、大きな鹿が悠々と潭の中に跳り込みました。

「俺はこゝから行く：善さんと信さんは其の上と下とから泳いで来い：孫四郎は丁度鹿と真正面の所から、ざんぶと川中に跳り込みました。」

「ひやア！ 行くぞ。逃がすな。」と言つて信次も潭の中に跳り込みましたが、善太は何を思つたか、手頃の石を水の中にどぶんとどぶんと二つ三つ投げ込みました。

犬に追はれた鹿は、潭の中に跳び込みましたが、正面から三人の人間が自分に向つて泳ぎつけて来さうなので、これではならないと思つたものか、急に方向を轉換して、後へ取つて返しました。そして岸に這ひ上らうとした時、丁度あとを追つかけて来た白が、ワン、ワンと吠え乍ら鹿の前足を縛りました。

「白！ しつかりしろい。」と言つて孫四郎は一生懸命に追つて来ますと、其所に立つてゐた與兵衛爺さんは、鹿に跳りかゝらうとする白を宥めながら、

「お前達は裸體になつて、此の鹿をどうしようと思つたのかい？」と問ひました。

そこで孫四郎は三人で角と四足を縛らうとした計畫を話しますと、與兵衛爺さんは思はずふき出して、

「孫四郎、お前は智謀兼備の軍師ぢや、太閤様そのけの計略家ぢや。うまい事を考へたものぢや。しかし夫れは計略だけで、とてもあの鹿は、お前達に生捕りにはせられないよ。第一鹿の脊中へ乗らうとしたつて、子供の一人や二人は、ぶる／＼と一つ身顛ひをせられたなら、水の中へ震ひ落されてしまふぢやないか。鹿だつて力一杯に泳いでゐるんだよ。其の足を、どうして／＼縛られるものかい。奈良土産の靱具の鹿ぢやあるまいし：」と言つて、又たは／＼と笑ひました。與兵衛爺さんは川原の葛かづ

らを取つて来て、鹿の四足を一緒に縛つて、石を重しにして水の中へ沈めました。

「さア、これから熊狩の手傳ひに行かう。しかし白を伴れて行つちやア、あべこべに、やられるか知れないから、信次お前は白をつれて、あの峠まで善太を送つてあげる。そしてゆつくり歸つてお出で。」

與兵衛爺さんは夫れだけ言ひおいて、家の方へ急いで行きました。

三人は着物を着て、白をつれて、川に沿うて又た十四五町登つて行きました。川は段々狭くなると同時に急流や小さい瀧が、そここゝにありました。

「信次さん、あそこ、あの比企谷の瀧を見た事がありますか。」孫四郎は青葉の繁みから見える、白い水の流れを指さし乍ら言ひました。

「いゝえ、まだ行つて見た事はありません。」  
信次は頭を掉り乍ら言ひました。すると善太は、「あの瀧には河童法師があるつて話だぜ。」と言つて

眼を睜りました。

「うん、河童法師があるつて話ちや。河童法師つて恐ろしい事はないよ。俺は河童法師と相撲を取つて勝つ法を知つてゐるんだ。」

孫四郎は自信のあるやうに言ひました。

「太閤様えらいぞ。智謀 備の軍師……河童法師に勝つ法を教へてお呉れ。」

信次は孫四郎の袖を控へ乍ら訊きました。

「何でも無いんだ。河童法師は頭の上に皿が八つあつて、夫れに水が入つてるんだ。だからこつちで頭を掉つて見せると、河童法師も眞似をして頭を掉るんだ。そして皿の中の水が一滴も無くなつたらもう子供よりも弱いんだといふ話だ。」

「ちやア、若し河童法師が出て来たなら、孫さん、あなたは相手になる事を引受けてお呉れ……」

「よし、俺は引受けてやる。さア、あの比企谷の瀧を見て来よう。」孫四郎は先に立つて瀧の方へ行

きました。信次も善太もあとに續きました。白は兎でも狩りに行くつもりでも思つたか、頼りに鼻を利かせ乍ら、後になり前になつて走りました。

三人は木の根に絶り、岩を踏み越えて、ヤツと瀧壺の傍まで行つてみますと、涼さうに流れ落ちる水は、大きな摺鉢のやうな淵の中に青黒く貯つてゐました。白い沫が浮揚つては消え、浮揚つては消えしてゐました。

「底が見えないネ。餘程深いらしい。」

善太は少しく身體を後へ引きながら言ひました。

「おい、こりや。河童法師奴。出て来い。」

孫四郎は言ふや否や大きな石を、どぶん！と潭の真中に投げ込みました。

水泡が二三尺高く飛び散つたと思ふと、底の方から無数の小さい泡が、ぶる／＼と浮いて来ました。

白は岩の上から、山の方を見上げながら、ワン、ワン、と小聲で吠え初めました。 (つゞく)





幼年詩

若山牧水選

ほたる取り(賞)

和歌山縣那賀郡川原校尋六 辻内 静枝

はたる一匹取つたら弟がよろこんで

もういのうといふ評 満足げな弟さんお顔。(牧水)

ぶだう(賞)

香川縣水田校尋六 森口 キヌ

とんできた評 夏のゆふぐれ。(牧水)

螢

山梨縣北巨摩郡江草校尋五 小澤 收

屋根の向ふにほたるが

波形にとんでつた

麥

和歌山縣那賀郡川原校尋六 高井 勝枝

あからんだすじめが上で

やかましくさへづつてる

るすばん

和歌山縣那賀郡川原校尋六 堂田 重遠

のびてゐる千里も萬里も

のびさうな評 調子が風くいていかにも伸びさうな。(牧水)

芝かり(賞)

東京市外目黒町下目黒 伊藤 駿二 (十四才)

芝かりチヨキ

床屋さん

だれの頭だ大きな頭評 鏡いつげい大きな頭。(牧水)

鳩

山梨縣北巨摩郡江草校尋六 情水 嘉重

田へ行く途中

白茶色のはとが

向ふの松林へ

まつていつた、評 美しく上品な繪。(牧水)

梅雨

熊本縣阿蘇郡宮地町風木 渡邊 徹之 (十四才)

雨が眠つた様に止んだら

又、目ざめた様にふつてきた

葉にあたる音ばかりだ評 君のははかのも皆うまかつた。(牧水)

雨上り

和歌山縣那賀郡川原校尋六 小谷 隆男

雨上り夏みかんの木から

葉がとびたつた

評 蝶も蜜柑の木はつきりして。(牧水)

蠅

山梨縣北巨摩郡小淵澤村 田中すゝみ (十二才)

蠅取りびんから

出やうと

かはいさうな蠅さん

入つたところ 忘れたの評 いつのまにやら忘れた。(牧水)

夕方

山梨縣北巨摩郡江草校尋五 藤原 斌

麥からで

はたるかご

こしらてゐたら

光、うすく

朝願よ、小川 正典

これからお前の

出る幕だ

うんときれいに

咲いとくれ

ハーモニカ

昨日もらつた

ハーモニカ

僕は嬉しくてたまらない

朝早く起きて吹いた

お日様

西須摩寺 前三ノ二 小坂 紘子

お日様あなたはいつもに

こゝしていらつしやる

いつも天気にしてね

時計がなる

あとしづか

山梨縣那賀郡八代校尋五 佐伯 芳雄

大ありが

糸ものをさがしてゐる

あつさうな

登山者

山梨縣甲府相生校 豊島 泰

夏休が来たので

登山をする人が二三人

家の前を通つた

麥わら帽子につるついで

雑なうせにしよつて

風が強い

息が出来ない

お百姓

臺北市 武藤 珍子

葉東かついだお百姓が

見ながら歸つて往く

三ヶ月様見ながら

歸つて往く

白い葉

埼玉縣秩父郡野上校高二 落合守字郎

風がどうときた

いもの葉が

白くなつた

波の様だ

いもつばたけの波だ

朝顔

土橋 修



方 綴  
選郎次佐藤齋

夕 方(賞)

三重縣宇治山田市河崎町出屋敷  
中西 靜 夫  
十二歳)

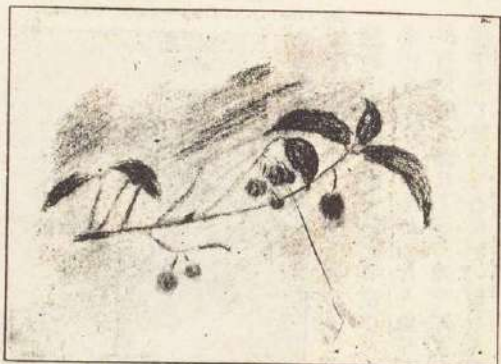
朝顔に水をやつてから、湯をあ  
びました。それから、ゆかたをき  
て橋の上へ行きました。もう橋の  
上には、大きい人が二三人で何か  
話し合つてゐましたが、僕が行く  
と、話をやめて、僕の顔をじろじ  
ろと見ました。で僕は何か、き

まりがわるかつたので、少しはな  
れた石がきの上にこしかけまし  
た。すどしい風が湯上りの僕の顔  
を、こころよくふいて行きます。  
まつかかな夕やけが、水にうつつて  
何とも言へない美しさです。向ふ  
から、かんの舟が、山のやう  
に荷をつんで、ぎいこぎいこと、  
川を出て行きます。あちらの岸  
で、僕ぐらゐの子どもが、大せい  
集つて、面白さうに、「夕やけ小や  
け、あした、てんきになあれ」と  
歌つてゐるのが、風のためかよく聞  
えます。  
沖の方から、大きな魚船が、波  
をけつて、こつちへ近づいて來ま  
した。  
もう大分お日さんも、西の山へ  
入つて行きました。日の暮れるの  
も間はないでせう。

河口君(賞)

門司市青見町  
出石 三 雄  
(十五歳)

河口君は今年もう十六である。  
落第をしなかつたら本當は僕より  
一年上である。柔道も強ければ庭  
球も圓盤も砲丸も運動なら何でも  
やるが、學科の方は一向出來な  
かつた。授業中にはいつも退屈さうに  
筆入のふたに先生の顔やあだ名を  
書いてゐるが、鐘が鳴るといきな  
り階段の下の物置からラケットを  
ひつつかんでコートに飛出す。英  
習字の時間などは、いつも自分は  
一つも書かないで、面白い事をい  
つては周りの人を笑はす。いつか  
などは一時間中に二つも大きなお  
ならをやつて立たされた事もあつ  
た。だから英習字はいつも4から



賢 藤 須  
郡水碓縣馬郡  
六郡校部碓

だつた。河口君の洋服はもうはち  
切れさうに小さい。大きな河口君  
が着るのだからホツクなどはかけ  
られぬ。體操の先生にホツクをか  
けろといはれると、河口君はさも  
苦しさうな顔をして一寸かけて、  
先生が行つて了ふとすぐはづして  
了ふ。河口君は親切な人だつた。  
畑君が、「いつか黙つて歸つて了つ  
て、次の日先生に叱られた時、河  
口君は畑君に「俺に云つて行つた  
といへ」といつて、「畑君は私に云  
つて歸りました。私が云ふのを忘  
れてたんです」と先生にいつた。  
だから級の人からは皆に好かれて  
ゐた。この三月、河口君は又進級す  
る事が出來なかつた。成績表を貰  
つた時河口君は一寸しよげたが、  
校門を出る時はもう平氣な顔をし  
て得意のデカンションを歌つてゐ  
た。だが學校が始まつても河口君  
は來なかつた。どうしたんだらう  
と思つてゐたら此間取引所の横で  
逢つた。河口君は袂の着物を着て

鳥打帽子を冠つてゐた。どうして  
學校へ來ないんか」と聞いたら、「う  
ちや山口へ行く様になつたけ」と  
いつてゐた。あれから一度も河口  
君に逢はぬ。  
「河口は山口の米屋へ小僧になつ  
て行つたて」と誰かといつてゐた。  
かにとり

山梨縣北巨摩郡甲村下黒澤  
内 藤 恒 雄

丁度二十九日の夕方、かに取り  
の事を思ひたつた。自分一人でも  
つまらないから、哲さんにすすめ  
た。すると哲さんは、快く承知し  
たので、其の晩する事とした。燈  
火は芝居の時使つたかんでらと決  
め、石油は哲さんがもつて來る事  
とした。夕食をすませ、少し早か  
つたので家でまつて居た。八時頃



「きばつ」  
 名 古 市 西 編  
 校 市 六 六  
 彦 隆 尾 水  
 居たが、話す時が  
 と不圖昨日の夕方  
 「オイ」「オイ」と  
 哲さんの聲がし  
 た。外に出ると仕

になつたので、ばけつを右手に、  
 左手に麥わら帽子をもち哲さんの  
 家に行つた。自分がふだん氣味悪  
 がつた所も難なく通つた。どんな  
 様子かと聞いてゐたが、哲さんの  
 聲は少しもしない。一聲二聲「オ  
 ーイ」「オーイ」と呼んだ。する  
 とおつちやんが「誰だやい」「お  
 れだよ」と云ふと、おらがの哲  
 は、とつとこゝでうたゝねをし

度をして哲つさんが来て居た。「今  
 夜いくか」といつたので「どうで  
 もいゝさ」といつた。それぢや早  
 く行かざあ」といつたので早くめ  
 しをかつこんだ。あまりあわてて  
 食べたので、胸につかへて苦しか  
 つた。大急ぎで仕度をして出かけ  
 た。もうその時は暗くなつた。二  
 人で話しをしながら田浦に向つ  
 た。なせ昨夜早くねた」といふと

「なんばう待つて居ても來なかつ  
 たから」と答へた。知らず川  
 の橋の所まで來た。「こゝおらでは  
 いらざあ」「いゝさ」と云つて川に  
 はひつた。晝間さへ、うろく  
 して居たかにか一匹も居ない。三  
 間ばかり來たが何もゐない。馬鹿  
 しい歸らつかな」といはれた  
 ので、「いまま少しいつてみざあ」と  
 いつた。水の中をわきめもせず  
 歩いていつた。たつに従つて、こ  
 しつばねがいたくなる。それに燈  
 火の煙が、鼻のおくまではひる。  
 そのうへまはりの草があつてある  
 きづらい。たまに底がないかと思  
 はれるやうに氣味が悪い。一丁以  
 上も來たが何の形も見えない。哲  
 さんも大分あきたやうだ。かには  
 いくらいつても居ない。今度は、  
 はやを取る事にした。夜の事とて



景 風  
 入 縣 玉 崎  
 郡 入 根 山  
 六 六 根 山  
 勤 野 大  
 京都府女子師範附屬四  
 かくとう  
 横井 修吉

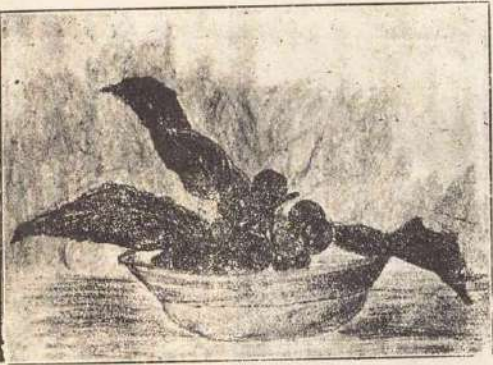
何の音もない。ただ水の音と歩く  
 音だけだ。哲さんは「こゝおらで、  
 うなぎの一匹も出て、目でもさま  
 せばいいに」といつた。自分も、  
 さう思つた。「つまらない、けえら  
 つかな」と一たん外に出た。する  
 と一匹のはやが目にとまつた。二  
 人は喜んで後をおつた。やうやう  
 の事で捕へた。はやは頭とどうと  
 が二つに分れてういて來た。それ

で少しは力づいた。其の内に、ど  
 じようの大きなのが居た。それを  
 取りまた大きなのが居た。その時  
 の喜びは例へられなかつた。大き  
 なのが河底に臥つて居るのを見つ  
 けて、それを取る時の愉快は又ほ  
 かのもとの、一種味が違ふ。十分  
 もの間にばけつの底に頭を揃へて  
 居るやうになつた。チョツと三四  
 寸もあるやうなどじようが頭を揃

一時間目のじぎやうがすんだの  
 で「先のつゞきをしよう」といつ  
 てかくとうをした。敵の組の大將  
 は松田君です。僕の味方は山上君  
 が大將です。松田君が「始めよう」と  
 いつたので、みんなははじめまし  
 た。山上君には松田君と堀内君が  
 かゝりました。僕には谷川君と加  
 藤君がかかつて來ました。加藤君  
 は、はげしい勢でやつて來て、あ  
 たまやむねやそら中をぼん／＼  
 とたたきました。向ふを見ると、  
 山上君が松田君におさへつけられ  
 てゐます。僕はこれいかんと思つ  
 て、加藤君のたたくのをはねのけ  
 て、山上君の方へかけつけて行き  
 ました。そして松田君をひつくり  
 かへさうとすると、松田君がおこ  
 つて力一ぱいに僕の足をひっぱつ  
 たので、あふむけにこけました。



「びは」  
埼玉縣入間郡山根校尋六  
稲島權治



僕はおきてにげようとする、加藤君がはしつて来ておさへつけました。僕はもがきたふしてやうやうの事ではげました。するとりん

がなつたので、気がすつとしました。

やぶれたくつ下

大連市風町二四  
大出 静子  
(十二歳)

裁縫の時間になつた。くつをぬがうとする時くつ下の破れて居るのに気がついた。ぬつて居る時でも一生懸命スカートで破れた所をかくして居た。わからない所を先生に聞きに行く時もあるたけわかない様に變な歩き方をして行つた。早く終ればいゝがとそんな事ばかり考へて居るのでまぢがつてばかり居る。

皆は私のはづかしいのも知らず、一心に縫つて居る。そんなでえりの伏せ縫も一向進まない。あれはあせる程まぢがふ。

「リンリンリン」やつと終りのりんが鳴ると共にほつと深いため息をついた。

螢 取

茨城縣東茨城郡小川校  
柴崎 寅松

「オ、行くべい——」忠さんが盛んに僕をよんで居る。僕は御飯をガブ／＼食ひながら外へ出た。「今行くよ」と言つて出て行つた。途々色々の話をしながら行く。一匹の螢がスーと前を通つた。「そら螢だ」忠さんが扇でおとした。それを僕が入れてまた進んだ。

淋しさうな林をぬけるとお月様が美しい笑ひ顔をして居た。「いい月だな」僕は忠さんの肩に手をかけて行つた。向ふから人が

来るやうだ。だん／＼大きく見える様になつた。  
其の人は僕等に「今ばんは」と云つて通つた。僕も「今ばんは」と云つて向ふを見ると、五六匹の螢がこちらへとんでくる。忠さんはかけて行つて二匹おとした。僕も二匹おとした。  
それを螢かごへ入れて「もうかへらうよ」と僕が云ふと、忠さん



犬

埼玉縣北埼玉郡大越村  
花 腰塚 まさ緒

「僕は、犬がすきだ。愛犬エスが一番すきだ。だから学校に行く時も遊びに行く時にも、僕はエスを連れ行くのだ。もう五六

で、僕が他へ行く時などは早くも知つて、門で尾を振りながら待つて居る。物を投げると、川でもなんでもガバ／＼と入つて行く。ワンと云つてパンを上へ投げると、パクリと口が受けて喰ふ。そして尾を振りながら残りのパンを催促するやうに僕の顔を見上げるので、又なげてやると、クルリと廻つてパクリと受ける。僕はどうしてもエスが一番好きだ。あんな可愛いやつはない。

池へおちた

千葉縣君津郡久留里校尋五  
藤代 よし

私がまだ五つ歳の時のことであつた。その夏の暑い日に、お母さんが井戸端でせんたくをしてをられたので私はつねちやんやはるちや

んやしげるさんなどと、池のはた  
であそんでました。まもなくせ  
んたくがをはつて、おかあさんは  
そのせんたくものをほしに前の方  
へ行かれました。

其の時つねやんは、私にむすび  
をくれようとして家へいきまし  
た。するとほるやんやしげるさん  
などは、ねえやんのあとへついで  
家へいきました。私は一人になつ  
て、池のはたの井戸ながしであそ  
んでゐるうちにすべつて池の中へ  
おちました。それから私は何もし  
りませんでした。

きがついて見ると、私は近所の  
おいしやさんの庭にはだかにされ  
てねかされてゐました。おかあさ  
んははだぬぎのまゝで、目になみ  
だをうかべてたつて、をられまし  
た。

そのわきに根本のおばさんと根  
本のおいしやさんがをられまし  
た。そしておいしやさんは手にへ  
んなものをもつてをられました。  
それははりでした。

あとでおかあさんからきいたこ  
とであります。しげるさんがに  
ぎりめしをもつてきて、私にくれ  
ようとして池のはたへきて見る  
と、私が池へおちてゐるのでたま  
げて私のおかあさんに「よつちや  
んが池へおちたよ——」と大どろ  
でよんださうです。

すると私のおかあさんは、たま  
げてはだぬぎのまゝで、とんでき  
て、私をだいておいしやへつれて  
いかれたさうです。其の時私はも  
ういきが出なくなつて、青くなつ  
てゐたさうです。根本のおばさん  
はたまげて、目になみだをうかべ

ながら「早う火であぶらう」とい  
つて、庭に火をもしてあぶつたさ  
うです。  
其の根本のおいしやさんがおく  
の方から出てこられて「まて——」  
というて、すぐにおくへいつて、  
はりをもつてきて、私のうでにち  
ゆうしやをしたさうです。すると  
すぐに私がいきを出したので、お  
かあさんはじめみなさんが「あ、  
よかつた——」というてよろこん  
ださうです。

### 鐵爺さん

三重縣度會郡四郷村大字楠部尋五  
山崎 豊

「ヨイお天気やナ」いつも元氣の  
ある聲であいさつしながら、鉄を  
かついで表の細い道を、てく——  
と田の方へ急いで行く鐵爺さんがあ

る。

今年七十になるが達者なお爺さ  
んで、雨が降つても、風が吹いて  
も、どんなお天氣の悪い日でも、  
一向頓着なしに、毎日働いて居る  
ので、色の黒いのと壯健などが此  
の村の評判となつて、鐵爺さんと  
呼ばれて居るのである。この鐵爺  
さんに、僕等が昨日會つた。その  
時に「人間は一年でも、長生をせ



ねばいかぬ。一日でも壽命があれ  
ばあるだけ、面白い事も聞けば、  
珍しい物も見える。この爺がまだ  
若い時には今のやうに、電燈はな  
く、石油ランプや燈火で仕事をし  
たのであつた。それに今では此の  
村へも電燈がつくやうに、電車 通  
るし自動車も来るやうになつた。  
此頃では又飛行機も上るし、今に  
朝熊山へ電車が通ると云ふが世の

「中もかはればかは  
るものだな」

花  
爺さんは腰から  
煙草入を取出して  
スパー／＼と煙草を  
吸ひかけた。吸殻  
を手に受けて、掌  
が煙草盆の代りを  
して居るのだ。鐵  
爺さんのビツクリ

するのも最だ。  
今は此村へも、近くの明野ヶ原  
から飛行機が朝早くからプロペラ  
の音高く空を賑はせてゐるのだ。  
そして朝熊山登山鐵道も工事中で  
此の八月頃には、開通するといふ  
ことである。爺さんは又言葉をつ  
づけて、

「坊ちやんが、爺の年になつた  
ら、まあどんな物が出来たら  
う。外國へ飛行機で、旅行するや  
うに、なるであらう」  
又煙草を吸ひながら、鉄を肩に  
して田小屋の方へ行つてしまつ  
た。

後を見送つた僕等は、異口同音  
に、  
「あの年になるまであのやうに丈  
夫で、居りたいものだ」  
と云つた。

(懸賞募集)

『牛』に關係ある郷土童話

大正十四年の新年號を飾るために、愛讀者の方々から右の童話を募集します。必ずしも「牛」が主人公になつてゐなくとも差支ありません。「牛」に何か關係があれば結構です。郷土の色彩を帯び、面白いものを求めます。皆さんが聞いたり、或はしらべたりしたお話で、成るべくこれまでに紹介されてゐないものを望みます。奮つて御投稿下さい。募集規定は左の通りです。

(募集要項)

- 一、選者 沖野岩三郎、野口雨情、齋藤佐次郎の三先生。
- 一、締切 大正十三年十月二十日。
- 一、原稿枚数 二十行二十字詰原稿用紙十二枚迄。
- 一、賞金 一等(二篇)三十圓、二等(二篇)二十圓、三等(三篇)十圓(此の外掲載の分には相當稿料を呈します)
- 一、原稿の封筒には、必ず「懸賞募集郷土童話」と記す事。
- 一、宛名は、本社編輯部宛。



通信

自由畫選評

山本鼎

今月は数も少く、佳作も乏しかった。もつといる／＼なものを描いた絵があつてほしい。それから、鉛筆なりペンなり、コンテなり、クレヨンなりで描いた一色の絵がほしい。

いのである。黄色の使用がちと多い。あちこちに黄色がのぞいて居てきたならしく見える。▲福嶋権治君の枇杷の寫生、ていねいに描いて居るのはいすが、少し生氣がない。パツクの色もいやな色だ。枇杷の關係色としてね。▲高田眞君の「花の寫生」少しだらけて居る氣味があるが、簡単な寫生として素直に感じを出して居る。左上の判見たいなサインは調子づけられた。

綴方選評

齋藤佐次郎

▽この號の入選作は、今月集つた優秀作と、前月號に選んで置いて雑誌に出なかつた分の優秀作を加へて、中々いい作を選び出した。「河口君」かくとう、「やぶれたくつ下」鐵斎さん」の四篇は前號の方である。

童話の選後に

野口雨情

△童話を鑑賞する上に、又は、童話を作る上に、誰でも注意をせねばならない要件があります。その要件と云ふのは、これまで機會あるたびに私が力説して来た「理智」と云ふことであります。

欺へらへらと得た智識のことでありませぬ。言葉なつかへば、學問的智識とでも申しませうか、兎に角學問によつて得た智識をもつてこしらへられた作品は童話ではないといふ意味なのであります。たゞし、本能的知識なれば、知識を通して見た作品でも差支へはないのであります。

『金の星』誌友募集

「金の星」の誌友を募集いたします。誌友にはいろいろの特典と便宜とがありますから、御希望の方は本社宛に規則書をお申込み下さい。今度より三ヶ月分以上の直接購讀者に對しても、誌友のお取扱ひをする事となりました。

考へられては困ります。決してこれは文化の逆轉を意味するものではありません。人間が生れると同時に先天的にもつて来た智識のことでありませぬ。賢愚なぞの區別はせずに、普通一般人がもつて生れて来た智識のことでありませぬ。赤んぼがお母さんのお乳を呑むに、誰に教へを受けずとも、かうして呑めばよいと云ふ智識をもつてをります。これは一例にすぎませんが、すべてかうした智識をさして本

編輯室より

△今、記者は十月號の編輯をへてホツとし

童話の選後に 齋藤佐次郎  
推薦したい作はかなりありましたが、全部

たところでは、暑い／＼といつて来た今年の夏も、いつか終りになりました。編輯室の庭では蟲が、あつちでもこつちでも、玉ころがすやうな聲で鳴いてゐます。もう秋が来たかと思はせられます。大震災以來、丁度一年になるのですが、あつた／＼した爲め、これで一年たつたのかと驚かされるほど短気がします。十月號の「アラビヤナイト」を出版が破壊して丁巳、命からん／＼印刷所を逃げ出した記者は、この静かな初秋の氣分になつて、ます／＼仕事のために勵まなければならぬ事を感じさせられます。

（本月號の推薦者）

- 童話 早田敬次郎 (住所至急お知らせ下さい) 東京市小石川西江戸町九
- 童話 湊 守一 熊本縣玉名郡荒尾町萬田
- 幼年詩 海達公子

新しく出た本

◇アラビヤン・ナイト (金の星社編)
金の星社の世界少年少女名著大系の第七編です。有名なアラビヤン・ナイトの内で、最も面白い「アリババと四十人の泥棒」商人と魔の話「阿拉丁と不思議なランプ」磁石島へ行つた坊さんの話の四篇を収む。例によつて非常に美しい本で、しかも定價の安い事では他に類のない獨特のもので、是非御一讀をすむ。(四六判箱入一七〇頁 定價九十銭)

◇祖先の生活 (上里朝秀氏著) イデア書院の児童圖書叢書の第十一篇です。われわれの祖先の生活を、歴史的に面白く書いてくれています。これまでの此の種類の研究書は多くは大人の爲めに書かれたものばかりであるので、著者は特に少年少女達の讀物として平易に、日常生活を本位として祖先の生活を研究してあります。(四六判箱入二八五頁 定價貳圓)
◇家庭用兒童劇 (第三集 坪内逍遙先生著) 坪内博士の家庭用兒童劇は、まことに第一集第二集と發行になりましたが、此集に収められた十八篇の兒童劇は、これだけの許りで多くはイラストやアンデルセンの童話から採られたり、時代的な要素を帯びて、日本

自由臺灣外佳作

- 飯島 光男(不 明) 豊島 泰(山梨)
柳田 英二(青 森) 飯守 武雄(和歌山)
赤松 武登(熊 野) 堀口 小(群馬)
福島 雄治(埼玉) 白澤 一郎(豊橋)
金子 多代(横 濱) 宗 寂照(松江)
荒木 清秋(松 山) 山崎 豊三(重 慶)
佐伯 達也(松 山) 高橋 雅子(東 京)
高井 はつ(宮 城) 櫻井 源吉(豊 橋)

幼年詩掲載外佳作

- 村野ゆき(歌 河) 渡邊 タカ(山 梨)
篠原 常一(山 梨) 奥水 泉(山 梨)
中坂石次郎(東 京) 山下 きよ子(梨)
齋藤 せつ(千 葉) 田邊 信靖(朝 鮮)
金丸 正則(小笠 原) 平林 武雄(東 京)
有馬 清行(香 川) 小野崎 一郎(茨 城)
宮本 清彦(神奈 川) 重里 平義(大 阪)
早山八千代(千 葉) 城山としみ(和歌 山)
井浪 喜里(京 都) 萩原 運(香 川)

綴方掲載外佳作

- 伊藤 威(京 都) 金子 多代(横 濱)
武部 敏男(鳥 取) 竹園寛代(長 野)
清水 裕(京 都) 藤原 徳二(山 梨)
田邊 信雅(朝 鮮) 渡邊 徹之(山 梨)
横山 啓(香 川) 藤本 前九郎(山 梨)
横山 啓(香 川) 清水 裕(京 都)

童話佳作

- 星野きくみ(千 葉) 和田 孝造(神奈 川)
吉田 寛(東 京) 前田 千代子(東 京)
後藤 賢三(東 京) 山崎 清子(東 京)
白洲 三子(兵 庫) 小林 政治(東 京)
滿川 文行(朝 鮮) 松田 春子(大 阪)
齋藤 邦一(紀 伊) 島 寛次(石 川)
今宮 正雄(福 岡) 山中 翠坡(栃 木)
松野 裕安(千 葉) 岡山 純義(神奈 川)
柳田 英二(青 森) 近藤 静馬(香 川)
齋藤 安吉(東 京) 近藤 ゆき(不 明)
高橋 隆保(静 岡) 村野 ゆき(不 明)
佐野 利作(静 岡) 井出 重利(静 岡)
齋藤 章(静 岡) 國島 静子(北 海道)

童話掲載外佳作

- 宇野 久子(茨 城) 村越 金藏(北 海道)
齋藤 嘉助(東 京) 藤崎あや子(京 都)
西田 光雄(神 戸) 下郷 傳吉(大 阪)

ホシロー・ヒルム第一回募集締切

「ホシロー・ヒルム」は大好評のうちに豫定通り、第一回の締切を終りました。驚くほど澤山の応募がありました。次號に入選者を発表します。そして、十一月號から入選者のものを掲げます。

金の星新誌友名簿

- 田井 美春(大 阪) 設楽ハル子(山 梨)
白井 隆(名古屋) 梅澤 太郎(千 葉)
田尻 雪夫(熊 本) 井上 春生(東 京)
川井 敬郎(秋 田) 西川 マル子(不 明)
佐竹美香里(高 崎) 山中 俊(栃 木)
田中 富重(山 梨) 中村 雅夫(東 京)
夏堀謙二郎(青 森) 五島 金市(岐 阜)
吉村みつな(大 阪) 齋藤 榮三(札 幌)
加藤 修平(千 葉) 村上 武彦(不 明)
西岡青妻子(東 京) 高橋 長一(青 森)
行宮 茂様(山 口) 山下三郎様(朝 鮮)
高橋忠平様(石 川) 蚕母校高三様(兵庫)
碓開校文學部様(青 森) 佐野 操様(山 口)
久保田順市(大 阪) 安藤利作様(島 根)
木下勝子様(大 分) 平塚留吉様(東 京)
吉川貞吉様(高 知) 竹内秋子様(滿 洲)
高梨若江様(大 阪) 堀 喜一様(北 海道)
行岡八重様(茨 城) (以下次號)

童話と舞踊 (久保富次郎氏著) 『子守唄』七つの子(月夜の兎)舌切雀(おてんとさん)の五つの童話に著者獨特の面白い舞踊を紹介した本です。寫眞版入で一々丁寧に舞踊の説明が出てきますから、何人でもこの本を讀めば、踊る事が出来るやうに出来てゐます。童話舞踊の盛んになった今日、このやうな本が出来たことは喜ばしい次第です。尙巻末に掲載童話の曲譜が一々添へてあります。菊列八十六頁 定價金壹圓八十銭 東京神田錦町一ノ十九 内外出版株式會社發行

有益に書かれたものです。何れも面白いもので家庭で子供達自身の力で演じられるやうに出来てゐます。(四六判箱入一八九頁 定價金貳圓廿銭 東京牛込早稲田 早稲田大學出版部發行)

マツ子の兵隊 (水谷まさる先生著)

イデア書院の児童圖書叢書の第七篇です。「居眠り王様」外十五篇の面白い童話を集めたもので、金の星誌上に掲載したことのある「細い竹笛」願ひの願ひ「何でも知つてゐる」集に収められてゐます。上品で、すつきりしてゐるのが著者の得意の作風です。尙巻頭は武井雄雄先生の苦心になり、各一篇ごとに同先生の面白い畫が添へてあります。(四六判箱入二九〇頁 定價金壹圓八十銭 東京牛込區山伏町 イデア書院發行)



讀者だより

▼椰子の葉をサラサラ揺らせた淡白色の風が窓を流れてきます。實際臺灣の夏は暑いかも知れませんが、西の空が赤くなる頃から紫色にかかり、青空に變じる間は想像も及ばない位に涼しいのです。一日やけたれた太陽にそして蒸しかへる様なアスファルトの熱氣に身も魂もとろけた後の爲かも知れませんが、何と云ふ涼しい風でせう。そして何と云ふ力のある風なうでせう。私は窓にもたれて夕方は、必ず好きな雨情先生の童話をうたつたりの「金の星」を愛讀するのよ。熊なない私を御指導下さる先生に感謝の事多からんとを祈ります。(愛知県 中島町のさん)

▼先日は御丁寧いろいろお手紙下さった上に、又々美しいエハガキをお送り下さいまして、嬉しさが心の底から湧き出て参ります。迷友とこんななまでに親んで下さる雑誌社は他にないと思ひます。そして雑誌社が示して下さることは私達でゐるものには感激の外ございせん。どうか御自愛に御自愛なさせつて私達をお導き下さい。日一日と隆盛に向ふ「金の星」の益々街天の御発展あらんことを偏にお祈り申す次第であります。(千葉県 友 武藤泰)

▼八月號を拜見いたしました一番感心致しましたのは、海達公子さんの幼年時でした。あしものすみれふまんてよかつた「何んといふ美しくやさしい詩でせう。ほらあみな禁じ得ません。それから野口先生「宮城野の萩」坂井様の「夜繪は何をするでせう」等皆うれいものばかりです。それに岡本先生復活年の八月號の時の私の希望は同じ八月に幾億の喜びとなつて届つてまゐりました。どうぞ

先生いつまでも「金の星」をおはなれ下さいますな。諸先生はじめ「金の星」の人々、どうぞ御自愛下さい。(京都 三須英三)

▼記者さま大變著くなりました。ご無事でございますか。八月號本日つききました。私を喜ばしたものが三つ。寺内先生の表紙が相變りす美しい事、第二岡本先生が又金の星の爲に繪を書いて下さること、第三つたない私の童話のつてから私の前金のことでございます。それが、何月號までだったかわからなくなつてしまひました。もう前金切れの時分だと思ひます。今月申一ヶ月前分お送りしますから宜敷く。若し前金が切れてゐるようでしたら、此度送る金額のうちからましひいて下さい。追々増えさせますから益々ご自愛下さいませでは。さよなら。(大阪 恩地淳)

▼記者様、幸と七月號を求める事が出来ました。あれから父は、内國銀行に入りました。私は、いつか一度筆をとつた事のある、雑誌の見習記者に入らずして、たゞ雑誌社の都合でしばらくのびる事になりました。今では貝原工務

をやめまして、父の友人の經營せる製綃所に勤めてをります。どうぞ御安心下さいませ。池上健治さま、いつも御親切にありがたう御座います。(大阪市外 阪野 潤)

▼「自己の創作に忠實でありたい」私ばかり投稿家諸氏に傳言する。實力によつて、熟練によつて出来上つた作品は貧弱でもその個人の創作に忠實なる行爲を我々は賞揚したい。極端なる模倣及び剽窃は決して我々のなすべきことではない。個人の人格を無視する下等な等の人のなすことだ。投稿家諸氏自愛せられよ。(時撰)

▼金の星のかぞへ歌  
一人で讀んでも面白い!!  
二人で讀んでも面白い!!  
金の星は面白い面白い!!  
二つとや!!  
見れば見る程面白い!!  
金の星は面白い面白い!!  
四つとや!!  
讀んでも面白く面白く!!  
金の星は面白い面白い!!  
五つとや!!

いつ見て讀んでも面白い!!  
金の星は面白い面白い!!  
六つとや!!

むづかし雑誌はやめにして!!  
金の星を愛讀しよ愛讀しやう!!  
七つとや!!  
金の星を愛讀しやう愛讀しやう!!  
八つとや!!  
金の星を愛讀しやう愛讀しやう!!  
九つとや!!  
子供の雑誌で一等良い!!  
金の星を愛讀しやう愛讀しやう!!  
十とや!!  
とちやん母ちやんよめと言ふ!!  
金の星をよめと言ふ。

(大阪市東區上船屋町 後藤静夫)  
▼野口先生僕を選んで下さつて有りたうございませ。僕は田舎者でまだ讀みたい本も充分に讀めないでゐるんですが出来る丈勉強致しまして進まれる丈進んで見たら思ひます。二年で見たか? 鹿島の小学校で先生に「雲一君」の話を承はり、切に感じ勇氣百倍して童話にペンを取り其の後、童話界に社路の野邊をさまよひ歩き、只今光り輝く金の星を見付け出して

無上に乗んでゐる者でございます可愛がつて下さい。お願ひ申します。(佐賀 齋藤)

▼七月號を見て寺内萬治郎先生の表紙繪は確に金の星獨特、本當の小供の雑誌の表紙畫です。小鳥先生のユーモアなお話には毎度乍ら敬服。十五少年漂流記「ラム王の一生」は特に感心しました。神野先生の誌上講演は今後と御願ひします。投書欄はみな香ばしくないと存じます。讀者だよりがおくこや、つまらぬかんげきや、自家廣告許りのも淋しい。越山堂式、眞道に非ず、赤い鳥の「鈴木三重吉主宰」の表紙文字の喜ばれない今日、金の星の犠牲的發展を望む。(白土 三二)

▼先生方には御變りも御座いませぬか。私も妹の愛讀してゐる御誌に投書させて頂きます。一、初めでございますが、是でよろしくございませぬか。二、又「一人で何題出しても云々」とあるのは此のやうに一時に童話二篇出してもいいのですか。右二件是非誌上で御答へ願ひます。(詠隆吉)

いのです。(記者)  
▼本誌を常日頃讀んでゐるものほど廣い日本中、決して私一人ではない。それは此の地球が私一個のものでは無いと同じやうに。さうすれば然うした意味に於て私、諸君の友達、一人である。けれど何故か密しい。それは或は異國の人の手紙など欲しいのかも知れない。幸ひ慰めれば呉れませんか。新潟縣柏崎町西學校村山方誌友 高橋一郎)

▼金の星君、僕は一才映畫の方に没頭してゐましたので、とんだ御無沙汰しました。一年振で君の健やかな姿をみて實際嬉しかったです。君も大きく立派になりました。然し僕達も大きくなりました。第一、僕は徴兵検査が済んだし、第二種でした。君の名をその儘號に行つて居ます。それから六つを貰つた妹の悦子も尋常一年に入學しました。今しきりに「青い眼の人形」を唄つて踊つてゐます。金の星君、一年振で岡本さんが再び奮起されましたね。兒童畫界の權威

▼お聞きなりました。先生方は御元氣ですか。どんなに暑くてもちつとも怠けずにはますよ。『金の星』の爲にお話し下さるので本當に嬉しく思ひます。八月號の美しかつたこと。それに岡本先生の御繪があつたので嬉しくて、夢中になつてしまひました。岡本先生も今度こそ『金の星』から永久に離れないうで下さいませ。先生がいらつしやらない一年間はどんなに淋しかったでせう。今度お止めになりますか。あつたら死んで化けて出ますくれん、と御願ひ申上げてます諸先生方御身御大切に。(大空夏子)



金の星社

十月號

出版だより

名著大系を定期的に発行します。

わが國出版界最初の一大試み

本社発行の世界少年少女名著大系は出版以來各方面から熱烈な歓迎を受けまして、續々増版する...

名著大系の第八編ギリシヤ オデッセー物語発行!!

一五〇

愛読者通信

古今の名著の内、最も雄大な物語りは何かといへば、このギリシヤ神話「オデッセー物語」であるといへるでせう。

▽武井先生の「アウ太郎殿治屋」を讀んで。アウ太郎殿治屋へ行つて見なす...

名著大系の第九編 シエークスピア物語 (近刊)

名著大系の第九編は「ウイリアム・テレル物語」が発行される確定になつてなりました。

本居長世先生作曲・野口雨情先生作詞 「お人形さんの夢」

寺内萬治郎先生の目もさめるばかりに美しい装幀にかざられて、發行になりました。

近刊 「家なき娘」に就て

古今の名著の内、最も雄大な物語りは何かといへば、このギリシヤ神話「オデッセー物語」であるといへるでせう。

一五一

金の星社 各編定價金九十銭 送料十五銭
グリン童話集
イソップ物語
古事記物語

# 懸賞創作募集

自由畫……山本 鼎先生選  
幼年詩……若山 牧水先生選  
綴方……編輯部選

〔意注〕 課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したごとや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに盡なり、詩なり、交なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號(切は九月廿八日)の以後は次號(廻る)發表は十二月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

童話……野口 雨情先生選  
話……齋藤 佐次郎先生選

〔意注〕 童話は十五行以内、童話は二十字詩二百行以内、優秀な作品は、推薦しまたは「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童話には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童話には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。親切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

## 一般讀者の創作

定價壹冊金四拾錢送料壹錢  
三ヶ月分三冊(送料共)壹圓二拾錢  
半年分六冊(送料共)貳圓四十錢  
一年分三冊(送料共)四圓八十錢  
但し新年號は特別號で五十錢です。か  
ら御註文の節はこの分だけ必ず加へ  
てお拂込み下さい。  
振替口座東京五九九五六番  
〔送〕 御註文は必ず前金で御拂込み下さい  
〔金〕 送金は振替が一番便利で御座います  
の切手代用は(巻切手)一割増です  
〔注〕 第何巻第何號よりと書いてください  
〔意〕 住所姓名は必ず書き添えてください  
廣告料は御照會次第お答へ致します  
大正十三年九月九日印刷納本(毎月一回)  
大正十三年十月一日發行

編輯兼發行人 齋藤 佐次郎  
印刷所 東京市小石川久野町百八番地  
印刷人 上村 新  
發行所 東京市外田端三百五十一番地  
金の星社  
電話小石川五三三八七番

# 金の星童謠曲譜集

第一輯 人買船  
本居長世作曲・野口雨情作謠  
(目曲) 人買船、青い目の  
人形船、青い目の  
歸る燕、十五夜お  
月さん

第二輯 一つお星さん  
本居長世作曲・野口雨情作謠  
(目曲) 一つお星さん、七  
つの子、鮎と雀、鶏  
さん、象の鼻、四  
丁目の犬

第三輯 青い空  
本居長世作曲・野口雨情作謠  
(目曲) 青い空、燕、雨夜  
の傘、でんく、蟲、  
雀の酒盛り、呼子  
鳥

第四輯 赤い靴  
本居長世作曲・野口雨情作謠  
(目曲) 赤い靴、山彦、三  
ヶ月さん、姥捨山、  
朝鮮館屋、眠り龜  
の子

第五輯 夢とり  
小松耕輔作曲・野口雨情作謠  
(目曲) 夢とり、おしやれ  
椿、つば子、十と七  
つ、雲雀の水汲、  
雀の機織り

第六輯 子守唄  
本居長世作曲・野口雨情作謠  
(目曲) 子守唄、櫻と小鳥  
乙姫さま、霜柱、  
葱坊主、藪の下道

東京市三軒橋 東下  
市五三 京目  
外一五 市四  
外八六 市八  
白眉 大出 白  
金の星社 振替 社  
電話 振替 社  
東京市小石川五三三八七番  
電話 振替 社  
東京市小石川五三三八七番



金の星

# 世界少年少女

編一第

（四六判箱入美本 内容百四十六頁 定價金九十錢 送料金十五錢）  
船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遭ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸つて来るまでの長い物語りです。世界の少年少女に、これ程深山讀まれた本はないといはれてゐる位有名なお話です。ですから、この本を讀まない者は、一生の不幸だとさへいはれてゐます。

## ロビンソン漂流記

編三第

（四六判箱入美本 内容百五十六頁 定價金九十錢 送料金十五錢）  
「ナポレオン物語」は即ちナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年がナポルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語を、わかり易く面白く書いたものです。一代の英雄ナポレオンの面影は、必ずや讀者に大きな反響を與へるでせう。

## ナポレオン物語

編三第

（四六判箱入美本 内容百七十七頁 定價金九十錢 送料金十五錢）  
イヌピナのある村にクイザノといふ男がいましたが、毎日船の物語りを読んでゐる内に、氣が少い變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、船海に飛つて本國に歸る氣にならなかつた。現るところで大失敗をして、處にあはれなれなるといふ愉快な物語りです。

## ドン・キホーテ

編三第

（四六判箱入美本 内容約百七十頁 定價金九十錢 送料金十五錢）  
アメリカ大陸を發見したコロンバスの物語りです。コロンバスが苦心檢閲して遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命と、大きな努力には、感嘆せすにはゐられません。その面白い物語りです。偉人の傳記として、實に興味深い物語りです。

## コロンブス物語

編四

（四六判箱入美本 内容約百七十頁 定價金九十錢 送料金十五錢）  
カリバアーが、難船して小人島に漂着し、それより大人國を遊ぐる、滑稽と奇抜な面白い物語りで、そこに人世の諷刺や、大いなる教訓が含まれてゐます。世の少年少女諸君に、興味と有益なる讀物として此の本をおすすめいたします。

## カリバアー旅行記

編五第

（四六判箱入美本 内容約百七十頁 定價金九十錢 送料金十五錢）  
カリバアーが、難船して小人島に漂着し、それより大人國を遊ぐる、滑稽と奇抜な面白い物語りで、そこに人世の諷刺や、大いなる教訓が含まれてゐます。世の少年少女諸君に、興味と有益なる讀物として此の本をおすすめいたします。

## 版二第

# 女著名大系

社編

東京市外田端三五一番地

發行所 金の星社

振替東京五九九六番

世界少年少女名著大系第六編・金の星社編

# ロビン・フッド物語

ロビン・フッドは英國に傳へられてある有名な物語りであつて、近くは我國へも活動寫眞となつて紹介され、映畫界の人氣者  
 ドー・ケラス・フエヤンクスによつて演ぜられ、世界的の評判になつてゐました。この金の星社の編になる「ロビン・フッド  
 物語」は、原作を忠実に紹介したものに、得難いものです。シャーウッドの森のロビン・フッドの生立ちから、最後に毒  
 殺されるまでの、變遷極りない物語りは、如何に讀者を喜ばす事とせうか。

四六判箱入美本  
 定價金九十錢  
 送料十五錢

世界少年少女名著大系第七編・金の星社編

# アラビアン・ナイト

アラビアン・ナイト程面白い物語りば、世界の童話文學を通じてないといはれてゐます。千年餘の間語り傳へられた物語り  
 である事を考へても、如何にこの物語りが讀者に興味を興へてゐるかわかります。傳説によれば、アラビヤの王が毎日入  
 りて来るといふお話を聞かされては、翌日は死んでしまふので、遂に一人の婦人が現れ、自ら遊んで玉座となつて、その夜から始り  
 じめて千一夜の物語つたのがアラビアン・ナイトといはれてゐます。

四六判箱入美本  
 定價金九十錢  
 送料十五錢

金の星社の發行の著名

野口雨情 先生著	青い眼の人形	野口雨情先生の名著 童話を渾身に集めた 壯麗無比の本です。	▽定價金壹圓八十錢 ▽送料十五錢
沖野岩三 郎先生著	父戀し	父の行方をたづね歩 く、姉と弟のあはれ なく物語りです。	▽定價金壹圓 ▽送料十五錢
三宅房子 先生著	家なき子	旅役者となつて諸國 をさすらひ歩く孤兒 の物語りで、原作は 佛國の名著です。	▽定價金壹圓八十錢 ▽送料十五錢
武井武雄 先生著	ブウ太郎鍛冶屋	武井先生獨得の面白 い童話と畫を集めた 本で、たまらなく面 白いです。	▽定價金壹圓六十錢 ▽送料十五錢
沖野岩三 郎先生著	讀本話赤い猫	日本で出来た最初の 童話讀本で、最も面 白くて爲めになる本 です。	▽定價金九十錢 ▽送料十四錢

東京市東區 振替電話 五九三五番 石川小舎 五九三八番 六九七番 金の星社

東京市東區 振替電話 五九三五番 石川小舎 五九三八番 六九七番 金の星社



歯を磨くなら

ライオンはみがきと

ライオン 歳萬 齒刷子

とおつかひなさい。

ライオン齒磨はお子様のお使ひ料として  
誠に良い齒磨です。

ライオン 歳萬 フラシは、お子様の口にも  
やうどよい、小さい形のがいろいろあり  
ます。